

# 向日庵

3



# 『向日庵』第3号

## 目次

1. 「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」  
東京大学大学院総合文化研究科教授 佐藤光  
(2019年2月23日 於：キャンパスプラザ京都) . . . . . 2
  
2. 「京都時代の柳宗悦 寿岳文章との交流を中心に」  
日本民藝館学芸部長 杉山享司  
(2019年5月26日 於：キャンパスプラザ京都) . . . . . 32
  
3. 「京の町並景観と寿岳章子」  
京都市立芸術大学名誉教授 街の色研究会京都代表 中村隆一  
(2019年10月5日 於：西向日コミュニティセンター) . . . . . 45
  
4. 「寿岳文章の青春 いかくに人間形成はなされたか」  
甲南大学名誉教授 中島俊郎  
(2019年10月5日 於：西向日コミュニティセンター) . . . . . 50
  
5. 「寿岳文章と向日庵本」  
特定非営利活動法人向日庵理事 長野裕子  
(2019年12月14日 於：長岡京市中央生涯学習センター) . . . . . 74
  
- 編集後記 . . . . . 100

# 寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究

東京大学大学院総合文化研究科教授 佐藤 光

寿岳文章（1900-92）は英文学者、書誌学者、和紙の研究者として知られています。寿岳の全体像については、中島俊郎先生の「ある英文学者の肖像：寿岳文章」（2012）があり、寿岳が編纂したブレイク書誌については、磯部直希氏の『『キルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期』（2008）があります。寿岳文章の仕事に関する研究は、ようやく始まったばかりです。今日は、ブレイク研究者としての寿岳文章に注目し、寿岳のブレイク研究の特色とその意義を明らかにしたいと思います。

## （1）寿岳文章とブレイクとの出会い

寿岳文章は現在の神戸市西区押部谷町にあたる「播磨の山村の貧しい寺院に、五人きょうだいの末弟として生まれ」ました（『私の英学事始』）。尋常小学校五年生を修了する十歳の時に、姉夫婦の養子となり、苗字が寿岳に変わります。1914年に、真言宗立京都中学（現在の洛南高校）に編入学して、寮生活を送りました。京都で寿岳はブレイクの作品に出会います。寿岳は柳宗悦とともに月刊誌『ブレイクとホキットマン』（1931-1932）を始めた時、その第1巻第1号に「ブレイク研究への序説」という随筆を寄せ、次のように記しました。

私の追憶は、私の中学生時代へ遡る。播磨の山奥から京都へ出てきた少年の心をいち早く捕へたものは、書店の存在であつた。私の足は殊に屢々烏丸仏光寺を東に入つた所にある東枝と云ふ書店へ赴いた。当時その店は最も敏速に新刊の書物を取り揃へてゐたかと思ふ。大正三年の夏のある日、私の眼はその本屋で薄茶色の紙表紙に包まれた雑誌‘未来’の第二輯に釘づけされた。それは中学二年生が読むには余りに高級な雑誌であつた。だが頁をめくるうちに、私の心は山宮允氏の訳出にかゝる‘ブレイクの詩集より’の幾つかの詩にいたく惹きつけられた。同じく山宮氏の訳されたブレイクの神曲挿画に関するエイツの一文は当年の私にとって余りに難解であつたけれども、奇異なる藝術家ブレイクの存在は、そこに複製された肖像と共に、感じやすい少年の心に深くも刻みこまれた。柳宗悦氏の‘キリアム・ブレイク’を手につけて、まづ数数の挿画に魅せられたのも、その本であつたかと思ふ。だがそれは、一ヶ月八円で暮してゐた

中学生には余りに高価であつた。（「ブレイク研究への序説」）

「東枝と云ふ書店」とは、東枝吉兵衛（1848-1934）が経営する東枝書店と思われます。京都府女子師範学校附属小学校研究部が刊行した『児童教養手帖』（1910）の奥付には、発行兼印刷者として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝吉兵衛」、発行所として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝書店」という記載が見えます。東枝書店は書籍の小売業以外に、出版業を営んでいたようです。なお、徳富蘇峰が設立した民友社の機関誌『国民之友』（1887-98）の1巻9号と1巻10号の巻末には、『国民之友』を扱う書店の一覧が「国民之友売捌所」として掲載されており、「京都仏光寺通り烏丸東入上柳町 東枝律書店」が含まれます。東枝吉兵衛は王陽明選『古本大学』（1882）、『改正区町村会議全書』（1884）、京都市参事会編『伯林市行政ノ既往及現在』（1901）などの出版を手がけており、東枝書店は京都における情報の配電盤として機能していたのでしょう。

この書店で寿岳は雑誌『未来』第二輯に出会います。ここには「ブレイクの詩集より」という表題のもとに、山宮允が訳出した『無垢の歌と経験の歌』（*Songs of Innocence and of Experience*, 1794）に由来するブレイクの7編の詩と、「ウィリアム・ブレイクとその神曲の挿画」と題して山宮が訳したW・B・イェイツのブレイク論が収録されていました。『未来』第二輯が出たのは1914年6月のことなので、寿岳が記した「大正三年の夏のある日」と辻褃が合います。この年の12月に柳宗悦の大著『キリアム・ブレイク』が洛陽堂から刊行され、寿岳は東枝書店でこれも手に取ったようです。同書の定価は三円でしたので、「一ヶ月八円で暮してみた中学生には余りに高価であつた」と寿岳が回想するのも無理はありません。寿岳はブレイクに惹かれた理由について、続けて次のように語りました。

自分でも変な象徴詩風の詩を作つて校友会の雑誌などに寄せてみた私は、ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、‘病める薔薇’などを愛誦してみたのであらうと思ふ。（「ブレイク研究への序説」）

自作の詩を雑誌に投稿していたところから、旧制中学時代から寿岳が既に文学に強い関心を持っていたことがわかります。おそらくそれは、寿岳少年がそのような文化的環境で育まれたからでしょう。たとえば、寿岳は実家の兄について、次のような思い出を語ります。

兄一人、姉三人、私は末子である。のちに東北大学の理学部数学科を出て、第一生命にはいり、第二次世界大戦が終ってからはその副社長をしていた亡兄・鈴木敏一の苦学時代、休暇で帰ってきた二十歳前後の兄は、五歳前後の私を庭へつれ出し、松の古木をぐるぐる廻って鬼ごっこをした。私の手が兄の袖に触れそうになると、兄は“dangerous”と叫んで、つと私から離れる。「おッとあぶない！」という意味の英語を、私に覚えさせる魂胆だったのだろう。私はそれを「デンジャラ・ウス」と受けとり、猿蟹合戦の物語に結びつけ、ウスが頭上に落ちてくるからあぶないのだと連想した。この要領で私は兄から十いくつかの英単語を教えられたが、“dangerous”の記憶だけが少しも薄れないのは、それが私の覚えた英単語第一号だからであろう。

兄から聞き覚えた英語やフレーズを「デンジャラ・ウス」式に片仮名でしるしておいた小さな帳面が、かなり後まで故郷の寺にあった。（「私の英学事始」）

別の随筆によると、寿岳とその兄との間には十七歳の年の差があったそうです（「わが青春」）。幼い寿岳少年にとって、東北帝国大学理学部数学科に通う兄は、文字通りに仰ぎ見るような存在と映ったことでしょう。大学生の兄が年の離れた幼い弟の遊び相手をしながら、英語の単語を教えようとする光景は微笑ましいものです。この微笑ましい光景において、寿岳少年の反応に注目したいと思います。寿岳少年は、馴染みのない“dangerous”という英語の単語を理解するために、猿蟹合戦の昔話から、臼が屋根から落ちてくる場面を想像しました。「デンジャラ」は落ちてくる臼の擬音語としても解釈できます。おそらくここで重要なのは、“dangerous”という英単語の意味として「おッとあぶない」という日本語を暗記するのではなく、寿岳少年が自分の頭で考えて、自分の親しんだ言葉に置き直したということでしょう。ここに見られるのは、与えられた知識を鵜呑みにするのではなく、幼いながらも主体的に理解しようとする姿勢です。語呂合わせによる古典的な英単語記憶法ではありますが、未知のものを既知のものに引き寄せて、その類似を手掛かりにして理解するという方法は、未知のブレイクを既知の仏教思想で理解しようとした寿岳のブレイク研究の方針と重なります。寿岳少年の「デンジャラ・ウス」式英単語理解は、寿岳が関西学院に提出した卒業論文「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華厳思想の用語」の発想を先取りするものであった、と言えるのではないのでしょうか（筆者注。本講演会の当日に井上琢智関西学院大学前学長の御厚意により、寿岳文章の卒業論文の複写を閲覧することができた。この複写を見る限り、寿岳が関西学院に提出した卒業論文の正式な題目は「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」である。「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」の中で、寿岳が卒業論文の題目として

記した「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華厳思想の用語」は、論文の内容を説明するためのものだったようである。

さて、寿岳は中学生時代について、次のように振り返ります。

宗門の中学だけに、仏典や漢籍の先生はそろっていたが、英語ははなはだしい玉石混淆であった。玉は当時の京都帝国大学文学部に在学するかたわら、学資かせぎに教えにきていた学生たち、石は義兄と同様多少英語がわかる程度の僧侶。玉にめぐりあわかったら、おそらく私は英語や英文学をめざさず、生物学の方面に志していたかもしれない。生物学には会田竜雄という有名な先生がおり、その先生に私はすっかり心酔していたのである。（「私の英学事始」）

会田竜雄（1872-1957）は「メダカの体色遺伝研究」で学士院賞を受賞した動物学者であり、第五高等学校や京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）などの教授を歴任しました。『アーロン収容所』で知られる会田雄次（1916-1997）の父親にあたります。寿岳が「玉」と呼ぶ京都帝国大学の学生から英語を習ったことで、寿岳の英文学に対する関心は深まったようです。

「英語青年」「中外英字新聞」などの英語研究雑誌の購読者となったのは、中学四年生の中頃からであったと思うが、「英語青年」はさすがに高級で、歯が立たず、主幹佐川春水の「英語の日本」に最も深くなじみ、親しんだ。（「私の英学事始」）

『英語之日本』は1908年から1917年まで続いた英語学習者向けの雑誌です。英米文学作品の紹介、日本の自然や文化に関する随筆、実用会話の例文などが、詳しい文法事項の解説とともに、英語と日本語の対訳形式で掲載されました。斎藤秀三郎（1866-1929）による「君が代」の英訳が載ったこともあります。『英語青年』と比べると、『英語之日本』は日本文化発信型の傾向があり、寿岳が「最も深くなじみ、親しんだ」理由はそこにあるのかもしれませんが。

愛読した英語学習雑誌に加えて、中学生時代に大きな影響を受けたのは、文法書であった、と寿岳は言います。

しかし、中学五年生のとき、市河三喜博士の『英文法研究』（大正元年初刊）と、細江逸記博士の『英文法汎論』（大正六年初刊）が私に与えた学問的興奮は格別である。中学卒業記念の修学旅行で、はじめて東京の土を踏んだとき、私が神田の古書店で、財布の底をはたき、Sweet の *New English Grammar* を買い求めたのも、まったくこの両書の影響によるものであった。学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ。（「私の英学事始」）

修学旅行で初めて上京した時に、「財布の底をはたき、Sweet の *New English Grammar* を買い求めた」という記述から、寿岳が英文法に強く魅了されたことがわかります。さらに重要なことは、英文法から英語という言葉の構造を学ぶだけでなく、「学問一般に通ずる科学的な研究方法」を学んだ、と寿岳が述べているところです。寿岳のブレイク研究は、寿岳が振り返るように、「ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、『病める薔薇』などを愛誦」することから始まりましたが、やがて、ブレイク研究に関連する書籍や論文の書誌情報を網羅的に収録した『キルヤム・ブレイク書誌』を刊行するに至ります。先行研究の蓄積を年代順に整理し、その特徴を把握することは、主観的な批評ではなく、事実に基づいた実証的な研究を行う上で必要不可欠な作業です。寿岳の実証的な研究姿勢の基礎は、文法書を通して、英語という言葉を一体系的に学習することによって形作られた、と言えるのではないのでしょうか。

この時代の中学生にとって、英文法が持った意味について、外山滋比古は次のように言います。

かつて、日本の中学生にも英語好きがすくなくなかった。どうして好きになったのかは、はっきりしないが、なんとなくおもしろかったのである。新しいものにふれるよろこびのほかに、文法の知識が知的で、それによって頭が整理されたように感じられたことと関係しているようにも思われる。日本語でそれに対応する知識を与えられなかっただけに余計である。（『日本の英語、英文学』）

英文法に対する寿岳の態度は、外山の見解を裏書きします。寿岳が実証性と客観性に高い価値を置いたことは、明治期にお雇い外国人として帝国大学で教鞭をとったバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）に、日本語学を築いた功績を認めたところからも明らかです。寿岳は終戦直後の1945年9月に、次のような意見を発表しました。

明治十九年の春に、王堂が、文科大学で日本語の先生になったということは、いろいろな意味で興味が深い。それは、一面では時の文部大臣森有礼や、文科大学学長外山正一の進歩思想を反映しているし、また、当時の日本の学術が、日本語さえ外国人から学ばねばならぬほど水準の低いものであったことをも物語っている。国家に対する侮辱だといきまく国学者、またそうした国学者に迫随して、いたずらに憤慨する反動者流もでてきたが、わが国の真に科学的な国語研究の基盤は、王堂によって確立されたというのが真相であり、上田萬年、金沢庄三郎、岡倉由三郎、佐佐木信綱、新村出など、わが国の歌学や国語学や言語学などに新風を拓いた古人今人は、みな王堂の講筵につらなつたか、さもなければ身に近くその学恩を受けた人たちばかりである。（「王堂と八雲」）

英語の文法書をもとに、英語の読解力だけでなく、科学的な思考法も身に付けた寿岳は、購読していた英語学習雑誌に関西学院の紹介が載っていたことがきっかけとなり、関西学院高等学部英文科へ進学します。入学したのは1919年4月のことであり、教員の一人に佐藤清（1885-1960）がいました。佐藤は仙台出身で、東京帝国大学文科大学英文科で夏目漱石の講義を聴講し、1913年から1923年まで関西学院で教鞭を執りました。この間に1917年4月から1919年3月まで、関西学院から留学のために英国へ派遣されます。第一次世界大戦末期のロンドンで、大英図書館に通って英文学を研究し、社会主義者であり、ブレイクの愛好家でもあったエドワード・カーペンターと親交を結びました。佐藤が帰国した1919年3月の翌月に寿岳は関西学院に入学したことになり、寿岳が在学した期間に、佐藤はジョン・キーツ、パーシー・ビッシュ・シェリー、ウィリアム・モリス、ウィリアム・ブレイクについて精力的に論文を発表します。寿岳がウィリアム・ブレイクをテーマとして卒業論文を執筆し、関西学院を卒業するのは1923年の3月であり、翌月の4月に佐藤も関西学院を退任し、その後、東京女子高等師範学校教授、京城帝国大学教授、東洋大学英文科教授を歴任しました。二年間の英国留学を終えて帰国したばかりの佐藤から、ブレイクを含む英国ロマン派詩人とウィリアム・モリスについて、寿岳は多くの知識を得たものと推測できます。

## （2）ブレイク研究への助走

卒業論文のテーマにブレイクを選んだ寿岳は、『ウィリアム・ブレイク』の著者である柳宗悦と初めて会います。その経緯について、寿岳は次のように語ります。



あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた私が、関西学院文学部に在学中、英語科中等教員の試験を受けに上京した折を利用して、赤坂高樹町のお宅に柳さんを訪ね、ブレイクの版画複製や書物などを見せて貰ったのは、大正十二年二月二十四日（土曜日）の午後であった。その頃柳さんは面会日をきめていたので、もし面会日でなくて会って貰えなくてはとの懸念から、大学病院に入院中の足助素一氏に紹介状を書いて貰い、中学時代の同窓であり、当時有島武郎氏の家にはいた岩瀬法雲と一緒に尋ねたのであった。柳さんは初対面のこの二青年を快く引見してくれた。その日の私の日記は、柳さんを「親しい感じの人」と描き、「宗教の話に時移り、日の暮れかかる頃帰る」とも記している。（『絵本どんきほうて』由来）

足助素一（1878-1930）は叢文閣の創業者で、有島武郎と親交がありました。寿岳が言及した『宗教とその真理』と『宗教的奇蹟』は、どちらも叢文閣から刊行されており、足助素一に紹介状を書いてもらうという寿岳の判断は極めて的確だった、と言えます。

寿岳は「あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知」った、と書きました。つまり、柳の『キリアム・ブレイク』を読んでブレイクに関心を持ったのではなく、既にブレイクに関心を持っていたところに柳の『キリアム・ブレイク』と出会い、柳宗悦という名前を心に留めた、ということです。既に見ましたように、寿岳がブレイクに関心を持つきっかけとなったのは、山宮允によるブレイクの訳詩でした。寿岳はブレイクを題材として卒業論文を書くことを、関西学院の二年生の頃に考え始めたようです。寿岳が柳に引き寄せられたのは、柳の『キリアム・ブレイク』に出会ったためではありますが、それ以上に柳の宗教哲学の研究に魅了されたからだ、と寿岳は言います。これは、ブレイクに対する寿岳の態度を考えると、重要な手掛かりとなります。

日本におけるブレイク受容史において、ブレイクに引き寄せられた詩人として、三木露風（1889-1964）と千家元麿（1888-1948）を挙げるすることができます。いずれもブレイクの『無垢の歌と経験の歌』に共感した、という共通点を持っています。しかし、善と悪を相対化し、善と悪を切り分ける規準を設定することそのものに、差別と争いの原因を見てとったブレイクの思想を、彼らがどこまで理解していたかどうかは疑わしい、と言わざるを得ません。象徴詩人として知られる三木露風は、ブレイクの影響下で恋愛詩を書きましたが、それは情緒的な恋愛詩でしかありませんでした。ブレイクが、想像力を駆使するための精神と身体的自由こそがキリスト教の福音である、と説き、教会を神と人との間に介入する権力機構とみなしたのに対し、露風はトラピスト修道院に入ってカトリックに帰依し、聖職者を信頼して教会の教えを守る喜びを詩に歌いました。千家元麿はブ

レイクの「無垢」という概念に共感し、ブレイクの作品を「楽しい芸術」と呼びます。ブレイクにおいて「無垢」と対になる「経験」の世界に千家の目が向いていたならば、18世紀英国の政治と宗教に対するブレイクの熾烈なまでの糾弾と社会改革を望む強い意志に気が付いたでしょうし、ブレイクを指して「楽しい芸術」という表現を使うことはできなかったことでしょう。また、ブレイクが『天国と地獄の結婚』(The Marriage of Heaven and Hell, 1790)に書き記した「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉が持つ政治性を理解していたならば、第二次世界大戦期という殺戮と破壊の時代に、ファシズムの波に押し流されるようにして、戦争賛美の詩を次々と発表するというのを、千家はしなかったはずで、三木露風も千家元麿も、ブレイクの社会改革者としての側面を見落とししたという意味で、ブレイクを表面的にしか理解していませんでした。その原因は、彼らの関心がブレイクの詩的表現にとどまり、その思想に迫ろうとしなかったところにあります。

三木露風や千家元麿の事例とは異なり、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた」という寿岳の言葉から、寿岳のブレイクに対する関心がブレイクの思想にまで及んでいたことが見てとれます。なぜなら、柳が1910年代後半から1920年代にかけて続々と発表した神秘主義思想を中心とする宗教研究の論文は、ブレイク研究の延長線上にあるからです。たとえば、『宗教とその真理』に柳は次のように書きました。

余は例へば基督教の存在が直ちに仏教の非認であるとは思はぬ。一宗の存在が只他宗の排斥によつて保たれるのは醜い事実であらう。多くの宗教はそれぞれの色調に於て美しさがある。然も彼等は矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであらうか。互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩どるのである。(『宗教とその真理』)

柳は、複数の異なる宗教が存在することを、そのまま受け入れます。ある宗教が正しい宗教であつて、それ以外の宗教は墮落した宗教である、という排他的な見方を柳はとりません。むしろ、柳は、宗教と宗教との対立を醜いものとみなしました。複数の異なる宗教が共存する状態で、それぞれの宗教が持つ世界観に触れて、もの見方が多面的になることに価値を見出しました。「互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩どる」という言葉は、それぞれの土地の文化と伝統に育まれた民藝品に、多種多様な美を見てとった後の柳の活動につながります。では、なぜ、柳にとって、宗教は多種多様なのでしょうか。

宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない。特殊を無視した一般の宗教は単に架空な構想に過ぎない。或者は豊かな詩情に恵まれてゐる。或者は冥想の力に優れてゐる。或者は知解に秀で、或者は異常な想像に富んでゐる。人々は彼が個性の気質に基いて彼が宗教を持たねばならぬ。（「個人的宗教に就て」）

一人一人の個人に宿る個性を、柳は神聖なものとみなします。もし、神が存在するとすれば、個性は神から授けられたものであり、多種多様な個性が地上に存在するということは、万物の創造主としての神の力の証となります。したがって、柳によれば、個性の多様性に比例する形で、多くの異なる形の宗教が存在し、神に関する多種多様な理解が生まれるということになります。

個性を神聖視する柳の宗教哲学は、柳のブレイク研究に遡ります。柳はブレイクについて、次のように語りました。

個性において世には何等の宗教がなく哲学がなく藝術がない。人格の偉大とは凡てその特殊的個性にある。彼が若し自己の表現を躊躇したならば彼には何等の製作がない。ブレイク自らの価値は凡て彼の異常な性情にあつた。（『キリアム・ブレイク』）

柳は宗教と哲学と芸術の源を個性に見ます。ここで柳がブレイクを形容するために用いた「異常」という言葉は、それが日常的な文脈で否定的な意味で用いられることが多いとすれば、柳はその否定的な用法を逆にとりました。一般的に「異常」とみなされるような際立った特徴こそが、柳によれば、個性の現れでした。これは、個人に特有の性質や能力を遺憾なく発揮することに価値を置く芸術観であり、志賀直哉の言葉を借りれば、「十人十色、勝手に自分の仕たい事をする」（「蝕まれた友情」）という雑誌『白樺』の方針と合致します。柳がブレイクを高く評価することができたのは、個性を規準とする評価軸が既に柳の中に定まっていたからであり、それはブレイクの宗教観と芸術観に柳が共鳴する作業でもありました。ブレイクの『天国と地獄の結婚』に、次のような言葉があります。

神を敬うことは、他人の中にある才能を、その天賦の才能に応じて互いに尊ぶことであり、最も偉大な人を最もよく愛することである。偉大な人を妬んだり中傷したりすることは神を憎むことである。なぜなら

それ以外に神はないからである。(『天国と地獄の結婚』)

ブレイクが用いた「才能」という言葉を「個性」に置き替えれば、そのまま柳の宗教論になります。「人格の偉大とは凡てその特殊的個性にある」という柳の言葉は、ブレイクの神に関する理解を要約したものだと言えます。『天国と地獄の結婚』には、「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉も見られます。「生きとし生けるものはすべて神聖」であり、人の活動を通して神が地上に姿を現すのであれば、宗教や哲学や芸術に見られる多様性は、神の意志の反映ということになります。各地に多様な宗教が存在することについて、ブレイクは次のような見解を示しました。

すべての民族のそれぞれの宗教は、あらゆるところで預言の精神と呼ばれている詩的精霊を、それぞれの民族が異なる受け取り方をしたことに由来する。(『すべての宗教は一つである』)

ここに表明されたブレイクの宗教観は、「宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない」という柳の言葉と重なります。柳は、地球上に存在する様々な宗教の価値を認めて、それぞれが自立して共存する可能性を探りました。この姿勢は、ブレイクの宗教論と軌を一にしています。宗教と宗教との確執を乗り越える一つの手がかりとして、柳は神秘体験に注目しました。

神秘の経験に於て人は宗派を持たぬ、宗派や主張は後に立場によつて加へられた作為である。神秘に於て、一切の宗教は一つである。(「宗教哲学に於ける方法論」)

「一切の宗教は一つである」という柳の言葉も、『すべての宗教は一つである』というブレイクの言葉を想起させます。柳の神秘主義思想研究には、ブレイク以外にウィリアム・ジェームズからの影響が見えますが、内容と表現の両方において、柳の宗教研究がブレイク研究の延長線上にあることは明らかです。「ブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた」という寿岳の回想は、ブレイクを思想家として理解する上で、最も適切な道筋を寿岳が歩んだことを物語っています。

関西学院英文科を卒業した寿岳は、1924年に京都帝国大学文学部に入学します。1925年に、英文科助教授の

石田憲次の紹介で、河上肇の長男である政男の家庭教師となり、英語を教えました。後に、寿岳は「私の青年時代は、柳、河上、この二人の優れた人物によって形成されていくと言ってもいい」と振り返ります（「柳宗悦を語る」）。当時を寿岳は次のように語ります。

ついで私は京都大学文学部英文科に進み、ひきつづきブレイクの思想研究をさらに深めていった。すでに私は岩橋静子と結婚し、大学卒業時には二児の父でもあった。経済的には大変であったが、妻とともに私は大いにはたらき、かつ研究にいそしんだ歳月であった。京大での卒業論文の題目は「ウィリアム・ブレイクの神話大系について」である。（「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」）

寿岳が京都帝国大学を卒業したのは1927年であり、ブレイク没後100年に当たります。この年の12月10日から16日まで、柳宗悦、山宮允、寿岳文章が企画して、京都博物館で「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」を開催しました。寿岳によると、この展覧会にほとんど毎日のように朝早くからやってきて、ブレイクの絵をじっくり鑑賞していたのが村上華岳であったといえます（「ブレイクと華岳」）。また、寿岳はこの展覧会に関して、柳にまつわる興味深い逸話を書き留めています。

ブレイク百年忌記念展のとき、この催しを耳にした京都大学の長崎太郎氏が、ブレイク版画の複製でなくオリジナルを一枚もっているから、貸してもよいとの申し出があった。しかし柳さんは、そんなはずはない、複製だろうと行ってとりあげない。これをもれ聞いた長崎氏は憤慨し、実物が複製かたしかめもしないで、複製だろうときめてかかるような人間には、貸せと言っても貸してやらぬと、かたくなになってしまった。長崎氏、今は故人であるが、京都市立美術大学の学長をつとめていたその晩年、私との間に文通があり、当時のいざこざを水に流してもらったが、柳さんの強烈な自信ゆえに生じたこの種の感情のもつれは、私の知るだけでもずいぶん多いようである。（「宗悦・柳さんのおもかげ」）

長崎太郎（1892-1969）は京都帝国大学法科大学を卒業後、日本郵船に入社し、駐在員としてアメリカに長く滞在しました。この間にブレイク関係の資料を熱心に収集しました。帰国後、武蔵高校教員、京都帝国大学学生主事、山口高校校長を経て、京都市立美術専門学校校長として新制大学昇格作業を行い、京都市立美術大学学長を務めます。これらのブレイク関連資料の一部は、その後、京都市立芸術大学の所藏品となり、その中には

1797年に制作されたブレイクの銅版画『夜想』(Nights Thoughts)が含まれています。寿岳が記した柳と長崎太郎をめぐる思い出からは、柳の人柄がしのばれるだけでなく、柳のブレイク研究と宗教研究から大きな影響を受けながらも、寿岳が公正な眼で柳を見ていたことが伝わってきます。

関東大震災が発生した翌年の1924年に、柳は京都市上京区吉田下大路町へ移り、さらにその翌年の1925年に吉田神楽岡へ転居しました。寿岳は柳との交流の始まりについて、次のように振り返ります。

翌年、柳さんは吉田山の東麓の神楽岡へ転宅したが、柳さんと私との交遊が密となるのは、昭和二年の十二月中旬に、京都博物館で、ウィリアム・ブレイク百年忌記念展を開くときだったその年の、春すぎてからである。そのころ、私は南禅寺山内の僊壺庵に住んでいた。吉田山東麓と南禅寺との距離は、徒歩三十分ならず。黒谷を抜けて岡崎へ出ても、鹿ヶ谷から疎水に沿い、いわゆる哲学者の道を取っても、当時は快適な散策のコースであった。記念展の出品物うちあわせのため、よく往き来した。しかし三つの学校で教え、時間的制約の多かった私が神楽岡へ赴くよりも、柳さんが南禅寺へ来る場合が、はるかに多かったように思う。(「柳さんとの日々」)

寿岳の回想によると、ブレイク没後100年記念の展覧会を開催した1927年に、寿岳は『キルヤム・ブレイク書誌』の編纂を始めました(「自装本回顧」)。京都帝国大学教授であり、言語学者であり、後に『広辞苑』の編者として知られることになる新村出(1876-1967)が、神戸で「ぐろりあそさえて」という出版社を設立した伊藤長蔵に寿岳を紹介し、『ブレイク書誌』刊行事業が始まります。『キルヤム・ブレイク書誌』の序文に、寿岳は次のように記しました。

さうして、着手以来十三ヶ月の日子を閲した今日、漸く本文全部の脱稿を見たのである。もとより私の‘ブレイク書誌’は、その完成に十八年の歳月を要したKeynes博士が不朽の名著に比ぶべくもないが、またその名著なくば私の書誌は実現し得なかつたのであるが、収載文献の数に於いて、私の書誌が、Keynes博士のそれに比し、倍を遙かに越えてゐる事實は、博士の書誌はあれど、なほこの書が決して無意義な存在ではないことを明かにしてくれるであらう。(『キルヤム・ブレイク書誌』)

寿岳が触れた「Keynes博士が不朽の名著」とは、ジェフリー・ケインズ(Geoffrey Keynes, 1887-1982)が

編纂して1921年に出版した *A Bibliography of William Blake* のことです。経済学者ジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946) の弟にあたるジェフリー・ケインズは、ケンブリッジ大学で医学を学んでいたとき、ブレイクが旧約聖書『ヨブ記』の挿画として制作した銅版画の連作に出会って、ブレイクの虜となりました。ケインズは、ブレイクが制作した詩集、絵画、銅版画、ブレイクに関して書かれた伝記、研究書、論文、随筆を、出版年代順に整理して、書誌情報を目録にまとめる作業を1908年に開始し、13年後の1921年に書籍として刊行します。完成までに13年を要したのは、書誌編纂作業そのものが時間と労苦を必要としたことに加えて、1914年に始まった第一次世界大戦にケインズが軍医として従軍したためでした。

書誌学とは何でしょうか。寿岳の定義を引用します。

最も簡明に記述するならば、それは「書物に関する科学」(the science of books) である。(「書誌学とは何か」)

関西学院と京都帝国大学の卒業論文でブレイクを論じてはいましたが、寿岳の本格的なブレイク研究は、ブレイクに関する書誌を編纂することで始まります。それは、ブレイクについて出版された「書物に関する科学」という形をとりました。寿岳によると、書誌学とは、蒐集、列举、記述、分析、結論の五つの段階から構成されます(「書誌学とその職分」)。まず、必要な文献を集めます。集めただけでは乱雑な状態のままなので、集めた文献を整理して列举しなければなりません。次に、それぞれの文献の出版地、出版社、出版年、頁数などの書誌情報を記述します。これは文献の書誌情報を一覧できるように可視化する作業です。その後、書誌情報に誤りがないかどうかを確認します。出版年が脱落したり、誤った情報が記載されている文献については、関連資料から出版年を復元し、必要に応じて、訂正します。これが分析という段階です。最後に、これらの書誌情報を年代順に並べたとき、新たな事実が見えてきます。この発見こそが、書誌を編纂した結果、明らかになる結論です。

書誌学とは、一言で言うならば、書物に関して事実を確定する作業です。ブレイク研究という領域に限定した場合、ブレイクに関する書誌の作成とは、ブレイクに関して、いつ、どこで、どのような研究書が刊行され、どのような研究論文が発表されたか、というブレイク研究史を確定することを意味します。先行研究の動向を把握して、既に何が明らかにされたのか、まだ何が明らかにされていないのか、を知らなければ、新しい研究はありえません。たとえば、凸レンズと凹レンズを組み合わせることによって、遠くのを拡大して見ること

ができる装置を発明した、と得意気に語る人物が現れたと仮定して、どのような反応が予想されるでしょうか。あなたはガリレオ式望遠鏡を知らないのですか、あなたが発明したと主張するものは、既に17世紀にガリレオによって発明されていますよ、というのが大方の反応でしょう。望遠鏡について新たな工夫をしたいのであれば、屈折式望遠鏡と反射式望遠鏡という光学望遠鏡を経て、電波望遠鏡と宇宙望遠鏡が発明されたという望遠鏡の歴史を知る必要があります。同じように、ブレイク研究史において、ブレイクについて何が明らかにされて、何が明らかになっていないのか、ということ踏まえなければ、ブレイク研究に新たな貢献をすることはできません。研究とは、常に、従来の研究に対する修正、または追加という形をとります。そのためには、従来の研究の全体像を把握しなければなりません。新説として出した自説が、50年前に出された説と瓜二つだったと判明した場合、もし、それが剽窃であったならば、研究者倫理の観点から問題外です。たとえ、もし、それが先行研究を見落としたことによる偶然の一致だったとしても、そのような重要な先行研究を見落としたことは、研究者として誇りにできることではありません。研究という営みは、先行研究の蓄積の上に成り立ちます。寿岳はケインズが編纂したブレイク書誌について、次のように言いました。

Keynes 博士が本書の編纂に着手したのは、1908年の12月、博士がまだCambridgeのundergraduateであった頃で、世界大戦争が刊行の時期を幾らかおくらせたとは言へ、出版までに実に十三年の長年月を要してある；もつて本書の規模と価値とがいかに大きいものであるかを想像し得るであらう。言ふまでもなく、書誌は文献の文献であり、当該研究の根柢をなす基礎工事である。本書はその意味に於いて、一切のブレイク文献のうち最も貴重なる文献と言ふを得べく、過去のあらゆるブレイクの文献を蔵するのみならず、未来のブレイク研究者に最も信頼すべき出発点と与へる。(『キルヤム・ブレイク書誌』)

寿岳は書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」、「最も貴重なる文献」、「最も信頼すべき出発点」と位置付けました。研究史という事実の蓄積を重視する姿勢は、科学的な研究姿勢と言い換えることができます。この研究姿勢の源は、英文法から知的刺激を受けた寿岳の中学生時代に遡ることができるかもしれません。既に見ましたように、寿岳は「学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ」という言葉を残しています。あるいは、柳のブレイク研究の影響も想定できます。柳は『キリアム・ブレイク』の巻末に「主要参考書」という項目を設け、当時入手可能であったブレイク関連の文献を「複製本」、「活版本」、「書翰集」、「伝記」、「評論」、「雑誌」、「目録」、「複製」という見出しのもとに分類して一覧表にし、それぞれの内容



の概略を紹介しました。書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」とみなす姿勢は、柳と寿岳に共通しています。書誌を重視する二人の姿勢は、雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン研究入門」として柳が連載した「第一篇 ホキットマン書誌略解」と、柳の依頼を受けて寿岳が後に作成した *A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan: From 1878 to 1935* (1947) にも見るすることができます。

寿岳が編纂した『キルヤム・ブレイク書誌』には、内容と形態のそれぞれにおいて特筆すべき意義が認められます。ケインズのブレイク書誌に登録された情報の中に、寿岳は日本で刊行されたブレイク関連の文献情報を埋め込みました。欧米で英語やフランス語で書かれた文献と、日本語で出版された文献とを区別することなく、寿岳はすべてを年代順に並べました。結果として、ブレイク研究史全体を見渡すことができるようになり、日本語で刊行されたブレイク関連の文献の位置付けが一目でわかるようになりました。

もう一つの特徴は、『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀です。寿岳は同書の装幀について、次のように回想します。

表紙の材料としては、特装本は青田君の織った紬、並装本は皮と紺紙の四半装幀ということに伊藤氏と私の意見が一致して、題箋、扉などの意匠は柳さんに一任することになった。（「自装本回顧」）

私の書誌は、本文も挿画も全部鳥の子を用い、印刷にはヨーロッパ中世の揺籃期活字本に則って rubrication（朱刷）を施し、装幀も柳宗悦氏の指揮に従ったため、少なくともヨーロッパ文芸に関して日本で出版された他のいかなる書物よりもすぐれた芸術的な効果を持ちえた。（「総合芸術としての書物」）

青田とは染織家の青田五良（1898-1935）であり、工芸家の黒田辰秋とともに、柳の提案を受けて、1927年に上賀茂民芸協団の一員として活動しました。寿岳の証言から、紙とインクと活字と表紙とその他の装幀について、寿岳と柳と伊藤が知恵を出し合って、書物としての最終的な形態が決定されたことがわかります。結果として、表紙に紬を用いた特装本は1冊70円、皮を用いた並装本でも1冊60円という高価な書物となり、発行部数は200部の限定版であったため、ブレイクの研究史を世に広める、という本来の目的を達成することができたか、という点については疑問が残ります。しかし、寿岳と柳にとって、内容だけでなく、外的な形態にも心血を注いで書物を作ったという意味では、その後の向日庵私版本や雑誌『工藝』の制作につながる先駆的な企画であった、と言えるでしょう。

### (3) 雑誌『ブレイクとホキットマン』

1929年5月に柳は濱田庄司とともにシベリア鉄道でヨーロッパへ向かいます。旧知のラングドン・ウォーナー (Langdon Warner, 1881-1955) にハーヴァード大学での講義を委嘱されたためです。英国到着後、濱田はバーナード・リーチ (Bernard Leach, 1887-1979) の工房にとどまったので、柳は大西洋を一人で渡ってアメリカに向かいました。伊藤長蔵から資金援助を受けた柳は、講義を行うかたわらで、アメリカの詩人であるウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) に関する文献を収集しました。この時に集めた資料をもとにして、柳は雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン書誌略解」を書くこととなります。

雑誌『ブレイクとホキットマン』誕生の経緯について、寿岳は次のように語ります。

今からふりかえてみると、1927年の12月、恩賜京都博物館で、百年忌記念のブレイク展を開催したのを契機に、ブレイク・ホキットマン両詩人を結ぶ研究誌を出そうじゃないかとの発想は、柳と私の二人にあった。そして、ブレイクに関しては私が、ホキットマンに関しては柳が、内容の責任をもつことにきまっていた。(「柳宗悦と英米文学とのかかわり」)

雑誌『ブレイクとホキットマン』は1931年1月に創刊され、1932年12月まで続き、全24冊が刊行されました。『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀に寿岳と柳が向けた情熱は冷めておらず、『ブレイクとホキットマン』の装幀も考えに考えぬかれたものとなりました。寿岳は1巻1号の「雑記」で、次のように説明します。

私の考案を中井商店の濱阪誠一君に伝えて越前へ注文した紙は、見らるゝ如く実に立派なものである。無論外国にも十分に誇り得られる。漉標の鍵は柳さんの考案で、‘真理を開く’ことの象徴。それにブレイクとホキットマンの頭文字を配した。なぜこんな贅沢な紙を使ふかと怪しむ人には、キルヤム・モリスが‘ケルムスコット・プレス設立の主旨’中に述べてゐることがよき答へとなるだらう。これもいづれ悉しく書きたい。表紙と題扉の意匠も柳さんのもの、木版彫刻は黒田辰秋氏を煩はした。刷りあがつたら、私達夫婦が一々丁数を調べて糸で綴ぢる。(「雑記」)

特別に発注された越前産の鳥の子紙には、BとWと鍵の図案の透かし模様が入りました。鍵の図案は、1931年

に刊行された『ブレイクとホキットマン』第1巻全12冊の表紙にもあしらわれました。1932年の第2巻の表紙には扉が配されたので、寿岳の言葉を借りるならば、「真理を開く」鍵と開かれる扉が1巻と2巻の表紙を飾ったということになります。扉の図案は、ブレイクが『エルサレム』(Jerusalem, 1820)の口絵として制作した図版に類似しており、柳が表紙の意匠を手掛けたこととあわせて考えるならば、ブレイク研究者としての柳がブレイクの図版を手掛かりにして、扉の図案を用意した可能性が考えられます。一方、寿岳は装幀一般について、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)とケルムスコット・プレスに言及しました。詩人であり、工芸家であり、社会主義者であったモリスは、理想的な書物を出版するために、1891年に印刷工房を設立し、ケルムスコット・プレスと名付けます。モリスは「理想の書物」という随筆の中で、美しく読みやすい書物を作るために、文字の色、配置、余白について指針を示しました。余白に関するモリスの言葉を引用します。

すなわちその法則とは、ページの内側(綴じ目の方)の余白は最小にとり、天の余白はこれより広く、外側はさらに広く、そして地の余白を最大にとらねばならぬというものである。(「理想の書物」)

基本的に画数の少ないアルファベットと、画数の多い漢字や縦につながる形態上の特徴を持つ平仮名とでは、文字としての表記上の性質が異なっており、欧文活字の組み方をそのまま漢字仮名交じり文に当てはめることはできません。しかし、雑誌『ブレイクとホキットマン』の余白に関する限り、概ねモリスの指針に従ってページレイアウトが組まれたようです。このようにして、材料と装幀の両方において、寿岳と柳が工夫を凝らした紙面が刷り上がると、寿岳夫妻が手仕事で製本作業を行いました。寿岳は当時を次のように回想します。

これは私の主張もあって、簡単な、真ん中を三ところ絹糸で綴じるというのではありますけれども、五百部を全部手製本するというのは大変なことで、初めのうちは柳夫婦が南禅寺の北門にあった私の住居へやってきて、そして四人が、ぶすぶすぶすぶすと針で穴をあけては絹糸で綴じかがるという仕事をしてやったんですね。ところが、これは大変だといちばん最初に音をあげたのは柳さんで、兼子夫人は、私は器用で針仕事もうまいもんだから、と言って頑強にやり通したのには感心しました。(「柳宗悦を語る」)

製本は、私たち夫婦が手綴じした。時には兼子夫人を伴って柳宗悦も応援にやってくる夜があった。そういう時、妻はよくピフテキを焼いていた。娘は今も語る。「あの頃は、そういう方面には柳さんの民芸の影

響はまだ受けてなかったんで、そのピフテキをのせたお皿も、白地に水色の線のはいったつまらん西洋皿だった」。(「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」)

『ブレイクとホキットマン』の当初の発行部数は500部です。寿岳は1巻2号の編集後記に、創刊号が刷り上がったのが1月14日の夕方であり、柳夫妻の応援を得て、すべての製本作業を終えたのは16日の午後だった、と書いています。

装幀と製本に情熱を注いだ寿岳は、当然のように、内容の充実にも情熱を注ぎました。『ブレイクとホキットマン』1巻1号で、寿岳はブレイク研究の骨子を説明します。

本誌に於いて私が企ててあるブレイク研究は、次の四部に分れる：

- A. 翻訳
- B. 伝記
- C. 評論
- D. 書誌

誰もがブレイクを日本語で読めるやうにしたいとは、私の久しい間の念願である。それゆえ私は主力を翻訳に傾けたい。(「ブレイク研究への序説」)

寿岳がここで示した四部構成には、科学的にブレイクに取り組もうとする書誌学者としての寿岳の姿が見えます。「主力を翻訳に傾けたい」と述べた寿岳は、翻訳の方針について、次のように述べます。

私はブレイクが我々に書き残した一切の文字を、私の解釈に従って、出来るだけ忠実に、美しい所は美しく、醜い所は醜く、しかし語句よりは思想の伝達を主として、原文の年代順に訳出してゆきたいと思ふ。(「ブレイク研究への序説」)

「原文の年代順に訳出してゆきたい」という寿岳の意志表明は、書誌学者として譲れないところだったのかもしれません。しかし、結果として、ブレイクの特徴がそれほど顕著でもなく、またブレイクの言葉として興味深いものがそれほど多く含まれているわけでもない作品が、優先的に訳出されることになりました。これがこ

の雑誌を展開する上で、凶の結果をもたらした可能性を考えざるを得ません。寿岳は翌年の『ブレイクとホキットマン』2巻2号に、「過去一年間に約六十名の読者を減じた」と書きました。最終号となる2巻12号の編集後記には、「たうとう五百の数が半分にまでなつてしまひました」という寿岳しづの言葉が載っています。読者数の減少と掲載内容の選択との間に因果関係がない、と言い切れるでしょうか。年代順という原則のもとで寿岳が訳出した『ブレイク小品詩集』(*Poetical Sketches*, 1783)と「ブレイク初期の散文」と『月の中の島』(*An Island in the Moon*, 1784)に、読者をつなぎ留めるだけの魅力があった、とは思えません。ブレイクの作品群を全体として眺めたとき、これらは、ブレイク研究の文脈では、それぞれ重要な意味を持つ作品ではありますが、『無垢の歌と経験の歌』や『天国と地獄の結婚』に比べれば、いずれもおもしろさに欠ける、と言わざるを得ません。『ブレイクとホキットマン』を購読してみようと思ひ立つ読者が待ち望んでいたのは、寿岳の眼を通して描かれたブレイクの伝記であり、評論ではなかったでしょうか。寿岳のブレイク伝の連載が始まったのは2巻8号であり、翌々月の2巻10号には、経営困難のために休刊する、という通知が掲載されました。この間に、1931年9月に寿岳しづと子息潤が腸チフスで入院し、看病にあたった寿岳文章も10月に入院することになり、12月まで退院できませんでした。このような予測できない緊急事態があったにせよ、もっと早い時期からブレイクの伝記を掲載したり、年代順にとらわれずに、ブレイクの代表作とされる『無垢の歌と経験の歌』や柳が夢中になった『天国と地獄の結婚』を優先的に訳出するという判断をしていれば、『ブレイクとホキットマン』はもう少し長く続いたのかもしれない。

さて、伝記の方針について、寿岳は次のように決めました。

Bの伝記に於いて私の企ててゐるのは、能ふかぎり正確な客観的記述である。こゝでは人間としてのブレイクが、その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて、ありの儘に描き出されるであらう。私はそれを、謂はゞ一個の飾りなき裸像であらしめたい。我々はそれに、我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべきだと私は考へる。(「ブレイク研究への序説」)

「正確な客観的記述」、「その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて」、「ありの儘」、「飾りなき裸像」という表現から、偉人としてブレイクを誉めたたえるのではなく、この世に生きた生身の人間としてブレイクを描こうという寿岳の意図が見えます。さらに、「我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべき」という言葉には、事実の記録としてのブレイク像が確立された後、そのブレイク像をどのように解釈す

るかという主体性は、一人一人の読者にある、という考え方がにじみ出ています。明治の文明開化と欧化政策のもとでは、欧米の文学を模範として、その模倣に励むことが推奨されました。これに対し、寿岳は、一人一人の日本人読者がそれぞれの価値観に基づいてブレイクを吟味し、理解することを促しました。

同じような姿勢は、寿岳が打ち出した評論の方針にも見ることができます。

私は能ふかぎり心を虚しうして先づブレイクの声に聞き、しかる後私に与へられる最善の愛と理解とを語らう。また許されるならば、ブレイクと闘ふことをすら敢てしよう。かくして現れるブレイクは、私の思想と生活との中に血肉となつて生きるブレイクである。(「ブレイク研究への序説」)

「心を虚しうして先づブレイクの声に聞き」の部分は、読者の偏見と先入観でブレイクを歪曲することなく、ブレイクを客観的に理解しようとする努力を意味します。そして、そのようにして理解した後は、読者自身の価値観で「ブレイクと闘ふこと」を辞さない、と寿岳は言います。所謂先進国であり、列強諸国の中でも大国とされる英国の詩人だからといって、ブレイクの言葉を鵜呑みにするのではなく、ブレイクの言葉と対等に対話することを通じて、「思想と生活との中に血肉となつて生きる」ブレイク理解を寿岳は目指しました。

寿岳がここで用いた「血肉となつて」という表現は、『ブレイクとホキットマン』1巻1号の編集後記に、柳が記した言葉と呼応します。柳は言います。

発刊の趣意書でも書いておいたが、私の考へでは外国の文学を取り扱ふ場合、研究が只西洋人の書いたものに精通する丈ではどうもつまらない。又さう云ふやり方では二義的な事より出来ず、又何も新しい事を加へる事が出来ない。私達が外国文学を取り扱ふ場合はやはり東洋的に見るとか、東洋人としての吾々に肉となり血となるものを書くとか、さう云ふ点迄入らないと、何も文学が身につかないと思ふ。学者の通弊は只知るに止つて体得しない点にある。(「雑記」)

外国文学との接し方について、「西洋人の書いたものに精通する丈」で「知るに止つて体得しない」あり方を、柳は「学者の通弊」と呼びました。そして、これと対置する形で「東洋的に見るとか、東洋人としての吾々に肉となり血となる」あり方を、目指すべき方向として示しました。外国文学が「吾々に肉となり血となる」とは、外国文学に接することで得られた知見が、社会生活に応用され、居心地のよい社会環境を実現するための有効

な手掛かりとして活用されること、と言い換えることができるでしょう。外国文学に対するこのような接し方の源流は、夏目漱石に遡ることができます。漱石は、英文学徒であった若い頃を振り返って、次のように言います。

近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです。まして其頃は西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲従して威張つたものです。だから無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男が比々皆是なりと云ひたい位ごろごろしてゐました。他の悪口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつたのです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、其評の当否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を触れ散らかすのです。つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、余所々々しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです。

けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威張つてゐるのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽を身に着けて威張つてゐるやうなものですから。（「私の個人主義」）

漱石は、西洋由来の知識を十分に理解しないままに、他人の知らない知識を知っていることをひけらかす様子を、「無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男」と揶揄し、かつての自分自身の姿である、と述べます。「丸で考へずに」、「腑に落ちやうが落ちまいが」、「鵜呑」、「機械的の知識」という一連の表現から、主体性もなければ、批評精神もなく、知識を持っていることを自慢するだけの利己的な人物像が浮かび上がってきます。はったりとこけおどしの道具として知識を振り回す輩と、そのような輩であった過去の自分自身とを漱石は「孔雀の羽を身に着けて威張つてゐるやうなもの」と一刀両断にします。そして、漱石が到達した外国文学との接し方について、次のように言います。

たとへば西洋人が是は立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の参考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具へてゐなければならぬ以上に、世界に共通な正直といふ徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見

を曲げてはならないのです。(「私の個人主義」)

一人の読者として英文学の作品に接して一つの意見を持ったとき、英国の批評家が何を言おうと「私は私の意見を曲げてはならない」とする立場を、漱石は「自己本位」と名付けました。近代日本が明治の欧化政策で始まったことを考えれば、欧米の文学を前にして「自己本位」の姿勢を保つことは容易ではないかもしれません。柳は1957年に「日本の眼」という随筆で「外国に学ぶのはよいが、それが崇拜となり追従となつては、文化の独立はない」と警告を發しました。桑原武夫は1959年に、雑誌『思想の科学』に「研究者と実践者」という随筆を發表し、「外国の知名の学者がくると、ご高話拝聴という形になるのはもうやめにしたいという気はする」と書いており、明治の文明開化からアメリカ軍による占領期を経て、日本に根強く存在し続ける欧米の「ご高話拝聴」という圧力の大きさが感じられます。しかし、寿岳は、この圧力に屈することなく、寿岳自身の眼でブレイクをとらえ続けました。

#### (4) 寿岳文章のブレイク理解

寿岳のブレイク理解は、漱石の言う「自己本位」型の研究姿勢の系譜の上にあります。その特徴を、大乘仏教と生活という二つの言葉を手掛かりにして、考えてみたいと思います。

寿岳はブレイクについて次のように語りました。

幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じるのはまことに当然である。

[中略] 彼は大乘仏教的であるがゆゑに、極めて肯定的であり、積極的であり、生命的である。法則によつてのみ律せられる小乘的な世界は完全に揚棄せられて、大胆な衝動をそのままに肯定し美化し莊嚴して一切智の殿堂に到らしめる教へを、十九世紀初頭の西欧に於いて、ブレイクほど力強く熱心に説いた人は数多くあるまい。(「ブレイク研究への序説」)

寿岳は「大乘仏教の經典に親しんできた」ことと、ブレイク理解とを結びつけ、大乘仏教とブレイクの思想とが似通っていることを指摘しました。寿岳はブレイクの特徴を、「肯定的」、「積極的」、「生命的」、「大胆な衝動」という言葉で表現します。ブレイクが『天国と地獄の結婚』に「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉を記したことは、既に見ました。寿岳は、あらゆる生命を尊重するブレイクの思想を、大乘仏教に引き寄



せて理解します。さらに、「法則によつてのみ律せられる小乗的な世界」をブレイクは発展させて高めた、と寿岳は言います。この言葉の源も、ブレイクの『天国と地獄の結婚』にたどることができます。

イエスが十戒をどのように認識したかを聞くがよい。彼は安息日を無視し、安息日の神を蔑ろにし、彼の為めに殺された人々を殺したではないか。姦淫をして捕まった女に律法を適用しなかったではないか。彼を支えるために他人の労働を盗んだではないか。ピラトの前で弁明しなかったことで偽証をしたではないか。弟子たちのために祈りをする時、また、宿を貸すことを拒否した人々の家を出る際には、足の塵を払い落とすように弟子たちに命じる時、彼は隣人の物を欲したではないか。私は言うておく。これらの十戒を破ることなくいかなる徳もあり得ない。イエスのすべてが徳だった。そして律法によってではなく、衝動によって行動したのだ。(『天国と地獄の結婚』)

十戒とは、旧約聖書において、神がモーセに与えたとされる十項目の掟です。旧約聖書の神は、モーセを通して、イスラエルの民が十戒を守ることを求めました。十戒は、安息日に仕事をしてはならない、人を殺してはならない、姦淫をしてはならない、盗みをしてはならない、偽証をしてはならない、隣人のものを欲しがってはならない、などの禁止の命令から構成されます。これに対し、新約聖書では、イエスはこれらの禁止の命令を破った人物として語られます。生命や生活が掟によって脅かされる時、生命や生活を守るために、イエスは掟を破ることを選びました。イエスにとって、宗教や社会の掟は、人々の暮らしを保護することを目的として設定されているのであり、その逆ではありません。掟と暮らしとが衝突する場合は、掟を変えていかなければなりません。そのような意味で、イエスは、当時のユダヤ教社会に反抗する反逆者でした。

言葉は、このように状況に向かって発せられるときには、明らかに、一つの行動なのである。そしてイエスの言葉を行動の一コマとしてとらえる者は、さらに、イエスの活動全体をも、その歴史的状況に立ち向かったものとして理解することができるだろう。そうしてはじめて、イエスは何故殺されたかが理解できる。イエスは、権力によって逮捕され、殺された反逆者だったのだ。権力の側にいわせれば、どうしてもつかまえて殺しておかねばならないような男だったのだ。(田川建三『イエスという男』)

ブレイクの『天国と地獄の結婚』は、反逆者としてのイエスに注目します。『天国と地獄の結婚』では悪魔が

登場し、律法の遵守を唱える天使と対話を行います。この対話で、悪魔は天使に対して、反逆者としてのイエス像を説き、イエスは「徳」を体現しており、「衝動」から行動した、と説明します。なぜ、悪魔がイエスについて語るのでしょうか。天使は律法に基づく宗教と社会のあり方に疑問を持っておらず、したがって、体制側にとっての「善」を代表します。これに対して、体制に異議を唱え、反抗する者は「悪」であり、そのようなものとしてイエスは十字架に掛けられました。だから、『天国と地獄の結婚』では、悪魔がイエスの代弁をします。現在の秩序のあり方に満足せずに、問題を見出すものが「悪」であるならば、新しい秩序の可能性は、常に「悪」によってもたらされる、と言えるのかもしれませんが。

『天国と地獄の結婚』は1790年頃に制作されたと推定されます。フランス革命と恐怖政治の時代であり、『天国と地獄の結婚』に見られる「善」と「悪」とを相対化する視点は、このような環境と関わりがあると考えられます。体制側から見て「悪」とされる革命勢力は、アメリカに独立を、フランスに共和政をもたらし、血筋によって人生が決定される身分制社会から、当事者が話し合いで物事を決定する市民社会へと、社会のあり方を変革しました。その一方で、同じ革命勢力が権力欲と支配欲にとらわれたとき、見解を異にする勢力を「悪」とみなして粛清する恐怖政治が出現しました。「生きとし生けるものはすべて神聖である」という原則を実践するためには、価値観の異なる存在と共生する方法を考えておかなければなりません。万物を肯定するブレイクの思想について、寿岳はさらに考察を進めます。

しかしブレイクに於ける生命の肯定は、他を犠牲にしても自己の欲望を充足しようとする利己的なものでは決してない。（「ブレイク研究への序説」）

ブレイクは1790年代に「悪」に積極的な価値を置き、革命を支持する作品群を次々に制作しました。しかし、1800年代になると「利己心」(Selfhood)の制御を作品の中心に据えるようになります。ブレイクの思想的変遷を、寿岳は次のようにまとめました。

この世の有情非情は、みなブレイクの心の眼に人間の神聖な形となつて現れる。山川草木が悉く人間に外ならないのである。かくしてブレイクの思想は‘罪の赦し’と‘私の寂滅’とを基調とする大悲の仏心に昇華して已む。（「ブレイク研究への序説」）

ここで寿岳が用いた「罪の赦し」という言葉は、ブレイクが『両性のために：天国の門』(For the Sexes: The Gates of Paradise) に書き込んだ「それぞれの悪徳の互いのゆるし/そのようなものが天国の門である」という言葉に、また「私の寂滅」はブレイクの『ミルトン』に見られる「利己心の滅却」(Self-annihilation) という言葉に由来するものと思われます。どちらも、ブレイクにおいては、価値観の相違が原因となって生じる争いを回避し、相互寛容を実現するための重要な鍵概念です。寿岳はこれらを的確に把握した上で、ブレイクの思想を「大非の仏心」という仏教の用語に接続しました。

ブレイクと「東洋の汎神論的な詩」との類似を指摘したのはA. C. スウィンバーン (A. C. Swinburne) であり、「東洋の神秘主義思想と一致する」と言ったのはフォスター・デイモン (S. Foster Damon) でした。ブレイクと仏教とを結びつけること自体は、特に珍しいことでもなく、また、これらの先行研究の影響を受けて、寿岳が仏教の枠組でブレイクを理解した、というわけでもないでしょう。寿岳の生い立ちを振り返れば、「幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じず」という寿岳の言葉は、額面通りに受け取ってよいと思います。寿岳のブレイク理解から見えてくることは、アメリカ独立戦争とフランス革命という激動の時代にあつて、理想的な社会の仕組みを考えてブレイクがたどりついた利己心の滅却と相互寛容という鍵概念が、煩悩からの解脱を掲げる仏教の教義と重なるところが多い、という事実です。この事実は、19世紀から20世紀初頭にかけて、利己心と競争原理に基づく帝国主義と植民地主義が世界を席卷していた時代にはブレイクの理解が遅れたこと、また、そのような時代に、仏教の専門家でもある寿岳がブレイクに傾倒したことをあわせて考えるならば、二重にも三重にも興味深いと思います。

寿岳のブレイク理解を考える上で、第二の手掛かりとなるものは生活です。寿岳は「ワイマールの枢密顧問官であつたゲーテ」と対比して、ブレイクの慎ましやかな生活を強調し、「生活と芸術とを結びつけて考へるとき、私はゲーテを尻眼にかけて通るが、ブレイクの前では無条件に頭がさがる」(「ブレイク研究への序説」と記しました。ここには、煩悩に対峙する僧侶として、求道者としての寿岳の姿が見えますが、本論では、その延長線上で、ブレイクを読むという行為そのものを寿岳が自分自身の生活の一部に位置付けたことに注目したいと思います。既に見ましたように、ブレイクは「生きとし生けるものはすべて神聖である」と宣言し、利己心がもたらす害悪を訴え、相互寛容の重要性を説きました。ブレイクの言葉を1931年の日本で読むことは、何を意味したのでしょうか。寿岳は『ブレイクとホキットマン』1巻9号の編集後記に、次のように書きました。

宇宙の生命に比ぶれば無にも等しい数千年の間に、民族は民族と争ひ、階級は階級と闘つて、線香花火の

やうに消え去つてゆく。これは耐へ難いほど淋しい事実ではないか。(「雑記」)

『ブレイクとホキットマン』1巻9号の奥付には、「九月十日印刷／九月十五日発行」とあります。この3日後の9月18日に満州事変の発端となる柳条湖事件が起きました。奥付の日付を文字通りに受け取るならば、寿岳の言葉は満州事変を受けて書かれたものではありません。しかし、ブレイクを読むことと1931年の日本を生きることが、寿岳の中で結び付いていたことがうかがえます。翌年の1932年の2月に発行された2巻2号の編集後記には、次のような言葉が見られます。

私共が本誌を刊行するのは、幾度か言を重ねてきた通り、決して道楽や趣味から出発してゐるのではない。さう言う雑誌ならばほかにもいくらあろう。良心を見失はうとする現代に、良心のありかを示し、‘静かなる小さき声’を聴けよとて本誌は生れた。その所志をあくまでも貫かずにはおかぬ私共の心である。(「雑記」)

寿岳は、当時の日本が置かれていた状況を指して、「良心を見失はうとする現代」と言いました。そのような時代にあつて、『ブレイクとホキットマン』という雑誌は「良心のありか」を示すために生まれた、と寿岳は言います。ブレイクを読むことは、良心が見失われつつある時代において、どのように振る舞うべきかを示す指針となる、と寿岳は考えていたようです。ここで寿岳が用いた「静かなる小さき声」という表現は、旧約聖書「列王記上」19章12節に由来し、そこでは、逆境にある預言者エリヤの前に、神がかすかな細い声として姿を現します。寿岳を預言者エリヤに、ブレイクを神の「静かなる小さき声」に重ね合わせるならば、雑誌『ブレイクとホキットマン』はブレイクとホキットマンを紹介するだけでなく、社会に対する警世の書という位置付けを持たされていたことがわかります。寿岳は『ブレイクとホキットマン』2巻4号で、戦争に突入しつつある時代の趨勢について、ブレイクを引きながら批判しました。

今の時代は、あまりにも軽々しく生命の厳存を冒瀆しようとする傾向にあるかの如く私には感じられる。‘生あるものは凡て神聖である’とブレイクは屢屢言ふ。一つの生命が伸び、感じ、苦しんでゐる事実には、最大な神秘がひそんでゐることを、人よもつと痛感せよ。戦争の惨禍を想像するたびに、私の心には亡びゆく生命の呻きが悲しくも響く。(「雑記」)

翌月の5月には、五・一五事件が発生し、首相の犬養毅が暗殺されました。寿岳は『ブレイクとホキットマン』2巻5号の編集後記で、絶望に近い怒りを露わにします。

この五月は憂鬱のうちに過ぎた。一日二日置きに降り続く雨。季節はづれに強い風。それにもまして吹きすさぶテロリズムの狂暴なあらし。人類は向上し進化すると言ふ浮誇の愚かしさが痛烈に感じられるのはかかる時に際してである。[中略] 蛮行、私利、強慾、ごまかし、党派根性、宗派争ひ、裏切り、軽薄、淫蕩、殺伐、鈍感、贅沢、暴圧——凡そ考へ得らるる限りの邪悪が、一たび過ぎればまた還ることのない人間の歴史を日々に汚してゆく。人類よもういゝ加減に恥を知れと怒鳴りたくなる。きのふは生命の尊貴をのみ一途に思つた私の心が、今日は生命それ自らの存在にすら望みを失はねばならぬとは、何と云ふ悲しい変化であらう。かゝる場合に生き得る唯一つの道は、頭をいたづらに高くあぐる事なく、古への托鉢者のやうに、目前数歩の地に眼を伏せ、‘静かなる小さき声’にのみ耳澄まして歩むのほかはあるまい。げにかゝる世にあつては、平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではないのである。(「雑記」)

「平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではない」と書いた寿岳は、購読者数の減少による経営困難という現実を前にして、雑誌『ブレイクとホキットマン』の休刊を決断します。最終号の2巻12号の編集後記には、寿岳しづの言葉が見えます。

ぐんぐんと強く正しく一つのを突きつめる心なり態度なりを持つ人はほんに少いもの、この雑誌に払はれてゐた五十銭玉はいつたい何に使はれるのか、かう嘆息する私の方がいけないのでせうか。しかし一方では、七十銭になつてもいい、一円に値が上つてもいい、どうぞ止めないやうにとまで言つて、私共の心に暖いたのもしい心を通して下さる方々があります。今の社会の状態、今の人心の状態、否、いつの時代にあつても、かうした種類の雑誌として五百の読者は多すぎるのではないかと思ひます。これは、どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿です。初めから二百人乃至三百人位みが当然だと思つてゐたのです。(「雑記」)

「どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿」という言葉に、寿岳

しづの冷徹な観察眼が見てとれます。寿岳文章は1943年8月13日付の「向日庵消息第十信」で「忙しい家事のひまひまに、岩波書店から頼まれて、しづ子が翻訳を続けてきましたオルcottの『四人の少女』は、一カ月ほど前急に出版不許可となりました」と書いているので、寿岳家の家事は寿岳しづが担当していたのでしょう。鶴見俊輔は「あなたは勝つものと思っていましたかと老いたる妻のさびしげに言う」という土岐善麿の短歌について、軍国主義の時代に同調するところもあった土岐善麿とは異なり、「台所を守って彼の食事の世話をしてきた妻は、食糧だけから見て、別の思いを抱いて黙っていたのだろう」（「人間と国」）と述べました。寿岳しづもまた、寿岳文章の夢と理想に寄り添いながらも、家事を通して現実をより冷静に見つめていた、と言えるのかもしれない。

#### （5）思想家としての寿岳文章

『ブレイクとホキットマン』最終号に、寿岳は次のように書きました。

愈々この短い後記を以て暫く読者諸君とお別れする。言ひたい事はこれまでに言ってきたので、私としては今改めて申上げる事もない。寄稿者となり読者となつて最後まで本誌を支持して下さい下さつた諸君に、眼頭の熱くなる思ひして唯感謝の心を贈るばかりである。これからは寒さに向ふ。片隅の日の光をも大切に、恙無き日を送つて下さい。（「雑記」）

この後、寿岳は「片隅の日の光」を守り続けようとするかのように、向日庵私版本の刊行事業に着手します。ウィリアム・モリスがケルムスコット・プレスを設立して、紙、活字、インク、ページレイアウトなどに工夫を凝らして、理想とする書物を世に送り出したように、寿岳は「向日庵発願記」で宣言します。

著者に諂ふことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装ひを与へ、思想と工藝との二つの世界を密に結び合はせようとするのが私の願ひである。（「向日庵発願記」）

刊行された向日庵私版本には、ブレイクの複製本、式場隆三郎が翻訳したテオ・ファン・ゴッホの手紙、小泉八雲が松江と熊本から送った書簡集、さらに寿岳夫妻の和紙研究の成果となる『紙漉村旅日記』などが含まれ

ます。あわせて『向日庵消息』というパンフレットを創刊し、1933年6月の第一信から1943年8月の第十信まで発行し続けました。戦争の時代に生きた寿岳の信念は、第七信によく現れています。

とまれ私たちは責任を重んずる生活者であり、思索者であり、また実行者でありたい。歴史の自然法的な方向をのみ重んずる近代の風潮は、歴史の必然にのみ自己を託して、刻々に過ぎてゆく個々の生活の事実をあまりにも無責任に踏みこじってはいすまいか。個人の力ではどうすることもできない歴史の力を明察しながらも、その同じ歴史が教える最も高貴な人間の生活の態度（随順者の数のいかんを問わず）に自己を服従させつつ、どんな小さな言葉や行為にも責任を持たせてゆく——今私の望んでいるのはそうした生きかたです。（「向日庵消息第七信」）

同じ時期に雑誌『工藝』を刊行し続けた柳は、国家総動員法と大政翼賛会に背を向けるようにして、朝鮮、沖縄、アイヌ、台湾の特集号を組み、文化と生活と価値観の多様性を静かに訴えました。寿岳もまた、殺戮と破壊に背を向けて、向日庵私版本として美しい書物を制作し続けました。寿岳の活動は、それ自体が「静かなる小さき声」であり、「平凡に正しく思念して生きること」の実践でした。侵略と支配が「歴史の必然」とみなされた時代にあって、寿岳は「個々の生活の事実」を守るために、その時代に生きた者の一人として、社会的責任を果たそうとしました。

戦前の英文学者の動向を探った宮崎芳三は『太平洋戦争と英文学者』の中で、英文学者は敵性文学を研究する以上、危険視されてもおかしくはなかったが、そのようなことは起きなかった、と指摘します。転向という現象も、当時の英文学者から縁遠いものでした。なぜなら、転向とは思想を持つ人に起きる現象であって、「戦争中の大多数の英語教師、英文学者の心は思想以前の状態だった」（『太平洋戦争と英文学者』）からです。宮崎によると、日本の英文学者は、少数の例外を除いて、考えるということをしませんでした。彼らは英国の英文学者の研究を手本として、英国の英文学者に認められることを目指して、勤勉に実直に英語と英文学の勉強を重ねました。結果として、多くの英文学者は信念を持たず、したがって、危険思想の持ち主と見られることもなく、特別高等警察の監視対象になることもなく、転向という現象も起きませんでした。欧米の最先端の研究を輸入することに情熱を燃やし、欧米の研究者に認められるための競争に終始し、自他の順位付けに汲々としている有象無象の英文学者とは、一言で言うならば、考える能力のない優等生の寄せ集めです。彼らは、なぜ、日本で英文学を研究するのか、英文学を研究することの社会的意義は何か、英文学研究からどのような叡智を引き出

して、どのように社会に還元すべきなのか、という社会的責任を意識することのないまま、勉強に明け暮れ、沈黙しました。沈黙した、と言えば、聞こえが良すぎるかもしれません。彼らには語るべき思想がなかったのです。

このような、いわば優等生の精神状態から卒業できない英文学者の群れを背景にしたとき、寿岳の立ち位置は鮮明になります。戦後に寿岳は次のように記しました。

ただ、ひとことつけくわえておきたいのは、半世紀以上にあたる私と文学（とりわけ英文学）とのとりくみをふりかえってみたとき、それを酵母にして自分自身の生活体験を発酵させ、日々の行動に造詣しようとの願いをつらぬいて現在にいたり、これからもその姿勢は続くであろうとの見通しである。文学は、私にとって、思考や研究とだけ結びつくものではない。人生のほかのもろもろの事象と同様、行（ぎょう）じてこそ意義をもつ。（「ダンテとブレイク」）

人文学は、高尚であることに、その存在意義があるわけではありません。世俗から遊離した無用の用であることに、意味があるわけでもありません。もちろん、それは知的遊戯でもありません。人文学は、暮らしやすい社会のあり方を考えるための思考実験の場であり、居心地の良い社会の仕組みを作るために、価値観を鍛え直す場です。そこに人文学の社会的意義があります。戦前と戦中を通して寿岳が行った活動は、ささやかではあったにしても、ブレイク研究に社会的意味を持たせる営みでした。日本の英文学者としては極めて稀有な、信念を持った思想家の姿を、寿岳文章の中に見ることができます。

（付記）本講演内容を加筆修正し、書誌情報と脚注を追加した論文は、「寿岳文章とウィリアム・ブレイク研究——日常生活の思想家」として『超域文化科学紀要』第24号（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、2019）に掲載予定である。



## 京都時代の柳宗悦 —寿岳文章との交流を中心に

日本民藝館学芸部長 杉山 享司

(趣旨)

柳宗悦が京都に移り住んだのは1924年のことでした。そして、途中一年間の渡米生活を含め約十年間を京都で暮らしましたが、この京都時代が「民藝」にとっての揺籃期となったことは、意外に知られていません。この講話では、京都に移り住むまでの柳の歩みを振り返りながら、京都に移り住んでからの柳の活動、柳宗悦と寿岳文章との交流について、紹介していきたいと思います。



1928年に撮影された吉田神楽岡の柳宅での写真。前列左から柳宗悦、寿岳文章。

### 柳宗悦という人物は

まず柳宗悦（やなぎ むねよし、1889－1961）という人物ですが、柳は宗教哲学者であり民藝運動を興した思想家であります。名前は「そうえつ」と有職読みされることが多く、一般には「やなぎ そうえつ」の方が分かりやすいかもしれません。

若き宗教哲学者として世にでた柳宗悦は、多くの「ひと」や「もの」との出会いを重ねながら、美とは何かを探究していきました。そして、それまで美的価値とは無縁のものと考えられていた民衆の日常品に新たな評価の光を当て、民藝という新しい美の概念を理論化し、それに基づいた生活文化運動、すなわち民藝運動を展開していきました。柳が「民藝の父」などと呼ばれている所以です。

さて、人生を旅になぞらえるならば、柳の場合はさしずめ「民藝の仕事は、我孫子で道を見つけ、京都で始ま

り、国の内外で学び、東京で育った」といえますが、まさに京都は、民藝運動の始まりの地でありました。

そして京都における民藝運動といえば、真っ先に思い浮かべるのが、柳の盟友で陶芸家の河井寛次郎です。その河井は、柳を評して「道を歩かない人 歩いたあとが道になる人」「人に灯ともす人 人の灯明に灯をともし人」と述べています。柳は独創の人であり、人に新たな勇気を与え、夢を持つ人の心に希望の灯をともし人であったといえましょう。寿岳文章も、まさにその柳によって心の灯明に灯をともしられた一人であったのです。



柳宗悦 (1889-1961)

## 1、京都に移り住むまでの柳の歩み

京都に移り住むまでの柳の歩みを俯瞰してみますと、おおよそ以下のようになります。再来日したバーナード・リーチを識る (1909年) - 『白樺』の創刊に参加 (1910年) - 西洋近代美術の紹介 - 宗教哲学とウィリアム・ブレイク研究 - 朝鮮陶磁器との出会い (1914年) - 朝鮮工芸の紹介と朝鮮文化の擁護 - リーチを介して濱田庄司を識る (1919年) - 木喰仏の発見 (1924年1月) - 朝鮮民族美術館の開設 (1924年4月)。では、その事柄について少し補足説明しておきます。

### ・『白樺』の創刊に参加

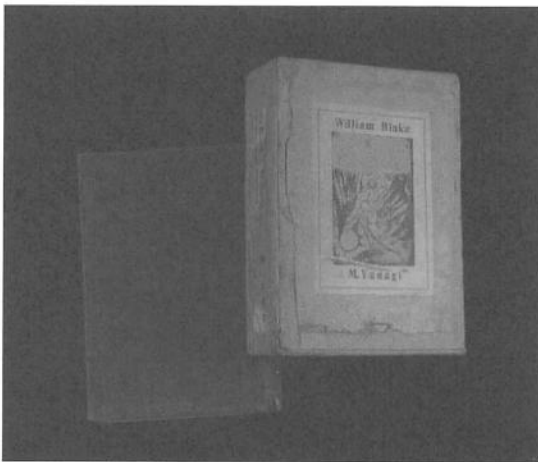
1910年、雑誌『白樺』の創刊に参加します。雑誌『白樺』は、武者小路実篤や志賀直哉らが中心となって刊行された同人誌で、個性の尊重や自由主義を理念に、人間愛や理想主義を標榜しました。なお、学習院高等学科時代には英語を鈴木大拙、ドイツ語を西田幾多郎に学んだそうです。



『白樺』1910年（ロダン号）

#### ・ウィリアム・ブレイクの研究

1914年に柳は『キリアム・ブレイク』を刊行。「一粒の砂に世界を見、一輪の野の花に天を見る」と詠じた、英国18世紀の宗教詩人で画家のウィリアム・ブレイク。キリスト教神秘主義に連なるブレイクの思想は、芸術そのものに宗教的境地を求めようとする柳思想の原点ともなりました。



柳宗悦著『キリアム・ブレイク』（洛陽堂、1914年）

#### ・朝鮮工芸との出会い

1914年、ロダンの作品を見るためにソウルから浅川伯教という人物が我孫子に柳を訪ねて来ました。柳は浅川から手土産として贈られた、この朝鮮陶磁器の美に大変感激し、朝鮮工芸への関心を深め、朝鮮の人々に敬愛の心を寄せていくこととなったのです。なお、柳の活動は朝鮮工芸の紹介に止まりませんでした。植民地支

配下の朝鮮において、柳は日本政府による強制的な同化政策に異を唱え、朝鮮文化の擁護や保存のために尽したのです。「光化門」保存活動はその最も象徴的な例です。



「染付草花文面取壺」(朝鮮時代 18世紀)

#### ・木喰仏の発見

朝鮮陶磁器との出会いを介して、柳の眼差しは「西洋の美術」から「東洋の工芸」へと転じていきました。そして、その眼が日本に向けられた時、先ず柳を惹きつけたのは木喰仏でありました。1924年、山梨県甲府の旧家を訪ねた柳は、そこで偶然に木喰仏と出会うこととなったのです。そして、木喰仏を調べる全国への旅が、結果として各地に残る伝統的な手仕事の発見につながっていったのでありました。



地藏菩薩像 木喰明満作 1801年

## 2、京都に移り住んでからの柳の活動

関東大震災（1923年9月1日）での被災を受けた柳は、朝鮮民族美術館の開設を見届けると、1924年4月に一家（柳夫妻、母勝子、息子の宗理・宗玄）で京都へ移り住みました。

京都では、1933年に東京に戻るまでの9年間（途中一年間の米国生活をはさむ）を過ごすこととなりますが、柳の年齢からみると35歳から44歳の時期にあたり、体力や気力が最も充実した頃といえましょう。

住まいは市内を三か所にわたり移動しました。最初の住まいは上京区吉田下大路町66ノ6番地。東京より母を迎えることになり、1925年1月には上京区吉田神楽岡三番地へ転居。その後、1929年9月に左京区下鴨膳部町92番地に居を移しています。

京都での当初の生活は、同志社大学の能勢克男や同志社女学校のデントン女史の世話を受けることとなったようです。柳は1925年から同志社大学や同志社女学校（後に同志社女子専門学校に改称）で教職に就き、兼事も同志社女子校で教鞭を執ることとなりました。

なお、学習院時代の恩師の鈴木大拙も1921年から京都の真宗大谷大学の教授に就任しています。京都における大拙との交流はよくわかっておりませんが、何らかの接触があったに違いありません。

さて、京都に移り住んでから、柳の木喰調査はさらに拍車がかかります。約二年間にわたって日本国中を巡って約350体の木喰仏を発掘し、その全体像を明らかにしていきました。そして、その旅の中で「極めて地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上がる作為なき製品に、真の美があり法則がある」（「木喰上人発見の縁起」1925年）との確信を深めていったのです。

なお、木喰調査の旅は思わぬ副産物をもたらしました。柳はこのように述べております。「之も縁と云おうか、日本全国を調査した事は、同時に各地の手仕事を目撃するきっかけにもなった。つまり各地への旅行は、現状の日本の手仕事を知らぬ機会を恵んでくれたのである。」（「四十年の回想」）。



同志社のデントンハウスにて 右から濱田庄司、柳宗悦、ミス・デントン、外村吉之介。1938年

### 河井寛次郎との出会いと「民藝」誕生

柳にとって京都の地は大事な「ひと」と「もの」との出会いの場となりました。先ず「ひと」との出会いに関していえば、生涯の盟友となる陶芸家河井寛次郎との出会いが最も大切なものとなりました。意外に思われるでしょうが、京都移住以前の柳と河井の関係はあまり良好なものとはいえませんでした。しかし、柳は友人である陶芸家の濱田庄司を介して河井との縁を結びます。1924年のことでした。以来、三人は親交を深めていくこととなり、河井は柳に触発されて新たな創作の道を歩みだし、濱田も栃木県益子に居を定めて用に即した器作りに邁進していきました。

また、「もの」との出会いについていえば、下手物（ゲテモノ）と呼ばれる民衆の雑器について触れなくてはなりません。河井から京都の朝市のことを聞き、興味を持った柳は、下手物を求めて、早朝からよく三人で檀王の市（法林寺）をはじめ、弘法の市（東寺）、天神の市（北野天満宮）などを巡ったといえます。一緒に京の朝市について回ったという兼子は、「それは面白うござんしたよ。（中略）三人でうれしそうに話してね、そして、『あっ』とか『ああっ』とか、あっち指したり、こっち指したり。」（「柳兼子夫人に聞く」聞き手・水尾比呂志）と回想しております。

木喰調査の旅や京都の朝市での下手物の蒐集を通して、柳は濱田庄司・河井寛次郎と語り、下手物（ゲテモノ）に代わる呼び名として、民衆の日常品を「民藝」と命名したのでした。1925年のことです。そして、翌年

には『日本民藝美術館設立趣意書』を發表し、民藝の美を紹介する美術館設立を計画していくのです。



『日本民藝美術館設立趣意書』(1926年)



1930年、右側・柳(当時41歳)、左側・河井(当時40歳)。場所は京都五条坂の河井邸。

### 上加茂民藝協団の発足と『工藝の道』

1927年、柳は「工藝の協団に関する一提案」という一文を發表しました。それに共鳴して青田五良兄弟(織と金工)や黒田辰秋(木工)、鈴木実といった青年たちが集まり、北区上賀茂の社家の家を借りて、上加茂民藝協団がその年に発足したのです。

そして、その活動を支援するため、大阪毎日新聞社京都支局長であった岩井武俊が中心となり、協団の後援

会が組織され作品頒布会など開催されました。その活動の具体的な成果は、東京上野の御大礼記念国産振興博覧会に出品された「民藝館」（1928年）の仕事で見ることができます。その家屋の設計は主に柳が担当し、調度品や什器は各地から集めた民藝品、濱田や河井やリーチの制作した陶磁器、そして上加茂民藝協団によって制作された染織品や家具などが用いられました。博覧会終了後には、大阪に三国荘として移築されますが、その応接室には、黒田辰秋の制作による拭漆テーブルセットなどが配置されています。なお、この三国荘は日本民藝館設立以前における民藝同人が集う拠点として、大きな役割を果たしていったのです。

柳による初の本格的な工芸論である「工芸の道」は、武者小路実篤が主宰する同人雑誌『大調和』に、1927年4月創刊号から九回にわたり連載されました。この中で柳は、「美術」より低い位置に置かれてきた「工芸」の復権を願い、工芸美の性質を述べ、あるべき工芸の本道とは何かを論じ、どのような工芸が最も美しいかを示しています。そして、1928年に一冊に集録され、『工芸の道』（ぐろりあそさえて）として出版されました。

日本各地への民藝調査が行われる中、1927年には東京鳩居堂において日本民藝美術館主催による日本最初の「日本民藝品展覧会」（日本民藝美術館主催）が開催され、1929年3月には京都大毎会館で「日本民藝品展覧会」が開催されるなど、京都で始まった民藝運動がしたいに全国的規模で盛んになっていったのです。

1929年の夏、柳はハーバード大学フォッグ・ミュージアムより招請され、渡米することとなります。これは予めから交流のあったアメリカ人の美術史家ラングドン・ウォーナーの招きによるもので、西の国（異国）に暮らしながら東の国（故国）を見るという貴重な経験を得ることとなりました。柳は同志社の教職を辞し、ロンドンで個展を催す計画の濱田とともに、4月に朝鮮を経てシベリア鉄道に乗り込み欧州へと向いました。アメリカでの研究生生活は約一年におよび、1930年7月に帰国し、京都の住まいに戻りました。



大阪毎日新聞社京都支局で行われた工芸座談会。1928年12月12日。

前列右から、黒田辰秋、青田五良、柳宗悦、河井寛次郎、岩井武俊。



### 3、柳宗悦と寿岳文章との交流

寿岳先生は、「宗悦・柳さんのおもかげ」（『寿岳文章集』寿岳章子編）の中で、柳との初めての出会いについて「私が柳さんに初めて会ったのは、たしか 1923 年の早春、関西学院高等部の四年生のときであったかと思う。目的は、卒業論文の主題に選んでいたウィリアム・ブレイクに関する知見をひろめ、たしかめること。会った場所は赤坂高樹町の柳さんの自宅。」と述べており、その時の様子を「1919 年叢文閣刊の『宗教とその真理』や、1921 年同じく叢文閣刊の『宗教的奇蹟』は、私の愛読書だったので、話題は主として宗教に求められ、ブレイクにも著しく認められる神秘思想について、時間の大半は費やされたと記憶する」と述懐しています。

また、当時の柳邸についても「書斎までの通路にも、書斎のどの壁面にも、東西の美術品、とりわけ仏教関係のものが夥しく置き並べられてあるのに、私はまず目を見張った。もちろん柳さんは、すでに朝鮮の芸術への開眼後であるから、李朝の白磁も数多かつたろうが、その方面の知識が全くなかった一学生の当時の私は、それについて柳さんに何も訊ねなかったと思う」と、記しております。

さて、1924 年に柳が京都に転居したことが、寿岳先生との親交を結ぶ大きな契機となりました。寿岳先生は 1923 年に関西学院を卒業し静子さんと結婚し、母校で英語等を教えつつ、京都帝国大学文学部で英文学、特にブレイクを研究することとなりました。柳より一年先に京都の人となっていた寿岳先生は、柳が主宰する「木喰五行上人研究会」に入るなど、二人の関係はしだいに深まっていったのです。

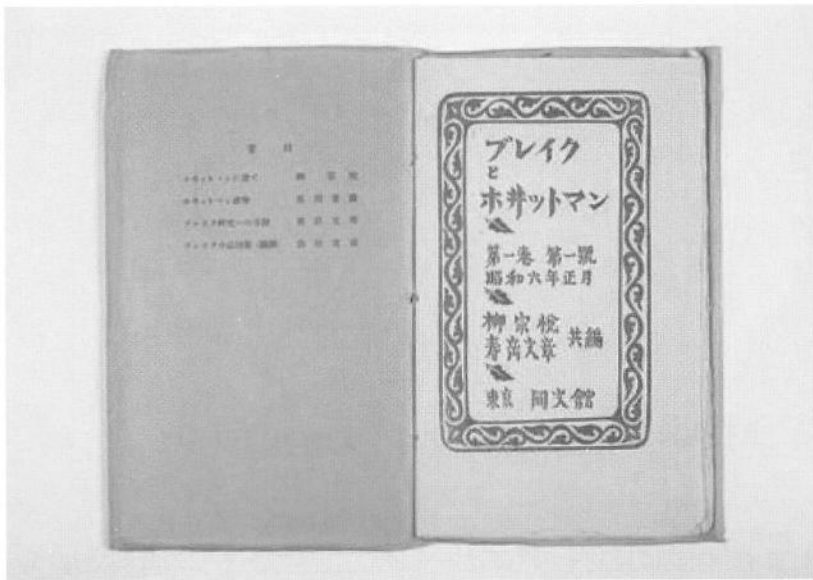
では、この二人がどのように影響し合い、また響き合いながらその後の活動を展開していったのか、見ていくことにしたいと思います。



柳宗悦（東京・赤坂高樹町の自宅にて）1921 年

### ・響き合う「ブレイク」への想い

当時、南禅寺の山内に住んでいた寿岳先生が、吉田山の神楽岡に居を構えていた柳と毎日のように行き来するようになったのは、1927年に柳と協力して「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」を京都博物館で開催してからでした。1929年には『キリアム・ブレイク書誌』を発刊。1931年からは柳と協同で月刊誌「ブレイクとホイットマン」を刊行していきます。



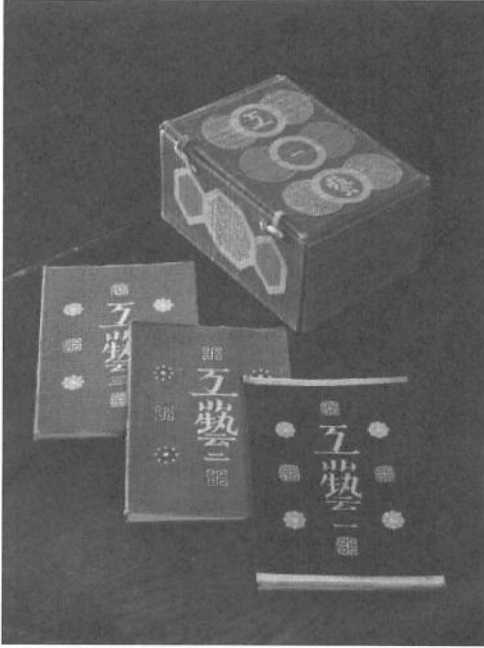
### ・響き合う「民藝美」への想い

柳は工芸の意義やその本流ともいえる「民藝」の美について、月刊雑誌『工藝』などを通して、以下のように説明しています。

- ①民藝の本質は「用」にあり、美は用途への誠から生まれる。
- ②用いられる品にこそ「健康な美」が宿る。
- ③民藝の美は労働の賜物であり、民衆こそが美の担い手である。
- ④良き材料（自然の恵み）に依らずして、良き民藝の美はあり得ない。
- ⑤民藝の美は「伝統の美」であり、「協力の美」である。
- ⑥民藝においては「単純さ」が美の主要な要素である。
- ⑦民藝は自然の中から湧き上がる作為なき品であり、民藝の美は「無心の美」である。

このような民藝美への想いは、寿岳先生の「向日庵」という住まいにも反映されています。向日庵の HP に

も、「向日庵」は「民芸運動の視点から重要な住宅である。民芸運動が展開した場であるとともに、内部意匠や調度品には、施主である壽岳文章の民芸観があらわれている。」（特定非営利活動法人「向日庵」のHP から）と紹介されております。



月刊雑誌『工芸』（1931年創刊）

#### ・響き合う「書物工芸」への想い

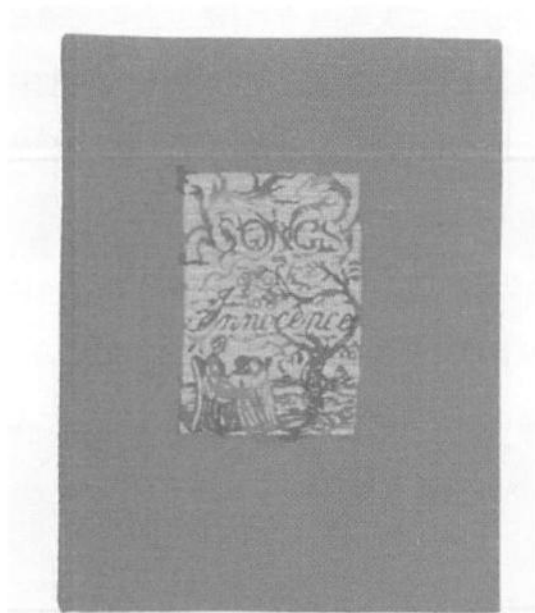
柳は1931年に月刊雑誌『工芸』を刊行します。同誌は雑誌そのものが一つの工芸品であるとの意図に基づいて造本されたものです。そこには柳の「工芸としての書物」への想いが如実に現れており、装丁・製本等も材料ともども入念なものとしています。

一方、壽岳先生も柳と同様に、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスに影響を受けて、発行部数を限定し、活字は特定の書体を用い、用紙は手漉紙を使用、組版は手組み、印刷はハンドプレスによる手刷りによる書物作りを試みました。そして、向日庵私版として1933年にブレイク『無染の歌』（訳詞付複製）、1935年には『無明の歌』（訳詞付複製）を刊行。同書の装幀（染布）は芹沢銈介が担当しました。

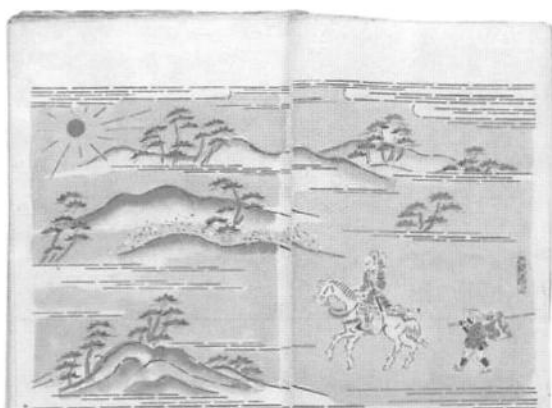
なかでも傑作は、芹沢の手になる『絵本どんきほうて』です。1935年、壽岳先生は『ドン・キホーテ』収集家であるアメリカのカール・ケラーから、日本におけるドン・キホーテ文献の蒐集と、美しい挿絵の入った和製『ドン・キホーテ』の制作を依頼されます。柳や河井とも相談の末、壽岳先生は白羽の矢を芹沢銈介に立て、和製『ドン・キホーテ』の制作を芹沢に依頼したのでした。

1935年10月から制作にかかり、1936年11月に完成。芹沢の絵本では、ドン・キホーテが鎌倉時代の武士に置きかえられ、江戸時代の丹緑本を念頭におきながら合羽刷で制作されたのです。漆加工した和紙に金箔を

施した表紙も美しく、現在でも高い評価を受けています。



ブレイク『無染の歌』(1933年、訳詞付複製：装幀は芹沢銈介)



『絵本どんきほうて』1936年、芹沢銈介制作

### ・響き合う「和紙」への想い

寿岳先生は民藝運動に参加し、1937年に新村出らと和紙研究会を結成。ご夫婦で数年にわたり全国の紙漉村調査旅行を行い、その成果として『紙漉村旅日記』（1944）を刊行しました。全国の紙の里を行脚し、文献資料と紙漉きの現場を結びつけるなど、和紙の研究に大きな足跡を残したのです。また、1967年には和紙の体系的な通史をまとめて『日本の紙』を出版。この本は今日でも和紙研究の基本テキストとされています。

なお、柳は『和紙の美』（1943年）の中で、自身の和紙への関心や愛を「私は私の愛する紙を見せて、人々に喜びを与へなかつた場合はない。見れば誰も見直してくれる。良い紙は愛をそゝる。之で自然への敬念と美への情愛とを深める。それにこゝでも日本に会ふ喜びを受ける」と語り、「どこの国を振り返つて見たとて、こんな味ひの紙には会へない。和紙は日本をいや美しくしてゐるのである。日本に居て和紙を忘れてはすまない」と説いています。



柳宗悦『和紙の美』（1943年）

このように、柳宗悦と寿岳文章のお二人は、互いの感性を共鳴させることで、それぞれの仕事に良い影響を与えながら独自の仕事を開拓していったように思われます。出会うべくして、出会った二人。この邂逅が、彼らの人生を美しく彩り、大きく展開させていくこととなったのです。

## 京の町並景観と寿岳章子

京都市立芸術大学名誉教授 街の色研究会京都代表 中村 隆一

今日は土曜日ですが、御多忙の中皆様たくさんお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。  
さて、表題にありますように、寿岳章子さんの数々の出版業績の中から、特に京都の景観保存について貴重な調査研究をされた三冊の本についてお話ししたいと思います。

三冊の本というのは、1988年に出版された『京都町なかの暮らし』（草思社）、1992年に出版された『京に暮らすよろこび』（草思社）、1994年に出版された『京の思い出』（草思社）、以上の三冊であります。いずれも沢田重隆さんという有名なグラフィックデザイナーの、写真の如く綿密な写生がふんだんに挿入されていて、読むのは勿論、見ていて楽しい本であります。私がこの本に注目したのは、私事に亘りますが、京都において約40人位のメンバーで「街の色研究会・京都」という研究会を今まで28年間続けておりまして、色彩という側面から京都の景観の調査研究をやっております。そんなことから、最近になって章子さんのこの三冊の本が、発刊から30年になるのですが、昨今の町屋保存運動、崩れゆく京都の伝統建築、私たちの研究テーマの景観の保存・修復というテーマを考える中で、非常に貴重な本であるという認識がクローズアップされてきました。

少しこの貴重な本についての側面の話をしますと、一冊目の『京都町なかの暮らし』が出版された1988年の1年後、京都新聞が一年間の連載記事で“新・都の魁”という特集を51回かけてやりまして、その集成を出版いたしました。この本の内容は建築家集団の「京都デザイン研究会」のメンバーによる細密な図面と写生がいっぱいのもので、京都の51カ所の町並を活写し、そこに起きている問題点を2人の有能な記者がレポートしております。その本の編集内容や、挿画の雰囲気、この前年に出版された章子さんの一冊目の本と実によく似たレポートになっている事に私が感激し、また同じように、章子さんの3冊の本が京都の町並景観の保存運動の、いかにも魁となっている事に注目したのであります。30年を経た今になって、この京都新聞の“新・都の魁”と章子さんのこの三冊の本をゆっくりと綿密に読み、細密な建築や景観の情景を見ておきますと、30年の間に、我々が伝統的な京都の（日本の）建築や景観をいかに破壊し続けてきたか、これからいか

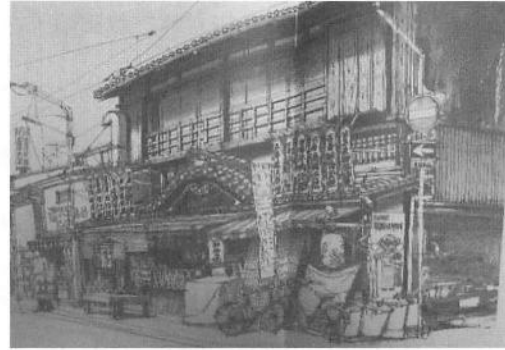
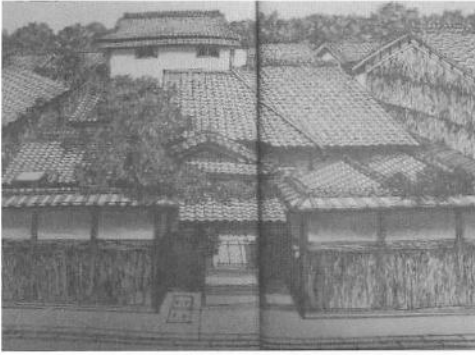


に修復・保存して行くべきか、ということを考えさせられます。前置きが長くなりますが、それでは順を追って、三冊の本について映像をご一緒に見ながら説明してゆきます。

まず一冊目の『京都町なかの暮らし』について、少し内容を説明いたしますと、この一冊は基本的に章子さんがお育ちになった中で、幾度か住まいを変えられましたその場その場の地域の特徴とか境界の人達との交流、ご両親、弟さんとの日常の心のふれ合いを、実に細かく記述してあります。章子さんがご両親と最後まで住まれた向日庵。この家に3人がいかに愛着を持ってこられたか、昭和8年に建てられた向日庵の成立から、住居としていかに優れているかということ、お母さんの弟さんの岩橋武夫氏と文章さんの交流、その中から生まれたお母さんと文章さんの恋愛、ご両親の深い愛の中からお母さんの英語の習得のこと、終生愛した向日庵でのお母さんの終焉のこと、等などが語られています。ご両親が京都で住みだした八条源田町境界のこと、その次には章子さんが生まれた東山三条古川町境界、大正13年ごろの古川町商店街の沢田さんの綿密な描写がすばらしい。またこの古川町の市場は現在も健在であります。

次には祇園町近くの南座裏での住まい、その周辺の縄手、花見小路、宮川町、建仁寺などの伝統的街並みの沢田さんの活写がすばらしい。その次に寿岳一家は南禅寺北門あたりに引っ越しされます。章子さんが女の子にしては、逞しい探検癖が開花し、元の祇園町から岡崎周辺まで歩き回る日常が記述されております。またご両親の生活を支える凄まじい家庭教師の仕事のこと、柳宗悦や河上肇博士をはじめとする多数の文化人との交流、近所の様々な南禅寺周辺の人びととの交流が生々しく記されております。この辺りで本人の住まいの話が終わって、終生京都との縁が切れることが無かった、京都の街のお店の探訪が始まります。

はじめに、寿岳家の衣料にまつわる店舗や衣料を自分の家で縫製したその当時の生活風習、次に食べ物にまつわる日常生活と意外と多い外食の店の紹介、東寺の縁日での買物、それぞれの風物や店舗が沢田さんの生き生きとした描写で綴られます。終章には「京の街の心暮らし」という項があり、京の伝統的な家並が崩れていく状況に警告を与えておられます。また古い洋風の建築をいろいろと取上げ、安定した揺るぎのない建物のたくさんある京の街を探訪し、濃厚な西洋と同化した京の文化を讃えておられます。特に寺町通りの鳩居堂、竹苞楼、旧丸善の建物、新門前や西陣の古い町屋、五条坂の河井寛次郎記念館、街中に点在する小さな地藏堂、などを沢田さんの細密な写真のような画像で紹介されています。河井寛次郎、柳宗悦、新村出先生と親子二代に亘る親交のくぐり文化史に残るべき貴重なことがらであると思います。



次に4年後に出版された第二冊目の『京に暮らすよろこび』について申し上げます。この本は章子さんが終生親しんだ京都の街の心に残る様々の店舗についての紹介と店にまつわるその“なりわい”の姿、章子さんの心温まる“ふれ合い”が沢田さんの絵とともに語られております。導入部の絵に、一乗寺の詩仙堂、本願寺の前庭、知恩院の山門、二条室町辺りの民家の屋根と祇園甲部の屋根の鳥瞰図、洛東遺芳館、鳥居本の鮎茶屋の“つたや”、裏千家辺りの界限、車屋町御池上ルの蕎麦の尾張屋、それらの情景を沢田さんの絵で紹介し、京の伝統的景観の最たる京都らしい情景を見せておられます。

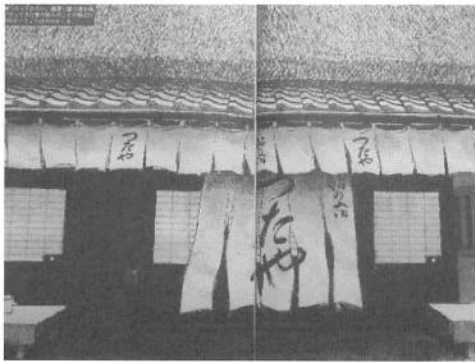
次にこの本の中核として祇園祭のレポートがあり、それは活力のある日本有数の大きな祭、文化財としての鉦や山の保存と継承、それに巡行と祭事の運営方法を述べておられます。この事とは打って変わって、一方では町こわしのマンションの出現、町屋がなくなってフェンスで囲まれた空き地、立体ガレージ等、街並の崩壊と行事にかかわる人達の人力の衰退、華やかな現象と同時に京の街が抱える課題を、国語学者と同時に社会学者であった章子さんの京の文化に対する警告を読むことができるのであります。このあと街のお気に入りの店舗の紹介が続きます。

祇園石段下の今は無き果物屋の八百文、店舗ではないが白川巽橋、古川町に抜ける白川の橋、八坂の塔周辺、高台寺門前、今のねねの道あたりと沢田さんの絵が続き、また今は無き梶井基次郎の寺町二条のレモンの店“八百卯”等、消えてしまった悲しい景観の物語が続きます。漬物屋の“竹田”（竹屋町衣棚）、寺町四条上ルの“三木蓬萊堂”（お茶）、熊野神社東入ルの“竹村玉翠園”（お茶）。老舗ではないが、鼓月から始まり、鶴屋某、若狭屋某、亀屋某、鎰屋某、俵屋に虎屋等の紹介、桂大橋西の中村軒、上御霊神社前の尾張屋等など、和菓子の老舗を数々記述されています。次に川端道喜のちまきと皇室とのエピソード、烏丸二条のカステラの越後屋、花遊小路の写真店の“ワンダス館”（現在富小路四条下ル）、記念写真にまつわる文章さん夫妻の恋の記述など誠に面白いくだりがあります。次に大丸の前の“菊光堂”（茶道具）、柳馬場四条上ルの“ぎぼし”、御幸町錦上ルの



旅館“近又”、東洞院三条の水野印房、寺町二条の芸艸堂（出版）で文章さんが出版した『仙人掌帖』の話等々、又観世流の謡曲を習うのに向日市に在住された脇田晴子さんにお世話になった事、浦田保利先生について謡曲の修業をされた事が記されています。それから建物とは無縁の人が二人紹介されています。扇子の骨を作る扇骨師の荒谷祝三さんと、染師の池田和夫さんである。又建築探訪となりますが、堀川今出川上ルの藤田家、堀川通西入ル二条城北の大塚氏宅、大黒町五条下ルの料亭“はり清”等が沢田氏の絵で現れます。次に古い町屋の探訪から離れて、古い洋館の数々が美しい絵でレポートされます。

終章に近く調査の方法は個人や個別の建物ではなく、あちこちの界限・空間の報告に変わります。学生時代からの京大周辺すなわち百万遍界限の進々堂はじめ個性的なお店、伏見、山科等の社寺、北野神社の周辺、出町から貴船・鞍馬、嵯峨野から鳥居本・清滝のあたりと巡り、最後には又市内中心部の新町通りの南観音山をとりまく路地とそれを支える人達の生活とたくましい町屋保全へのエネルギーを讃えておられます。路地に生きる人々の習慣すなわち月当番、掃除、メンバーの義務と賢明なつきあい方、路地の表と裏の住人の違い等々、路地の思想を根幹に据えてこそ京都の明日は存在すると彼女は明言して、この二冊目の本は終わっています。

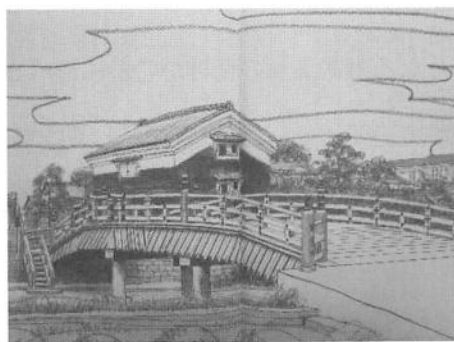
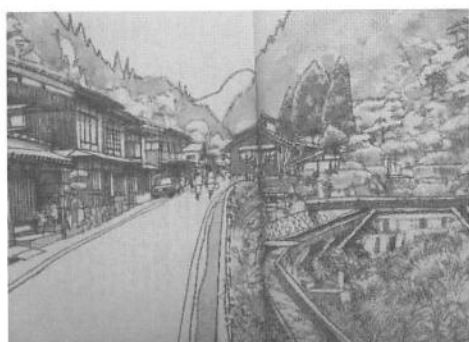


さて三冊目の『京の思い出』の紹介に入ります。章子さんはこの本の見出しに〈京に入る道、京から遠ざかる道、街道筋の町や村、そこに生きるたおやかな人々、祭りや行事、京に住んで70年、心に深く残る美しい自然との出会い、人々の豊かな暮らし〉と書いておられます。ついでに京都には他の都市に見られるような、場末というような所がなく、市域全体が「うらぶれ」ていない、充実した都市であると言い切っておられます。伏見は特に京都と対峙する文化圏だということで、酒の産地として栄える町、伏見稻荷のように稲荷社の元締め存在と門前町を高く評価しておられます。

それからそれぞれの道の事を街道筋という設定をして、周山街道、鞍馬街道、敦賀街道、丹波街道、西国街道、奈良街道、国道1号線（山科八幡）と分けて、沢田さんの絵とともに迎っておられます。

周山街道は北桑田の山村、美山町の武正旅館、茅葺き屋根の群落、佐々里の村、常照皇寺の桜と静謐な里を語り、鞍馬街道では宝ヶ池から山端の平八茶屋、鞍馬の匠斎庵、杜若の杜若家の事、弓削町の高宮さんの林業への執着の事業。敦賀街道では久多の常本佐喜子さんの山村生活、志古淵神社の花笠踊り、花折峠の近代化の波。丹波街道では園部町の思い出、八木町の山寺帝釈天の鐘、亀岡の出雲神社、八木町の木喰仏の話など。西国街道では終生住み馴れた向日町西山の夕焼け、乙訓の古社寺、柳谷観音と伯父さんの岩橋武夫さんの目の治療のお祈りの事、光明寺の紅葉、歴史の激動に満ちた大山崎油座の離宮八幡、天王山と三川合流の日本の大動脈たる地点、古い道筋の民家、宝石のように光る国宝妙喜庵の茶室、隣の村の水無瀬の里の事等々。奈良街道は、桃山、六地藏、木幡、黄檗、玉水、上狛、祝園等、美しい地名に感動し、戦争が終わった時、父文章さんと訪ねた浄瑠璃寺の九体仏と吉祥天女の事、笠置を越えた山村の南山城村、月ヶ瀬村の梅林、茶の産地和束と宇治田原に残された村落の古い家々の事等。

これで『京の思い出』は終わりますが、章子さんの目は懐かしい記憶と、訪ねる度に出会う人々の古い昔の生活様式を守る心、郷土への熱い思いが三冊の本になっていることに気付くのであります。



このまとめの文章には沢田さんの絵を紹介することは出来ませんが、講演の当日は皆様にスライドの画像で100枚近い風景を見ていただきました。今回のレポートを終って、京都人に愛着のあった失われた店舗や情景、又逆に章子さんのレポートされた当時のまま消えずに京都の街の貴重な文化遺産として残っている建物や景観の存在、30年の歳月の間に、京都の街がいかに変化してきたかという事を皆様もこの三冊の本をぜひご覧になって感じていただきたいと思います。

参考文献 杉田博明・三浦隆夫・京都デザイン研究所 作画『新・都の魁』京都新聞社編 1989年

寿岳章子著・沢田重隆 絵 『京都町なかの暮らし』草思社 1988年

(同上) 『京に暮らすよろこび』1992年、(同上) 『京の思い出』1994年

# 寿岳文章の青春—いかに人格は形成されたか

甲南大学名誉教授 中島 俊郎

寿岳文章(1900-92)はイギリス文学を専攻したが、それは単なるロマン派文学という専門分野にとどまらず、文学を広く世界文学という視野でもってとらえようとした。しかも文学研究を机上の空論に墮さず自らの人生を切り拓いていく指針として活用し、また逆にその研究から得た精神的な糧でもって生活を実践していこうとした文学者である。つまり寿岳にとって文学は「行じてこそ意義をもつ」<sup>1</sup>存在であったといえよう。しかも寿岳の実践活動は文学だけにとどまらず、「私のやってきた仕事は、大きく分けて三つになると思う。一つは、英文学を主軸とする外国文学の研究と翻訳。次の一つは、書物の美的ならびに社会学的機能の究明。残る一つは、愛着から来る和紙への学問的な取り組みで、和紙学とでも名づくべきか」<sup>2</sup>と述べているように、専門分野を超越し広大な知的領域に拡がり、横断していく。かかる精神的活動を実行し、維持していくためには強靱な人格を必要としたのは言うまでもない。よって着実な生活者こそが寿岳の人間としての理想像になっていく。若き日にゲーテを退けブレイクへ向ったのも生活者としての姿勢ゆえであった<sup>3</sup>。

本稿ではかくなる寿岳文章の精神がいかに形成され展開していったのか、その原点を人格形成がおこなわれる青年期に求めて追究してみたい。方法としては寿岳が繰り返し述べているように、「巨視的な面と微視的な面」を合致させ、その交差から実像を生じさせたいと考えている。そして、寿岳自身の言葉を多く引用することで、「寿岳自身」の口から語らせてみたい。

## I 真言宗立東寺中学校

寿岳文章は仏門に生れ、キリスト教の教育を受け、仏教を基盤にしてキリスト教文化を追究していった稀有な存在である<sup>4</sup>。

明治44年、好徳小学校を卒業した文章少年は助法をして三年間、石峰寺に寄寓し、大正3年4月、真言宗立東寺中学校の2年次へ編入学することになる。この頃より日記をつけるのが日課になっていたが、明治天皇の

<sup>1</sup> 寿岳文章「ダンテとブレイク」『わが日わが歩み—文学を中軸として』(荒竹出版、昭和52年)、p. 72.

<sup>2</sup> 寿岳文章「和紙と私」*ibid.*, p. 322.

<sup>3</sup> 寿岳文章「ブレイク研究への序説」柳宗悦、寿岳文章共編『ブレイクとホキットマン』(昭和6年、1月号)、p. 35.

<sup>4</sup> 寿岳文章の出自と仏教的背景については、自叙伝である「反骨の系譜」(『自伝抄』第8巻[読売新聞社、昭和55年]、pp. 227-75.)に詳しい。



崩御とそれに続く乃木将軍の殉死が少年の心に大きな影を残したが、早くも漢詩や小説の習作をおこない文学修業にいそしんでいる。だが、文学形式がいずれにせよ、たえず「望郷」がテーマとなっていた。両親の不和にさいなまれ、親戚縁者の家を転々とさせられ、寄る辺なき心に大きな傷をおった少年にとって自らの在り処を求めのは、自然な心情であろう。精神の帰郷を求めてやまない少年に一世を風靡した叙情詩人がつむぐ言葉は、まさに乾いた土地に降る慈雨のように染み入ったようだ。

われは巡礼、日も夜も  
さびしき門にかねならし  
歌のあわれにさすらえば  
母ます故郷の恋しさに  
旅のころもはぬれもすれ

引用したこの詩は文章少年が書いたものだが<sup>5</sup>、一読して旅、母、故郷という言葉に有本芳水の叙情詩の影響がみとれる。精神が生きる指針を求めて求道的になるほど、その内面は抒情を求めて沈潜していくのがロマン主義のつねである。大正3年3月に出版された『芳水詩集』は中学校、高等学校を通じて文章少年の枕頭の書であった。「芳水が他のどんな抒情詩人よりも多く、私の郷里や郷里に近い西国の風光を歌ったことがこのような親和のおそらくは原因であろう。関西学院在学中のある年の夏、私は芳水の『淡路島』の第一節「歌の淡路の海超えて、絵島が磯に風立てば、秋やよき日のうるわしき、五色が浜に散る石の、一つ一つのいろどりに旅の涙は湧き出でぬ」を口ずさみながら、数日をこの島に送った」という。『芳水詩集』には「旅を好み、ともに少年時代をなつかしき岡山に送りし」<sup>6</sup>竹久夢二による挿絵が巻頭に入っていた。天涯孤独の身をかこつ文章少年は挿絵に描かれた海辺にたたずむ少年の姿（図版参照）に自らを重ねたであろう。詩集は、「旅より旅へ」「思ひ出」「漂白」「ふるさと」「わが来し方を身かへれば」の五篇からなり、前述しているように、文章の近くにあった場所—たとえば「播磨灘」や「淡路島」—が歌枕として唄われていたからより親炙したのでであろう。『芳水詩集』は若き日の渴望を満たしただけではなく、後年に『ブレイク抒情詩抄』（岩波文庫、昭和6）を訳すとき、

<sup>5</sup> 寿岳文章「若き日の読書—抒情の世界に沈潜 藤村の詩のとりこに」『神港新聞』（昭和32年10月28日）

<sup>6</sup> 有本芳水「序」『芳水詩集』（実業之日本社、1914）、p. 1.

詩語や措辞において学ぶところが多々あったはずである。

寿岳は「私の中学時代」というエッセイを昭和32年に発表しているが、そこには大正3年から7年にかけて東寺中学の生徒であった思い出が新鮮な筆致で綴られている。9月早々京都へひきかえす時には、冬用の衣類で重くなった柳行李を人力車に乗せ、京都駅から八条通を西へ抜け、済世病院の横から石畳の道を、観智院の方へ走らせ、まだ同室生の帰っていない寮の部屋にようやくたどり着くと、「へりの無い琉球表の畳から、ぱらぱらと蚤が脚に飛びつき、忽ち血を吸い取った」というような劣悪な環境のもとで暮らしていた。でも、未明の空に飛行船を仰ぎ、また第一次世界戦争中の青島陥落(大正3年11月7日)を記念する提灯行列に参加し、娯楽としては寄席で落語を楽しみ、東寺東門に近くの小屋で新派や連鎖劇(演劇と活動写真を交互に上演・上映する形式)を堪能し、新京極の富貴亭でもまた落語を楽しんでいる。また林美術商の物故者のために法要が学校の講堂でいとなまれた折、真言宗のお経である理趣三昧がすむと、和菓子老舗、銚屋(かぎや)の最中十個入り一包みが配られ、「この世にこんなうまいものがあるかと思った」ほどの口福を味わった。こうした外的な生活に交えて、精神的な情景が点描される。それは文章少年に学問に対する姿勢を知らしめる点で黙過できないものである—「現在の東寺の塔が、決して美しい建て方でないのは、少年の私にも感じられた。しかしあの塔には、私を学問の道へ踏みきらせた一つの因縁がある。その頃習った宗門用の教科書に、観智院第一世となった泉宝(こうほう)というえらい学僧が南北朝戦乱のさなかにそれを避けて塔上で講義していたところ、流れ矢に当って死んだという話が出ていた。私はこの話を覚えていて、京大選科へはいるための試験のときの論文に、泉宝にことよせて学者の心構えを書いた。試験官であった新村先生が、ずっと後年、京大図書館の館長室にそれが残っていたと言って、手紙をそえ、返して下さった。ところが近時、泉宝の示寂地(亡くなった地)東山八阪吉祥園院関係文書の傍証により、流矢は本当の流れ矢ではなく、赤痢のことだとの説が出てきた。その方が正しいかも知れぬ。しかし私は、やはりあの話のモラル(精神的な意味)を、どこか私の心の片隅で、大切にしておこうと思う」<sup>7</sup>。このささやかな挿話から寿岳文章の資質が事実よりも真実を重視しようとする文学的志向を強く備えているのを確認することができよう。

後年、宗立東寺中学時代での生活は何度か描かれている。そうした随想から東寺中学での仏教による人格形成は寿岳文章にとって決定的な役割を果たしたことが理解される。『八宗綱要』、『天台四教義』、『弁頭密二教論』などの基本的な仏典を学んだことは、「現在の私とつながる三つの太い線」のひとつであったという。長谷宝秀(1869-1948)、梅尾祥雲(1881-1953)などの高僧から「伝統的な教学の輪郭を身につけられたこと」こそ、ま

<sup>7</sup> 寿岳文章「私の中学時代」『洛味』69号、昭和32年、臼井書房

さに「現在の心の片すみに強く燃え続けている宗教的真理への関心」<sup>8</sup>となり、『源氏物語』、『梁塵秘抄』以降の日本文学の水脈になっている仏教を、知識としてではなく、受肉した内部経験として理解できるようになった。仏教を空疎な知識としてではなく、「内部経験」として「受肉」する過程には、會田龍雄による動物学、生物学の授業、佐々木惣一・河上肇共編『法制経済教科書』なども文章少年の精神に深く食い込んでいた。たとえば後者には産業革命が労働者に与えた悲惨が言及されていたが、ブレイクもまた産業革命の犠牲者に満腔の同情を寄せていた。

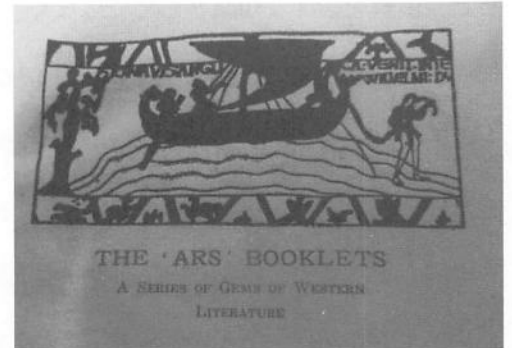
寿岳文章の場合、文学作品は何よりも人格形成に寄与した。16歳であった1916年、発禁処分になったプロレタリア文学の先行となる宮島資夫『坑夫』に加えて、土岐哀果（1885-1980）が編集した生活思想誌『生活と藝術』を愛読したと自筆年表に寿岳は記しているが、後年の読書傾向から推察して毎号のように掲載された土岐哀果の詩歌、堺利彦、荒畑寒村、大熊信行などの社会評論には必ず目を通していたと思われる。だが、この雑誌が寿岳にとってことさら新しい意味をもったのは、多くのページが割かれている広告欄ではあるまいか。多大な情報をもたらされたからである。東雲堂書店から出されていた多くの詩歌集—齊藤茂吉『赤光』、三木露風『露風集』、『白き手の獵人』、国木田独歩『独歩集』、北原白秋『思ひ出』、『桐の花』、『東京景物詩』など—の新刊に注目し、後年、こうした詩集を少なからず言及している。でも、こうした単行本以上に寿岳青年に訴えていたのは、雑誌広告である。自らも雑誌『未来』により、山宮充訳のイエーツのブレイク論に目を開かれたと述べているように、『スバル』、『白樺』、『我等』、『仮面』などの雑誌に加えて、『未来』の目次が見開き広告によって紹介されている。『未来』は年四回の発行で、「在来の自然主義」からの脱却を試み、「吾人の精神を取り返し吾人の思考吾人の生活をしてさらに増大せしめんとする目的を有す」というように生活のなかに芸術を注視しようとする編集方針に大いに心惹かれるものがあつたはずだ—「吾人が平俗の生活中、日々失いつつある貴重の物をして発達せしめ、念々の渴望をして飛翔せしめ、吾人の生をして無限ならしめんとするにあり、吾人の為さんとするところはすべて新しきものにあり、吾人の藝術は虐げられし藝術の意義を最もよく闡明し、謙虚に、熱烈に、叡智的に、所信を遂行すべし」<sup>9</sup>と高らかに宣言している。

また、『未来』の第一号にはW・B・イエーツの『善悪の観念』から「ウィリアム・ブレイクと想像」が山宮充の訳出にて掲載されている。こうした雑誌広告と同じくらい寿岳に意味をもったのは、書評ともいべき寸評をともなった「新刊紹介」である。この新刊案内のページは、芸術に渴望している若者にとって大きな文化の窓

<sup>8</sup> 寿岳文章「わが心の自伝」神戸新聞学芸部編『わが心の自伝』（神戸新聞社、昭和42年）、p. 40.

<sup>9</sup> 『未来』の発刊『生活と藝術』第4号、大正2年12月号、広告。

となったのは想像に難くない。『生活と藝術』(第5号)には、バーナード・ショウ、堺利彦訳『人と超人』、アンドレ・ジイド、和気律次郎訳『オスカア・ワイルド』などの外国文学が精力的に紹介されているが、そのなかにトルストイ、加藤一夫訳『闇に輝く光』の紹介がある—「トルストイの死後、遺稿の発見されたのが尠なくなかった。そのうちで、ハヂ・ムラト、神父セルギイ、およびこの「闇に輝く光」などは、最も重要なもので、特に、「闇に輝く光」と「神父セルギイ」とは、かれの晩年の胸中を窺い知ろうとするものにとって、無限の意義と非常な興味とをあたえる。「神父セルギイ」そのほかの遺稿数編を翻訳して



「隠遁」の一冊をつくった僕にとって、この新訳書がいかに喜ばしい出版物であるかは、ここに断る迄もない。主人公ニコラス・イロノキッチ・サリンツエフの生活が大體としてトルストイ自身の生活であることは一般のみとめるところで、その自己革命の苦悶の力は、なにびとにも到底卒讀をゆるさない<sup>10</sup>とある。「自己革命の苦悶の力」というような字句は文学青年の胸を打つのに十分である。寿岳文章の最初の翻訳がトルストイの出家事件を描いたチェルトコフ『晩年のトルストイ』(岩波書店、1926)であることを思えばきわめて興味深い。やがて、文章少年は仏光寺近くの新刊書店、東枝へ『未来』を購入しに行くことになる。

さらに寿岳文章が自ら記した年譜の大正6(1917)年には、「アルス英文叢書でギッシングの『春』やコンラッドの『青春』を読み、わずかに心を慰める」とある。「アルス英文叢書」(図版参照)とは、詩人、北原白秋の弟、鐵雄が経営していた書肆アルスから出版していた英語学習書である。広告に、「本叢書は近代文芸の宝石集にして詳密なる注釈及び訳文を付す」とあるように、読者対象を「中学上級以上」として、英語の原文と「辞書を用いざる程度において注釈を付」したものであった。そして、執筆者は「文壇の大家にして、併せて語学界の権威者」としてうたわれ、上田敏、森鷗外も執筆予定者にあがっていたが、主に戸川秋骨と平田禿木が分担していた。前者はギッシング『田園の春』、ツルゲーネフ『獵人日記』、ハーン『怪談』、ポー『鋸山奇談』、ステューヴンソン『幻の人』などを、後者はハーディ『帰らぬ船』、コンラッド『青春』、ワイルド『新生』、シモンズ他『近代英国小品集』などを担当した。なかでも平田禿木が執筆した『近代英詩選』(大正5年)は、ワーズワス、クリスティーナ・ロセッティ、ロレンス・アルマ・タデマなどの詩に注釈をほどこし、巻末には「韻律法」があり、それは「複雑な英詩のもっとも簡潔明快に略述したもので、英詩研究者の知っておかねばならぬ必要なもの」であった。後年、本書を翻刻した小川和夫は、「日本における英詩鑑賞に一時期を画した名著として世を眩

<sup>10</sup>「新刊」『生活と藝術』第5号、大正3年新年号、p. 60.

目せしめた。この書に見られるようなイギリスの詩にたいする読みの深さと鋭さ、周到さと緻密さは、それまでわが国に見出されぬものであった<sup>11</sup>と賞賛している。おそらく詩歌好きな文章少年も熟読したであろう。

叢書の第3編として大正5年6月に出たのが『田園の春』で、『ヘンリー・ライクロフトの手記』の一部であった。「英文学に志す人、真純なる文芸の句を味わむとする人のために、懐かしきこと限りなきこの書を薦む」と広告に案内されている『田園の春』は、ふたつの点で多感な文章少年の心をとらえていた。まず篇中にあふれる自然描写をあげることができよう。編者、戸川秋骨もまたギッシングの自然を描く手腕を高く評価している—「必ずしも高遠の理想とか瞑想とかを説くのではないが、その言葉は一々胸にこたえる、その自然の観察は、まのあたり著者と共にデヴォンは *Exeter* の郊外を散歩して居るような心持にならせられる。その夏の部であったか冬の部であったか、旅寝の暁に *Avon* の鐘聲に目を覚まされる處の感想を記した一節があったが、読んでおる内に身は沙翁の舊跡に居るが如く、また巻をとじれば、恰も寒山寺の鐘聲を聞くの想にも比すべき感がして、身は詩中のはた書中の人となったような心持がした。その心持は今までもなおつづいて居る。」<sup>12</sup>自然から傷つきやすい精神を癒されていた文章少年は、こうした自然描写に大いに感興を覚えたはずだが、同時に描かれている読書熱、書物愛にも少なからず感動していたにちがいない—「本は図書館で借読すれよく、わざわざ自らの書棚に並べる必要がないと言う人々がいる。理解に苦しむ。書物には独自の匂いがある、ページの匂いを嗅げば、その本にまつわる記憶までもが蘇ってくる。たとえば、手許のギボンズはミルマン版全八巻の上製本で、30年来、再読をしているのだが、表紙を開くと曰く言いがたい香りが本全集を褒章として与えられた時の意気高い匂いがおきないときはない。シェイクスピアは決定版のケンブリッジ編シェイクスピア大全集で、その香気ははるかかなたの記憶をも誘う。元来、父の蔵書であったが、読んでも理解できない幼少の頃、親の言いつけで書架から一巻を取り出し、自室でうやうやしくめくることを許されたからである。全集の薫りは今日でも変わらず、手にすれば不思議に穏和な感じが心を満たす。そのために、シェイクスピアをこの版で読むことはめったにない。年のわりに目は悪くなっていないので、読むならばグローブ版と決めている。これは大部な全集を買うことが途方もない冒険だった時代に求めた。それゆえ、グローブ版シェイクスピアには犠牲の痛苦と抱き合わせの思い入れがある」<sup>13</sup>。

後年、寿岳は自らの思想の遡源をたどり、「思想的なものに関心があったのは、小さいときから、寺に生まれ

<sup>11</sup>小川和夫「はしがき—『近代英詩選』再刊にあたり」平田禎木『近代英詩選』（栄光社、1982）、p. i.

<sup>12</sup> ちょうぢ・ギッシング『田園の春』（アルス、大正9年）、p. 66.

<sup>13</sup> George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft*, annotated by Shukotsu Togawa (Tokyo: The Arts Bookshop, 1920), pp. 28-29.



た関係で、わからなくてもお経などを読んでせいでしょう。無理にもわからせようとがんばって、たとえば大蔵経などは中学生時代から読んでましたので、思想的な訓練は自然にできていたかもしれません<sup>14</sup>というように、中学時代から読経などを通じて仏教的な影響に意識的であったと明言している。

## II 関西学院高等部

『英語の日本』という英語学習誌に掲載されていた在校生による関西学院高等部の紹介記事を読んだため、寿岳文章は関西学院を志願したという。『英語の日本』(*The Nippon*)は明治41年4月に創刊され11巻131号まで刊行された英語の学習誌で、佐川春水が主幹をつとめていた。(図版参照) 当時は学校案内があまり盛んにおこなわれてはおらず、受験生は雑誌上で情報をえるのが普通であった。たとえば東京工業高等学校の英語教育を在校生が伝えている一文をみておこう。教室にいるような臨場感にあふれている。



在校生で二年生に属する安田晋三は、「本校の英語は文学よりもむしろ、横文字を達者に読む素養をつけるために設けられている」と高工の英語学習の特徴を要約している。授業では文法を重視し、語義の精密な理解をめざし、英語に親しむことが重視されていると述べ、教科書については小説類と論文集の二種類を用い、一年生ではシャーロック・ホームズの探偵小説、二年生では『ボートの三人男』などの小説を読む。論文についてはステッドの『19世紀』、『20世紀随筆集』などを読んだと報告している。英語教員の紹介もあり、「佐川(春水)氏は正則にて知られている。どんな六ヶしい文でも快刀乱麻を断つ底の熟練で気持よく諧謔を混えて面白く議議される」とある。英語教育者として有名であった佐川春水は、

正則英語学校の教授であった。教科書がほぼすべて原書を用いるため入学当初は専門用語にまごつくことがあるがすぐに馴れてくると教え諭し、訳読偏重の弊害を防ぐため英語しかしゃべってはならない会(Tokyo Higher Technical School English Society)を設え、日本語を用いた者は罰金に処せられた。この罰金を集めてアンパン会を開くという。「アンパン会とは高工の名物の一つで互いに集ってアンパンを食いながら控所で話し合う」

<sup>14</sup> 寿岳文章、福田陸太郎対談「寿岳文章—学問と人生と美の探究者」『現代英語教育』1967年3月号

会であった<sup>15</sup>。じつに微笑ましいエピソードではないか。このような学生による学校紹介を読んだ文章少年が抑圧されている自己を解放してくれる明るい空気に満ちた学び舎として関西学院高等部を選択したのであった。

「佐川春水氏が主筆であった『英語の日本』という雑誌に、新しく英文科ができたばかりの、神戸の関西学院評判記が出ている。上筒井にあるこの学校へなら、寺の縁故で、神戸市背の再度山大竜寺の食客となれば、寺の仕事を手伝いながら、そこから通えるだろう。法案寺の弟子の一人が、すでに関西学院へ入学していた。私は意を決し、大竜寺の伊達住職に頼み、大正8年4月、関西学院高等部英文学科へ入学した」<sup>16</sup>と述べ、その意義を「私は関西学院に入学した。私の青春は、はじめてそこで自分を位置づけたようである」<sup>17</sup>と結論している。

まず若き仏教徒が新しい地でえたものはキリスト教の教義であった。「苦学生の私は、関西学院を經由して京大への、変則コースを進んだが、関西学院に学び、のちそこで教えたことも、私には豊かな収穫をもたらした。ノルマン父子のような、日本での伝道に深い使命を感じる内外のキリスト者が、そこにはまだかなり在職していて、私の、全人的にキリスト教を知る機縁となったからである。この機縁が無かったなら、後年、キリスト教用語専門委員をつとめたり、神曲の全訳をひきうけたりする気になれなかったであろう。そして私の英文学は、キリスト教との関連についても眼目がすえられている」<sup>18</sup>というように精神的な支柱を与えられたのである。ちなみにW・H・H・ノルマン(1905-71)はカナダ人宣教師で、関西学院文学部英文学科教授であった。有名な歴史家であり外交官でもあったE・H・ノルマン(1909-57)は弟である。

だが、仏教徒の寿岳にとってキリスト教は変則的な受容のかたちをとった。『アミエルの日記』に例を求めてみよう。「『汝のわかき日に汝の造り主を覚えよ』伝道の書の最後の章にあるこのことばに心打たれて私の読書が、いちじるしく求道的な傾斜を見せるようになったのは、京都で中学の課程を終り、そのころ摩耶山麓の原田の森にあった関西学院高等部へ入学してからであった。ころは大正のなかば、第一次世界大戦のあとで、神戸でも米騒動が記憶になまなましかった。/有島武郎や倉田百三が、またその背後にあるトルストイやドストエフスキーやロマン・ロランが、私をも含めてそのころの若い読書人の心をとらえた。木村毅訳の『アミエルの日記』上巻が出たのは大正10年の12月であったが、夜学校の教師をアルバイトとしていた私は、それを元町の川瀬か宝文館かで買ってきて、火の気のない夜ふけの下宿で読みふけたことを覚えている」というように人道主義への傾斜していく過程を説明してくれる。やがて藤村、啄木では満足できず、トルストイへ移行してい

<sup>15</sup> 『英語の日本』(The Japan) 大正15年, p. 155.

<sup>16</sup> 寿岳文章「わが心の自伝」op. cit., p. 41.

<sup>17</sup> 寿岳文章「藤村たずさえ旅一語りたくない少年の日」『読売新聞』(昭和36年5月8日)

<sup>18</sup> 寿岳文章「若き日に」寿岳文章編『寿岳文章集』(彌生書房、昭和58年)、pp. 24-25.

くのだが、「ドストエフスキーが理解できるのは中年以後だと思うが、その点トルストイは写実的ではいりやすいし、内容もまた深い。私がスタンダールよりトルストイにひかれるのは、トルストイのほうが一個の人間として、より悩みが多い人柄にひかれるからかも知れないが、それと同じ意味でもっとも印象的なのはアミエルの『日記』である。この訳本に接した時の感激は私の二十歳代の読書歴の中で特筆すべきだろう。彼はスイスの大学で地味な学究生活を続け、講義はだれからも相手にされない不遇の人だったが、その著書は、多少のペシミスティックな思想の型を持っていて、一人で人生に対し思い悩む人に格好の指針を与えてくれる名著である。音楽家の解釈にみる説得力、自然に対する鋭い観察—これらはともするとあらあらしくなる気持ちをやさしく救ってくれた」と精神的な糧となったいきさつを語っている<sup>19</sup>。

では、『アミエルの日記』はどのような側面で感銘をもたらしたのか。ある日の記述をみてみよう。「偉い人々の名前が、ひそかに非難するようにおまえの眼の下を通って行き、冷然たる大自然は、明日になればおまえは、束の間の生を終って、生活らしい生活もしないで消えて行くのだと、言っている。おまえにヨブの戦慄を與えるものは、おそらく永遠の息吹なのではないだろうか？ 一條の光線によって萎む草である。この人間とは一体何ものだろう？ 無限の深淵の中にある我等の人生とは何であろうか？ 私は自分に対してだけではなく、私と同じ種族に対し、あらゆる死すべきものに対して一種の聖なる恐怖を感ずる。私は仏陀のように、宇宙の迷妄の輪である、「大きな車輪が」廻っているのを感じず。そしてこの無言の茫然自失たる状態の中に、真の苦悩が存在する。女神イジスは、そのヴェールの片隅を上げ、静観の眩暈は大なる神秘を覗く者に電撃を與える。私は息をつくこともできない。私は運命の底知れぬ深淵の上に一本の糸で吊るされているような気がする。それは無限との対決だろうか？ それは偉大なる死の直観だろうか？」<sup>20</sup>とあるように、アミエルの思索のなかに仏教的な要素をうかがうことは容易である。つまり、アミエルというキリスト教徒の煩悶のなかに、寿岳は仏教的な要素を見出し、両者を折衷させて救済しようとする態度に心打たれていたのである。これこそが寿岳が生涯にわたり生きるうえで自己の指針としていく態度である。この訳注の冒頭で、かつて学校の前の古書店に売られていたスウェーデン語訳の『アミエルの日記』は今どこにあるだろうかと感慨にふけているが、店頭に放

<sup>19</sup> 寿岳文章「私の読書歴—忘れえぬアミエルの感激」神戸新聞(昭和40年11月12日)

<sup>20</sup> The names of great men hover before my eyes like a secret reproach, and this grand impassive nature tells me that tomorrow I shall have disappeared, butterfly that I am, without having lived. Or perhaps it is the breath of eternal things which stirs in me the shudder of Job. What is man—this weed which a sunbeam withers? What is our life in the infinite abyss? I feel a sort of sacred terror, not only for myself, but for my race, for all that is mortal. Like Buddha, I feel the great wheel turning,—the wheel of universal illusion,—and the dumb stupor which enwraps me is full of anguish. Isis lifts the corner of her veil, and he who perceives the great mystery beneath is struck with giddiness. I can scarcely breathe. It seems to me that I am hanging by a thread above the fathomless abyss of destiny. Is this the Infinite face to face, an intuition of the last great death? (Henri-Frederic Amiel, *Amiel's Journal*, trans. Mrs. Humphrey Ward (London: Macmillan, 1885), p.174.

置され埃をかぶっていた訳書に寿岳は若き日の自らの姿を投影していたのである。

まず関西学院での生活は、精神の岐路を文章に迫ったという点で看過できない側面がある。それは英文学徒になる文章にイギリス文学の精神的支柱であるキリスト教を教えたことである—「京都大学文学部に進む前の四年間を、メソジスト派のキリスト教学園に学生として送ったことは、いまふりかえってみると、大きな意義をもつ。ここで私は、はじめてキリスト教への道を教えられた。英文学は、キリスト教への道を教えられた。英文学は、キリスト教への理解と体験なしには、むなしい知識にすぎぬであろう。現在の私が、仏教へと同程度のキリスト教（もちろんカトリシズムを中心として）への理解をもっているのは、心が若くてやわらかな時代を関西学院ですごしたからである」。ただ、それ以上に重要なことは、キリスト教をしりぞけるのではなく不可知論者としてキリスト教を信じ、仏教による道を再確認した点である。

ただ私がにがにがしく思うのは、文学科に関する限り、ただ一人の先生を除いて、日本人も外国人も、私にプロテスタント・キリスト教への改宗をすすめたことである。仏教の真理をいつくしめばこそ寺を捨てた私が、キリスト教徒に改宗するためには、キリスト教の真理を、仏教のそれにまさるとするだけの強い理由がなければならない。私に改宗をすすめる宣教師たちは、当時の私の貧しい理解をもってしても、ほとんど仏教を知らないのと真理の前では同意語ではないか。そのときも今も、私は自分をよい意味でのアグノスティックス（不可知論者）の一人だとする立場に、むしろ純粋なよろこびを感じず。私に改宗をすすめなかったただ一人の宣教師、それは故ウズワース博士であった。戦後、私は博士夫人の依頼で、博士の伝記を英文で編み、一冊の本とした。その伝記を編みながら、私の心の自叙伝が、博士のそれとも内面的にはつながることの多いのに驚いた<sup>21</sup>。

ある日、寿岳が卒業論文のことで、ベイツ博士を私邸に訪ねたところ、「君は卒論にブレイクをとり上げるそうだが、なぜ選りに選って、あのような狂人をとり上げるのか」との反対意見にあった。これはベイツ博士だけの偏見ではなく、英語文化圏での定説であった。だが、「私は、既に柳宗悦を東京高樹町の自宅に訪ね、ブレイク狂人説は払拭していたので、方針は変えず、構想に従って作業を進め、当時の不完全なブレイク詩集に頼りつつ、ブランジュニャの漢訳『大方広仏華嚴経』に見られる相似の発想や表現を拾うという、極めて素朴な比較研

<sup>21</sup> 「わが心の自伝」 op. cit., p. 43. ウズワースとの関係については、拙論「戦禍をこえた師弟愛—『ウズワース追憶集』」（甲南大学紀要 文学編）170号（2020年3月），pp. 1-14. を参照。

究を試みたのである。『一粒の砂にも一大世界が、一瞬の時にも永遠が見える』というようなブレイクの語句に出会うと、私は思わず興奮したのをいまも憶えている」<sup>22</sup>。

ここでは言及されていないが、指導教官であった佐藤清（1885-1960）の尽力も忘れてはならない。1918（大正7）年、佐藤はブレイクへの関心も深く在英中、空襲下のロンドンで大英博物館の図書室へ通い、ブレイクの稿本からテキストを筆写していた。たとえば、ブレイクの『アメリカ』を写しているが、「この note は、十年前、British Museum の Print Room で書きとった多くの notes の一部である。Blake の原版は其後多少翻刻されているが、その数は極めてすくないようだ。それで原版に接しない Blake 愛好者の参考にもなるかとも思って、私の notes の一部をここに抄記するわけである。十年前の note だからと言って、現在の私が責任を回避する理由の一つもない」<sup>23</sup>というような注釈を論考の冒頭に掲げている。「その当時、関学の先生でアイルランド文学の研究のために留学して帰ってこられた佐藤清先生が、盛んにアイルランド文学の新風を吹きこんだ。その佐藤先生がやはり Blake が好きで、先生の関係していた『想苑』という雑誌に、私も Blake 論を出したこともございます。まあ、そんなところから Blake へ入ってゆくわけですが、一つには Yeats や Blake に見られる東洋的な発想にひかれたことも否めません」<sup>24</sup>と寿岳自身が述懐しているように佐藤は学生にブレイクを熱心に鼓吹した。関西学院高等部英文科ではブレイクのかなり専門的な授業がされていたのである。

その佐藤が主査として審査した卒業論文は、「大方広華嚴經に見られる相似の発想や表現」をもとにブレイクの詩句を比較して書かれた。ただ、ここで誤解してはならないのは単純にブレイクを仏典と比較したということではない。仏典をゆるぎなき基盤にすえてブレイクを読み込むのである。結論部をみておこう。

こは華嚴經不思議法品に説いて、『長劫を以て短劫に入れ、短劫を長劫に入れ、或は百千の大劫を一念と爲し、或は一念を即ち百千の大劫となす』と言ひ、『一微塵の中に普く三世の一切諸佛の佛事を現ず』と言ひ、或は楞伽の無常品に、『其夜に正覚を成じてより、其夜に涅槃するに至るまで、この二の中間に於いて、我、すべて説く所なると言う隔法異成（かくほういじょう）の認識である。ここに彼[ブレイク]の想像の最後があり、到着がある。芸術と宗教とを一つに結び、樂園と地獄とを婚姻の筵に招く相即無蓋の縁起がある。彼はこの境地に到り得た。千八百二十七年の夏八月十二日、恋人の如く彼の愛した『想像』の絵『天帝』に最後の筆をそめて、生と死の交響楽の中に、彼はあこがれの都ジェルーサレムを眼のあたりに見ながら、

<sup>22</sup> 寿岳文章「ブレイクについての私記」ダンテ『神曲 煉獄篇』（昭和62年、集英社）、p. 320.

<sup>23</sup> 佐藤清「Blake の原版詩書“America”に就いて」『英語と英文学』（英学社、昭和3年8月号）、p. 79.

<sup>24</sup> 寿岳文章、福田陸太郎対談「寿岳文章—学問と人生と美の探究者」『現代英語教育』1967年3月号

高らかにハレルヤを歌いつつ永遠の懐に抱かれて行った。その死を飾る法悦のよろこびは、伝記記者がいずれも聖者の死を叙する敬虔な筆を以て美しく描いている<sup>25</sup>。

卒業する直前の大正12年2月24日に柳宗悦と寿岳文章は初めて出会うが、すでに10年近く前に出版されていた柳の大著『キリアム・ブレイク』に「負うところが多かった」と卒論の冒頭に謝意を示しているように、「若しもブレイクの思想の特質がその神秘思想的宗教性にあるならば神秘的宗教として最も壮大な体系をもつ波羅門教を顧みなければならない。ブレイクの思想が一见して東洋的色調をおびている事は事実である」<sup>26</sup>とする仏教哲学への言及を寿岳は印象深く読んだはずである。1927（昭和2）年、『英語青年』はブレイク特集号を組み、土居光知、斉藤勇、岡倉由三郎、福原麟太郎などの大家にまじり、新人としては破格の扱いで寿岳文章に3回にわたり「ブレイク神話の輪郭」を寄稿させている。「ブレイクの如く個性の力極めて強き人にあつては新しき酒を古き革袋に盛ることはその酒の腐敗を意味する。彼は自ら革袋を作らねばならなかつた」<sup>27</sup>と述べて、ブレイクの独自の神話形成を追究した論文であるが、大乘仏教を礎にしてブレイク神話が胚胎する「思想的欠陥」を指摘している—「大乘仏教の至極は、我々の欲そのもの、鬪そのもの、愛そのもの、慢そのものをさへ菩薩清浄の位であるとする。ブレイクもまたかかる悟得の境地に到らんことを希って、肉なるものを大膽に讚美したが、彼が生れながら持つ宗教的稟請は、一方肉なるものを讚美しながらも、靈の光理に導かれて Imagination のふところに赴き、そこに唯一無二の喜びを求めようとする強いあこがれを消し去ることができなかった Urizen 的なものが彼の神話の到る所で苛酷な扱いを受けているのはこのためである。ここにブレイクの愛すべき一本気が見られるが、それと共にまた、—もし彼の住んでいた時代と環境とを度外視するならば—批難を免れぬ思想的欠陥も指摘されるであろう」<sup>28</sup>と指摘した。連載した一連の論考は京都大学大学院に提出した修士論文の論旨であろう。

「なにゆえにブレイクに惹かれるのか」と自らたてた問いに、寿岳は「ブレイクが私の心を惹く第一の点は、彼の思想が甚だしく東洋的、殊に大乘仏教的であることに存する」<sup>29</sup>ことを第一にあげている。そしてその理由を「予言詩の多くに見える逆説的なブレイクの思想は、直指人心の想像力に恵まれること少き西欧人には、概

25 寿岳文章、卒業論文『ウィリアム・ブレイクの「ジェルーサレム」研究』, pp. 140-41. この貴重な卒業論文の披見の機会を与えて下さった井上啄智先生（前関西学院学長）に感謝します。

26 柳宗悦『キリアム・ブレイク』（洛陽堂、大正3年）、p. 519.

27 寿岳文章「ブレイク神話の輪郭3」『英語青年』57巻11号、p. 375.

28 寿岳文章、ibid., p. 374.

29 寿岳文章「ブレイク研究への序説」op. cit., p. 31.

して甚だ不自然と思われるであろう。しかし逆説を尊ぶ東洋思想に長い間訓練されてきた我々の耳には、ブレイクの説く所は甚だ自然であり甚だ近い。幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛著を感じるのはまことに当然である」<sup>30</sup>と明解に答えている。

では、ブレイクの表現を仏典に遡源して比較参照する研究とはいかなるものか。具体的に検討してみよう。寿岳はブレイクの『ミルトン』から詩行を引用して、実証してみせる。

Every Time less than a pulsation of the artery

Is equal in its period & value to Six Thousand Years. (*Milton*, ll. 62-63.)

(脈搏の一動にも足らざる一刹那、悉くその時劫と価値とに於て六千年に相若く。)

この詩行と意味のうえで等価な表現を見出そうとして、『長劫を以て短劫に入れ、短劫を長劫に入れ、或は百千の大劫を一念となし。或は一念をば百千の大劫となす』(不思議法品)

と『三世を以て一念となし、一念を以て三世となす』(入法界品)と仏典から、瞬時のなかに永遠を視る表現を探っていく。さらにブレイクのもっとも有名な詩行で例を求めていく。

To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in the wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hand,

And Eternity in an hour, (*'Auguries of Innocence,' ll. 1-4.*)

(一粒の砂に世界を見、

一茎の華に天国を観る。

汝がたなごころに無限を握り

一念のうちに永劫を知れ。)

『この蓮華蔵(れんげぞう)、世界海の内に於て、一々の微塵の中に、一切の法界を見る』

(盧舎那佛品)『無量の佛刹の思議し難きを、皆悉く能く一掌の中に置く』(菩薩十佳品)『一念をして不可説劫

<sup>30</sup> Ibid.

に入らしむ』(普賢菩薩行品)

『一念を以て三世となす者、一念の中に於て一切の刹に諧(いた)る者』(入法界品)」といった例がたちどころに列挙される<sup>31</sup>。じつに深く仏典を知悉していると言わざるを得ない。

寿岳はブレイクを忘れることがなかった。『神曲』の翻訳について、「今度の翻訳は私としては、生涯をかけてやった勉強の一つであるブレイクとダンテを結びつけたいのです。さし絵を通してね。ですから、ブレイクのダンテさし絵百一枚全部を収録します。こういう『神曲』訳の試みは世界中どこにもない。そういうところにも意義があると思うんです。」<sup>32</sup> ただ、ブレイクの挿絵は『神曲』理解において功罪相半ばする。ブレイクは本文を忠実になぞらえずにダンテ批判、宗教的反動などにとどまらず、みずからの世界観を挿絵に色濃く注入してしまった。本文と挿絵にはそうした齟齬が生じるが、それでも寿岳はこの「異質な挿絵」を入れたかったのであった。恐らく自らのなかでダンテ、ブレイク両者を往還させ共鳴を試みてみたかったのであろうか。

### III ダンテ『神曲』への道程

寿岳訳『神曲』の斬新さはどこに存するのか。小説家、福永武彦は使われた訳語について、「翻訳は、意味さへ分ればいいとするただの平易な口語体ではない。いな、これはこくのある、周到な翻訳なのである。右の冒頭の部分に「ますぐ」とか「こごしさ」とか「げに」とか「をさをさ」とか「はきと」とかいった、少し古めかしい用語がある。しかしその意味は見当のつくものであり、古語であっても死後ではない。それらは多く忘れられかけている美しい日本語なのである。しかし全体の調子は、これだけ見ても分るように決して文語体ではなく口語体に属する。このような文体を創造したところに、寿岳さんの並々ならぬ苦心がうかがわれる」<sup>33</sup>。この文語交じりの口語体を、詩人、大岡信は「寿岳氏がこの翻訳のために創り出した、文語の香りと張りを生き生きと保つ独特の口語文体」<sup>34</sup>と同様に評している。では、こうした口語体はいかにして生み出されたのであろうか。その一端をたどってみたい。

すでに関西学院高等部へ入学する前年にダンテ『神曲』との出会いがあった。これは東寺中学で英語を寿岳に教えていた百瀬清志の影響であろう。百瀬は上田敏の門下生で寿岳に英文学を鼓吹した人物でもある。京都

<sup>31</sup> 寿岳文章「BLAKEと華厳」『英語青年』54巻9号、大正15年2月1日

<sup>32</sup> 寿岳文章「ダンテ『神曲』の魅力」『朝日新聞』昭和50年6月6日

<sup>33</sup> 福永武彦『異邦の薫り』(新潮社、昭和54年)、pp. 212-13.

<sup>34</sup> 大岡信「文芸時評(下)」『朝日新聞』(1976年11月27日、夕刊)



の星野書店から遺作として上田敏訳『ダンテ神曲未定稿』が出版されたが、寿岳は購入する金がなかったため、顔見知りの本屋に事情を話して貸してもらい一晩がかりで筆写し翌日返しに行ったという。未定稿とは言え、夜間の時間をすべて費やしたとしても全ページを書き写すことはとうてい不可能であろう。おそらく必用な部分のみを選んで写していったと思われるが、重要なのはどのように筆写したかではなく、寿岳自身がそれほどまでにして、「読みたくてたまらなかった」熱意である。このような少年のまえに触媒を果たす人物が現れたのである。

**村上博輔—関西学院高等部における恩師** 関西学院高等部への入学はさらなる展開をもたらすことになる。まず寿岳を教えた村上博輔（1865-1926）という教師の存在に注目しなければなるまい。すでに中学時代に洋書の購入をしていた寿岳ではあるが、高等学校で購入した最初の洋書がイタリア語から英訳したケアリー訳『神曲』であったというのは、ケアリー訳『神曲』の痕跡が認められる上田敏の未定稿との関係を考えると、きわめて示唆的である。さらに村上博輔との出会いは運命的な予兆さえ覚えるものがある。儒者の出自であり、キリスト教を受洗し、関西学院の教員になったが、学院初期にみられた「アメリカ一辺倒の風潮を痛烈に批判した」（『関西学院事典』）人物でもあった。

一九一九年の春、当時神戸東販（とうすう）にあった関西学院高等部英文科に入学してから、京大文学部で英文学を専攻して出る一九二七年までの八年間、私は、且つ働き且つ学ぶ全くの労学生となるのであるが、書物への関心は年と共に度を加えて深まったと思う。神戸時代、最も早く求めた書物の一つに、オックスフォード大学出版局版、ヘンリ・フランシス・ケアリーの英訳神曲があった。私が幾度か通読を企ててはたし得なかったのは、今にして考えると、作詞の才にもめぐまれていたケアリー自身の長所が、どうかすると裏目に出、ダンテとの距離をひろげ、ダンテの思想に忠実であろうとの努力にもかかわらず、神曲翻訳の作業では、却って禍したのではなかったか。私はケアリーを捨てて、次の機の熟するのを待った。その間に、詩聖の六百年忌がめぐって来、村上博輔という篤学の聖職者教授から、ダンテの生涯についての、熱のこもった講演を聞いたことが忘れられない<sup>35</sup>。

英国ではケアリー訳によりダンテは一般読者に受容されていった。大英博物館の書籍部副主任をつとめたケアリー（1772-1844）は、1809年、ミルトン風無韻詩（ブランク・ヴァース）で『神曲』を翻訳し始めて、1814年、

<sup>35</sup> 寿岳文章「神曲改訳の作業を了えて」ダンテ『神曲 天国篇』（集英社、昭和62年）、pp. 319-20.

完訳版を刊行した。翻訳は1819年、1831年、1844年、それぞれに注釈を追加し、改訳もほどこし、発行部数が500部から多くても2000部までという時代に2万部も売り尽し、『神曲』翻訳の標準的な位置を獲得していた。1847年、ケアリー訳『神曲』は、ボーン・スタンダード・ライブラリーに入り、以後、英米において様々な復刻版として出版され1900年までには50以上の異本があった。ギュスターヴ・ドレの挿絵が入ったカッセル版『神曲』もこの時期に出版されたものである。詩人S・T・コウルリッジがケアリー訳を称賛したこともあり読者に歓迎されたのだが、何よりもその文体の感化から、『ハイピリオン』詩篇を書いたジョン・キーツへの文学的影響を特記しておかねばなるまい。『神曲』の挿絵を描くことになるブレイクもケアリー訳を参照している<sup>36</sup>。

村上博輔との出会いが運命的であるというのは、『神曲』翻訳に資することになる漢語、仏教用語の基盤が寿岳のなかで確定しつつあったということである。キリスト教系の学校にあって、皮肉なことに、両者を漢籍、仏典が密接に結びつけていたのである。

ダンテ生誕六百年に当る一九二一年、私は神戸市東郊の関西学院で英文学の修得に励んでいた。地を西隣に接していた神戸校商とは英語学習のライバル校の関係にあり、秋の文化祭などには英語劇の公開上演を競っていたが、ダンテ生誕六百年の記念行事ともなれば、神戸では関学だけがとりしきったと記憶する。大阪まで足をのばして、朝日新聞社主催の記念講演会も聴講しているのに、自校で聴いた村上博輔の「ダンテの生涯」ほどの感銘を受けていないのは、流浪の悲壮美にかぶれていた当時の私が、ときには悲憤慷慨、目に涙しながら村上の説くダンテに窟原の面影を濃く感じたことによる。村上は、明治期に輩出した国士タイプの基督者の一人で、メソジスト派の伝道に従ったこともあるが、牧界の空気になじめず、人生の道なかばに教育者に変身した。独学よく和漢洋の古典に通じ、私たち四人のクラスでは、楚辞と謡曲を講じ、外国語修得に際しての副産物と称する独特の国文法を、課外講義してくれた。同学生四人のうち、いちおう漢籍を読みこなし、顕密の仏典にも親しんでいる私への村上教授の愛は、特に深かったと思う<sup>37</sup>。

寿岳による師の一面が残されている—「ある寒い冬の日雪さへ降ったという事であった。風邪を引いて熱の出た時、あの中学部の校庭を血をはきつつ走り回り、人の止めるのを聴かず『いや俺は風邪をひけば積極的に

36 ケアリーの伝記については、R. W. King, *The Translator of Dante: The Life, Work and Friendships of Henry Francis Cary* (London: M. Secker, 1925) が詳しい。

37 寿岳文章「邦訳『神曲』への道」『現代詩手帖』昭和61年3月号

抵投力を養ってこれを発散させてしまうんだ』と言って、尚も走り続けられた事もあった」<sup>38</sup>と言う。「つねに和服で信玄袋にノートをつめ、素足で廊下を歩いて」いたこのキリスト教徒は、あたかもヴィクトリア朝の「マスキュラー・クリスチャニティ」を具現化しているような存在であった。この野武士のような教師の人間的な側面を晩年においても寿岳は忘れることがなかった—「私のそうした苦学生生活を知っている国文学や漢籍担当の村上博輔という牧師出身の老先生は、ある朝、教室にはいるなり、私の顔色のさえないのを見、私の額に手をあて、『熱があるなん、これはいかん、ちょっと待っていて下さい』と四人の学生に告げ、近くの自宅へひきかえし、水を容れたコップと、白い錠剤（当時は貴重なバイエル・アスピリン）を手に、そそくさと教室へあらわれ、早く私に服用させたい一念から手もとが狂い、アスピリンをとりおとす。あわてて拾い、ふうーっと口でゴミを吹き、私に与えられた。その光景を今もはっきり覚えているのは、私に『ゴミは大丈夫か?』の懸念が強かったのと、その懸念をさえ打ち消すほどに、先生の親切が身に沁みただからであろう。寺に生れ寺に育ち、幼少時から国漢文に慣れ親しんでいた私を、先生は特にマークしておられたようである。国漢の点数は、私のが抜群に高かった」<sup>39</sup>と印象深く語っている。

他の学生からも村上博輔は学力と人間性の両面で信頼されていた。「国語や漢字の専門家は、村上博輔先生であった。われわれは先生から「増鏡」「徒然草」「落窪物語」「唐宋八大家文集」「列子」などを習ったが、その博覧強記には舌を巻いた。青山学院の[賛美歌作者] 別所梅之助 [1872-1945] 先生と共に、東西の二大博学家といわれていたそうであるが、あとで別所先生とも知り合いになって、全く同じタイプの学者であると思った」<sup>40</sup>と述懐するのはパスカル研究で高名な由木康 (1896-1985) である。さらに「母校が原田村にあったころ、国学者として院内に重きをなしていた人は、[英語教員] 謙介 [1897-1946] 君の父村上博輔先生であった。アメリカの宣教師や米国仕込の教師の多い中に博輔先生は異彩を放っていた。いつも羽織袴で [神学部教授] 芦田慶治 [1867-1936] 君と好一对であった。一見古武士のような風格の持主で、その博学多識の前には内外の教授連も頭は上がらなかった。仏教家から基督教に転向した人物と言うだけでも当時の日本には珍しい先覚者と言うべきである」<sup>41</sup>というような証言は事欠かない。じっさい、村上は「文学部の宝」であり、「又と得難い偉い人物で素晴らしく高く深く広いという、人格、学識共に群を抜いて優れていた近來稀に見る大人物であった。/ 学は和漢洋を該ねていられたが朴實敦厚、世才たけて居らない村上氏であったため、学院行政上では常に下積みに

<sup>38</sup> 「壽岳氏談」『文学部回顧』(関西学院文学会、昭和9年)、p. 138.

<sup>39</sup> 寿岳文章「その頃の東京と大阪」『季刊 湯川』第1号(湯川書房、1977)、p. 12.

<sup>40</sup> 由木康「原田時代の師友寸描」『関西学院七十年史』、p. 453.

<sup>41</sup> 中村賢二郎「逝きし原田の森の友を偲ぶ」『関西学院七十年史』(関西学院七十年記念事業中央委員会、1959)、p. 444.

なって居られたが、そんな事にかまわって居る村上氏でもなかった。超然として道を楽しみ、悠々として清貧に甘んじひたすら己れの学問と学科との為に全生を献げて居られたのであった」<sup>42</sup>と全幅の信頼が学内から寄せられていたのであった。かかる高潔な人士に弟子として遭遇できたことは寿岳にとってまさに僥倖というべきであった。

さらに、村上のダンテ講演がどのような内容をそなえていたのか、具体的な証言を寿岳自身から聴いておこう。追放された詩人ダンテ像は寿岳の生涯を通じてつらねられるところとなり、変わらぬ表象となった。

私たちはこの先生から、高等国文法と題する講義も聞いたが、それは一種の比較文法論で、英・独・仏の三か国語はもとより、スペイン語やイタリア語まで出てくるのには驚いた。これらの国語を、先生は全くの独学で習得されたらしい。そこで、その年の秋がダンテ没後六百年に当るのを知っている文学ずきの学生たちが集まり、あの先生ならきっとダンテを原文で読んでいるに違いない、ダンテの話をしてもらおうではないか、ということになり、先生に伺いを立てた。「よろしい、欣んで」との二つ返事であった。

正確な日時は覚えていないが、その秋の一日、現在の関西学院構内に移築されて当時の面影をとどめているハミル館のチャペルを会場とし、全関西学院の有志は、村上先生から、ダンテ死後六百年の記念講演を開いた。壇上の先生は、双眼に涙をためて、『神曲』のあちこちを引用しつつ、故郷フィレンツェに容れられず、永久追放され、所縁を頼ってあちこちと流浪するダンテ晩年の悲憤を語った。学級肌の先生は牧界に容れられず、教師に転身したのだとの噂があり、その講演を開いて、私たちはなるほどと思った<sup>43</sup>。

故郷フィレンツェを追放された詩人像は、寿岳が繰り返し言及し、共鳴してやまず、自らをしばしば重ねたダンテ像である。さらに重要なのは、比較文法論という言葉で要約されている学問の方法論である。それは後年の寿岳が信奉し依拠するアプローチだからである。

井上琢智他編『村上博輔日記抄』(全2巻、1903-12)は村上、寿岳という師弟の交流を克明に伝えてくれる。「大正十年二月十八日金、晴」の記述には村上の寿岳評がうかがえる—「今日モ冷シ、始メテ厚キ氷ヲ見ル。講堂、小山司会、寿岳(文章)ノ話、平生ノ教師ノ話ヨリ思想モアリ、態度モ話方モスベテヨカリキ、殉教者ノ精神ヲ称エタルモノナリ」とあり、生徒を教師よりも高く評価していて、寿岳への信頼がうかがえる。さらに「九

<sup>42</sup> 「文学部の宝」『文学部回顧』op. cit., pp.134-35.

<sup>43</sup> 寿岳文章「その頃の東京と大阪」、op. cit., pp. 12-13.

月十四日水、雨」の記述は、ダンテとの関連で重要な意味がある。「(前略)ダンテ六百年記念トシテ八卷(顯夫)氏ノ談ヲ聞ク。チャペルノ後デ神曲ノ梗概ヲ語レリ」とあるところから、「正確な日時は覚えていないが、その秋の一日」と寿岳は後年に記しているが、この記述から村上の講演がなされた日は限定できよう。また、「十月三日月、晴 夜寿岳(文章)氏訪来」<sup>44</sup>という記述が頻出して、両者の密なる交流を語っている。

**大賀寿吉—木村兼霞堂のような存在** 村上がダンテ翻訳の恩人であるとするならば、大賀寿吉も劣らぬ重要性をもつ。「武田製菓の今日を有らしめた先々代の長兵衛に、渉外顧問として重用された大賀寿吉は、生涯をダンテに捧げたと言ってもよい在野の奇特人で、旧蔵の貴重なダンテ文献は、上田敏ゆかりの京大文学部に『旭江文庫』として寄贈されている」と寿岳はダンテ学者としての位置を伝えようとする一方、ブレイク研究からの延長上にダンテ翻訳があることを知らしめてくれる。

その著『日本ダンテ文献』は、山川丙三郎の訳業を高く評価する一方、不可を不可とするきびしさで知られているが、英文版の欠を補い、より完全なイタリア語版をダンテの故地で上梓するためにイタリアへ赴く大賀を主賓に、京大文学部の新村出、浜田耕作、それに柳と私の四人が京大友会館に集り、ダンテ縦横談義に一夕の歡をつくした思い出は、今なおきわめて鮮烈、そのころ大賀は私に、「君は今ブレイクに熱中しているが、『神曲』を訳さずにおれない日が来る、きっと来る」と言い、その作業に必要な文献をおしみなくくれた。訳業完成の日、一九七五年十二月八日、私は深く首を垂れて大賀の霊に謝した<sup>45</sup>。

大賀の送別会はまた別の意味を寿岳に投げかけたようである—「ここで私は、昭和五年であったか、イタリアへ旅立つ民間のダンテ学者、故大賀寿吉翁のために、京大楽友会館で、故新村重山[出]・浜田青陵両博士が設けられた送別の一夕を思い出す。若い私もその席につらなっていたが、それは、大賀翁と私の親しい交わりを知っておられた両博士の好意からであっただろう。宴はてての放談に、音楽論が出、青陵博士は浪曲を賛美し、神学校出の大賀翁は、グレゴリアン・チャントこそダンテにつながる」<sup>46</sup>という言葉から後年になされる寿岳の口語体による翻訳を想起せしめるものがある。

さらに『神曲』に対する姿勢を教えてくれたのも大賀であった。『神曲』をいかに読むかという問いは、いかに翻訳するかと同意である。

<sup>44</sup> 井上琢智他編「村上博輔日記抄」『関西学院史紀要』(10号、2004)、pp. 125-53.

<sup>45</sup> 寿岳文章「邦訳『神曲』への道」『現代詩手帖』昭和61年3月号

<sup>46</sup> 寿岳文章「ブレイクと日本」『学燈』70巻3号、(丸善、1973年3月5日)

読む愉しさの醍醐味を、打ってつけの舞台装置で私に教えてくれた人は、故大賀寿吉翁である。翁は、近世の大阪文化を特異な存在にした町人学者の系列の、恐らく最後のジェネレーションの一人であっただろう。先代武田長兵衛に重用されていたが、翁自身、無類の愛書家で、ことにそのダンテ文献—今は旭江文庫として京大文学部に蔵せられている—は有名であった。翁によれば、その本次第で、いつ、どこで、どんな風に読むかが大きな問題となる。たとえばダンテの神曲の古刊本、濃い紫のとぼりを引いた室の中、日が暮れ、燭台にイタリアの蠟燭をともし、静かに燃える灯の下で、燭涙を払いながら読まないと感じが出ないと言う。ある夜私は翁の書斎で、翁からその実験を見せてもらった。これしか本の読み方が無いわけではもちろん無いが、羽織袴に威儀を正し、まるで経典をでも読むようにダンテの古刊本を読んでいた翁の姿は、読む愉しみに徹し切った人のそれとして、今も私の眼前に彷彿するのである<sup>47</sup>。

「羽織袴に威儀を正し、まるで経典をでも読むようにダンテの古刊本を読んでいた」姿を大賀独自のポーズと誤解してはならない。『神曲』という聖典を読み込もうとする態度だからである。大賀と寿岳は、「ダンテ文献について早速詳細なる御知らせをうけ、感謝に耐えませぬ。愈々御壮んなる意気を拝し、小生等は発奮を覚えます」<sup>48</sup>というような書簡にみられるように、たえず情報を交換していた。『神曲』が師ウェルギリウスにより弟子ダンテが導かれていく師弟愛を基軸とした物語であるとするならば、寿岳の人生もまた同じ軌跡を描いたことになる。

ここで寿岳文章が従来の翻訳者とはまったく異なる位置にいたことを改めて確認しておきたい。ブレイクを真言宗の教義で解釈しようとした研究者、寿岳文章は、変わらない態度で、つまり仏教に視座をおきつつダンテを訳していこうとしたのである。

明治以来、苦しい営為を重ねてきた『神曲』の翻訳者たちや、ダンテに強い関心を寄せてきた者たちが、主としてキリスト者であったことを思い起こす必要がある。山川丙三郎然り、中山昌樹また然り、そして翻訳者ではなかったが大賀寿吉もまた神学校の出身者であった。さらに、わが国において最も早く『神曲』の魅力を説いた内村鑑三を始め、戦時下に大学を追われ市井にあって本格的な『神曲』講義を続けた矢内原

<sup>47</sup> 寿岳文章「書物の愉しさ」『日本古書通信』310号、35巻2号、昭和45年2月15日

<sup>48</sup> 昭和8年1月8日付け、寿岳文章から大賀壽吉宛書簡。この書簡については赤井規晃氏（大阪大学付属図書館司書）のご教示によるもので、ここに記して謝意を表わしたい。

忠雄に至るまで、この分野でキリスト者たちの果たした功績は、あまりにも大きい。そういう大勢のなか  
にあつて、寿岳文章氏の占める位置はまさに特異だ。いま、寿岳氏のダンテに対する思い入れだけを、私は  
語ろうとしているのではない。寿岳訳『神曲』がもつ文体の新しさは、まさにキリスト者に対する仏教者の  
姿勢にある<sup>49</sup>。(下線部は引用者による)

このような宗教的な素地をもち、中世にたいして深い理解をもつ訳者が日本語に移した『神曲』は、画期的な達  
成となった。「寿岳氏が日本中世の仏教や文芸に深い造詣をもつことが、この訳の語彙形成に多くの利点をも  
たらしている。今昔物語や狂言に代表される語り物の言葉を利用して、ダンテ自身や地獄の亡者たちに語らせ  
るとき、ダンテの中世と日本の中世は同じ視野のなかに浮かびあがり、力強くせまってくる」<sup>50</sup>と大岡信は訳者  
の意図を的確に指摘している。

#### IV むすびにかえて—信仰と現実

『神曲』翻訳を了えた寿岳文章に、東寺中学校から関西学院高等部を経て京都大学大学院へ到るまでの精神  
的軌跡を回顧した一文がある—「1914年4月、14歳の私は京都東寺境内にある宗門中学の二年へ編入学し、『弘  
法大師全集』の達成者として令名のあつた長谷宝秀から宗乗余乗の講義を受けた。卒業後、私は神戸市近郊に  
あつた関西学院高等部英文科に入り、在学中に中等科英語教員検定試験に合格して母校に帰り、翌年京都大学  
文学部英文科選科生となるまで英語を教えたが、その一年間の忘れがたい思い出は、密教の研究に意欲を燃や  
していた鈴木大拙夫人ビアトリスのために、長谷宝秀の意をうけて門下の吉祥真雄が週一回行つた密教講義を、  
私が英語に同時通訳したことである。… 1927年、京大での学業を卒えると、私は京都専門学校(今の種智院大  
学の前身)で長谷宝秀の同僚となる。その頃、長谷は、『慈雲尊者全集』編集の大業を了えて、『弘法大師伝全集』  
(昭和9-10年)の仕事にかかっていた。これも十数巻を必要とする労作で、門下生の協力を必要としたが、私は  
旧師の長谷から頼まれて装幀をひきうけ、出雲の安部栄四郎に本文用の和紙を、三極(みつまた)と楮(こう  
ぞ)で漉いて貰つた。あれだけ大量の書物用和紙を漉くのは、安部も初めてだつたらうと思う。巻末には編集協  
力者の名が、僧階と共につらねてあり、私は中僧都・寿岳文章で顔を出す。… 長谷宝秀と並んでその人がらの

<sup>49</sup> 河島英昭「翻訳の理想と現実—寿岳文章訳『神曲 地獄篇』をめぐって」『叙事詩の精神バヴェーゼとダンテ』(岩波書店、1990)、  
p. 278.

<sup>50</sup> 大岡信『本が書架を歩み出るとき』(花神社、1975)、p. 156.

しのばれる明治の学僧は、慈雲尊者鑽仰会の筆頭推進者でもあった佐伯定胤であろう。その生前、講師を乞われて私は大阪での尊者鑽仰会で、西洋中世の学僧トマス・アクイナスと、東洋近世の学僧慈雲尊者の相似性を語った。うなずくかのように時々私を見ていた定胤長老の柔和な老顔がいま私の臉にうかぶ。… 慈雲尊者を軸として、事や物の本源に遡ろうとする私の意欲は、人生行路のどの面でも、強まりこそすれ、決して薄れなかった。慈雲こそ、まさにわが師、わがヴェルギリウスであったのだ<sup>51</sup>というように寿岳がいかに仏教を感得していったかが雄弁に語られている。

同じ真言宗の出自で生涯にわたり親友であった岩瀬法雲（1898-1982）との交友もまた寿岳文章の人格形成に大きな影響をもたらす上で看過できない。ともに真言宗の寺に養子に出され得度するも僧侶の道を選ばなかったが、その交流を通じて終生の友人となる柳宗悦との邂逅が可能になり、有島武郎の自殺という現実問題に直面することになった—「私が東寺中学五年生の時、ある事情があって高野山中学から岩瀬法雲が転校してきた。私に輪をかけたような文学青年で、忽ち意気投合し、彼の師僧が住持する寺（なんとそれが慈雲尊者の得度した摂津田辺の法楽寺であった！）へもよく赴いた。… 夏目漱石、特にその三部作の熱烈な愛読者であった法雲青年は、東寺中学を卒業した年、高野山中学での〈事情〉を題材にして、漱石を選者とする朝日新聞の夕刊用短編小説に応募したが、漱石は死去し、代って有島武郎の選となる。重五郎のペンネームで岩瀬の短篇『足』は紙面を飾り、それが縁で岩瀬は上京して有島の書生役をつとめていた頃、関西学院での卒論準備中の私を、柳宗悦邸へも案内してくれた。ついその前、盲人同士としての縁で、エロシエンコが食客となっていた岩橋武夫（私の婚約者しづの兄）の家へ、私が岩瀬をつれて行ったこともある<sup>52</sup>というくらい親密な交誼を重ねていた。1923（大正12）年6月9日、小説家の有島武郎は『婦人公論』の女性記者と自殺を遂げた。『惜しみなく愛は奪う』（1920）などの作品には死への衝動が語られているが、そこには愛が極端になったかたちとして殉死や情死が肯定されている。

肉体と精神の相克を調和することなく、死でもって解放しようとした有島の自死に対して、関西学院高等部を卒業したばかりの寿岳は自らの思索を語ってやまない。それは仏教の教えやブレイク研究などを通じて得た愛の在り方であった。白川学人というペンネームで社会に大きな波紋をなげかけた有島問題について、寿岳は一文を寄稿した—「有島氏は私の心の近くに住んでいた人である。私の親しい友の一人（岩瀬法雲）はこの二年あまり有島氏の知己となって、有島氏が引っ越すつもりで借りた原町の方の借家も、南寺町の借家ができるまでその友人が預かっていた。その友から聞いていた有島氏の内的生活のあとを辿ってゆくと、私にはかなり深くまで有島

<sup>51</sup> 寿岳文章「神曲改訳の作業を了えて」ダンテ『神曲 天国篇』（集英社、昭和62年）、pp. 313-17.

<sup>52</sup> Ibid.



氏の心事が了解できるように思う。私は亡き人への回向としてここに多少の感想を書き記したい」。このような書き出しで小説家の煩悶に対して信仰はどれくらい寄与できるのかを考えていく。「不惑の齢に入っても愛欲の力強さにひきずられねばならない人間の運命を思うとき、氏の心にはどこか淋しい空虚のあることが感じられたのであろう。自己のそうした苦しみを知る氏は、また他人の心持へも入って行って、有島氏のもとに集る人達の中に複雑な恋愛の三角関係が生じたような場合には、いつも親切に自ら解決の労を取っていられたようである。しかもいつの間にか自分自らがその悶えの当事者となったことを知った時の氏の苦しみはどんなであつたろう」と有島への共感を示しつつ、「今度のような恋愛関係が成立したにつけても、今迄踏みこたえてきた自己の生活が脆くも分裂し破綻してゆく悲しみをまざまざと感じられたのであろう。その痛苦をどうしても宗教的な救いへ持って行くことのできぬ氏の性格に、この度の最期が暗示されていたのではなかろうか。人の世の掟に許されぬ愛欲の悩みの中から、新生への道を探り求めることは最も忍苦に満ちた行為である。それは恐らく宗教的な回心によらなければ不可能のことであろう」と信仰による救済しか打開の道はないという結論に至る。

そして、「これは愛の完成という点から見ても、人間としての最も深い体験を得る上から言っても、複雑な愛欲の内容をじっと胸につつんで、毎日にこれを荘厳しつつ、俊敏な良心の前に苦痛を訴える部分を浄化してゆくことが最も望ましき行き方ではあるまいか。かかる忍苦の生活は必ずや良心の躓きとなるものを取り除けて、倫理的善をも相容れるべき愛のふるさとへ導くであろう。よし人間が定めた倫理や正義の掟には触れても、一路直に神へ通ずる永遠の倫理永遠の正義に導くであろう」<sup>53</sup>と結論しているが、最後に言及されている「一路直に神へ通ずる永遠の倫理永遠の正義」とは、まさにブレイクが志向した境地と同じであると言えまいか。

1924（大正13）年、京都大学大学院へ進学した文章青年は、盂蘭盆を対象に愛について随想をめぐらせている。盂蘭盆会のために全国で川に流す茄子の数の莫大になるゆえ、こうした馬鹿気た不経済なことは一日も早く止めてしまった方がよい、と盂蘭盆会を批判する記事が新聞に掲載されたが、軍需に費やされる費用に比べれば微々たるものと寿岳はこうした論調を一蹴する。いたずらに盂蘭盆会無用論をふりまわさずに、今こそ静かに盂蘭盆会を考えるべきだと説く。キリスト教徒に劣らず、仏門の僧侶も反省すべき点が多々あるのではないかと批判し、あるべき人間味を取り戻すべきであると主張する―「僧侶は民衆の誰よりも豊かな人間味があるべきだ。人間味を知るとは悪の底に沈論するの謂ではない。詩人の直覚と想像とを以て他の心をしることだ。『猿を聞人すて子に秋の風いかに』と詠んだ蕉翁の心に生きることだ。詩人の想像は即ち仏者の慈悲であり、

<sup>53</sup> 白川学人[寿岳文章]『おゝ淋しい』と泣いた人『サンデー毎日』（2巻33号、1923）

基督者の愛である。基督を想像の権化と呼んだのは、オスカア・ワイルドのみではない。ブレイクも亦然りである。今の僧侶は、この意味においてあまりに散文的ではあるまいか。一日百に余る家々に棚教を読んで廻る僧侶のうち、麻幹の足の茄子の馬にしみじみと人の世の衰れを味〇するもの有りや無しや。悲しむべきは魂の麻痺である」と仏教とキリスト教を折衷しながら論じていく。

春四月我々はくさぐさの花を捧げて幼児と共に小さな花の御堂を作る。大いなる人類の親仏陀の誕生を記念するために、我々は冬十二月唐檜木を切って星寒き夜に讚美の歌声をあげる。等しく大いなる救世主の出生を喜ぶために。さらば又はかない蓮の葉に供物を盛って、八月盂蘭盆の祭りを営もう。すぎし日に世を去った恒河沙のたましいへ供養のまことを致すべく、悲しみと喜びと、すべてをただ一つの「愛」の心につなぐこそ、やがてすべての宗教が一つ一人の胸に帰すべき発足であり、到着であると私はかたく信ずるものである<sup>54</sup>。（下線部は引用者による）

ここで寿岳の思考法に注目しておきたい。キリスト教と仏教を相克させつつ、後に両者を折衷させ、独自の「愛の心」という結論をえている。卑近な現実の問題に対して自らの態度を示したこのような見解に、ひとりの仏教徒がキリスト教を体得しながら、独自の信仰を具現化していく過程がうかがえるのである。

付記 本稿は、2019年10月5日、西向日コミュニティセンターにて行われた講演「寿岳文章の青春—いかに人間形成はなされたか」の講演原稿に加筆・訂正をして、注をほどこしたものである。

---

<sup>54</sup> 白川壽岳[寿岳文章]「盂蘭盆会雑感」『中外日報』（大正13年8月3日）

## 寿岳文章と向日庵本

特定非営利活動法人向日庵理事 長野 裕子

寿岳文章（1900-1992）は、1932年から1952年にかけて居宅「向日庵」において私版事業を行っていました。「向日庵本」の名で知られる寿岳の私版は、同時代の私版のなかでも高い評価を得ていました。用紙に特別に注文した手漉き和紙を使用し、手ずから彩飾をほどこすなど、手仕事の美しさが活かされた質実で簡素な美しさを特長としています。なかでも寿岳の研究対象であったイギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの作品を翻刻した『唯理神之書』（1933）、『無染の歌』（1933）、『無明の歌』（1935）をはじめとする一連の書物は、ブレイク研究者としての寿岳の作品理解にもとづいた私版として、向日庵本の名が知られるはじまりとなった代表的なものです。また、式場隆三郎の『テオ・ファン・ホッホの手紙』（1934）、芹沢銈介の画彫による『絵本どんきほうて』（1936）など、柳宗悦が主唱した民藝運動に連なる工芸家と向日庵本とのつながりも見逃せません。そして、文章と妻静子による手漉き和紙調査の旅の記録である『紙漉村旅日記』（1943）は、和紙研究家としての寿岳を語るには欠かせない最も象徴的な書物といえるでしょう。やがて、戦争と時局の悪化による物資不足などの事情で刊行が一旦途絶えますが、時代が落ち着きを取り戻しつつあったとき、戦前から約束されていた書物の刊行を最後に、向日庵私版は閉じられました。

私版という出版形態が本来持っている特性を熟知する寿岳が、「印刷者と読者と書物の美しい共鳴が、いまの日本の読者からは期待できない」、「愛書家を目あてに、私版を出すことに意義を認めない」ということを理由に、そして、読者も愛書家も、寿岳の私版理論の肝要を理解せず拍子抜けの感が深い、として、ある意味で道半ばのまま向日庵私版の刊行を絶ったことは重要です。向日庵私版の出發と終焉を表裏として検討することは、書物のありようを考えるうえで意義があるといえるでしょう。そこで、刊行された向日庵本それぞれについて語るべき交友と誕生の物語はありますが、ここでは寿岳の書物観に焦点をあて、向日庵本を刊行した意図について検討することにより、向日庵本が今日にあたえる意義を解明することを本論の目的としたいと思います。

1 「…二昔も前、私が向日庵私版を始めたときには、美しい活字の創制をもスケジュールに入れたうえで、能うならばスコラー・プリンター（学匠印刷者）たらんことを秘かに期していた。…読者もまた、これらの学匠印刷者に敬意を払い、需要と供給のあいだには、美しい共鳴があった。ところで、こうした共鳴を、いまの日本の読者から、はたして期待し得られるであろうか。はなはだ疑問とせざるを得ない。…」

わが国でも、モリス以後の近英私版家たちの作った美書を云々する者はいる。しかし中世の工芸を理想とするこれら一連の私版家たちの世界観を理解せず、美書美書と連呼することに、はたしでどれだけの意味があろうか。…〔近英私版家が、それぞれ社会主義者であったこと〕には、深い意味がこもる。…私の関心は、強くこの事実にはひかれ、むしろそれを中軸として、私の私版理論はうち立てているのに、この肝要な事実を認めようとする人がほとんどいない。拍子抜けの感が深いのである。…」

（寿岳文章「なぜ向日庵私版を復興しないか」、1951年、『壽岳文章書物論集成』、沖積舎、1989年、p.920.）

## I 工芸としての書物

本章では、向日庵本の原点を明らかにし、寿岳の書物観に影響を与えた英国の私家版の理念について書物工芸の観点から検討します。

### 向日庵本の源流

寿岳が私版事業の開始を宣言した「向日庵私版発願記」は、寿岳と柳宗悦が共刊した月刊誌『ブレイクとホキットマン』<sup>2</sup>の最終号の前号（同文館、1932年11月）に掲載されました。1931年の12月には私版に用いるための漉紙を越前に赴いて注文していることから<sup>3</sup>、私版の構想は「発願」<sup>4</sup>の一年前からすでに形づくられていたこととなります。

到着はやがて出発である。雑誌「ブレイクとホキットマン」は休刊の已むなきに立ち到つたけれども、胸に溢れる思ひを何かの形に盛らうとする私の欲念にはいささかの退転もなく、少数ではあらうがしかし熱意のある読者の力のみを頼りにして、私はここに私版刊行の事業を発願した、業者に諮ふことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装ひを与へ、思想と工芸との二つの世界を密に結び合はせようとするのが私の願ひである。この私版は、太陽の彼岸を求めてやまぬ向日葵を歌つたブレイクの詩と、同じくその花を愛した画家ファン・ホッホに因んで向日庵と名づけられた。……

京都市左京区南禅寺北門僊壺庵内 壽岳文章<sup>5</sup>

寿岳がここにうたっているのは出版者の良心であり、書物をより多く売るための業者の商業戦略や、読者の嗜好に左右されることなく、読者によき書物を届けることのみを願う、出版者が理想とする書物の世界です。

<sup>2</sup> 柳宗悦と寿岳文章が1931年から1932年まで共同刊行した同人誌。用紙には越前で特別に漉いた和紙を用い、製本は文章と静子が手綴じた。柳が渡米先で入手したホイットマンについての文献を加味してホイットマンの詩について書き、寿岳がブレイクの作品を年代順に訳出した。

<sup>3</sup> 年譜、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、pp.1054-1055。

<sup>4</sup> 仏教者である寿岳が、ここで「発願（ほつがん）」という仏教語を用いている点に注意したい。「発願」とは、「①仏・菩薩が衆生を救おうとの誓願をおこすこと。②神仏に願を立てること。」との意味である。（『広辞苑 第三版』、岩波書店）

<sup>5</sup> 寿岳「向日庵私版発願記」『季刊「銀花」』第55号 特集：寿岳文章「向日庵私版」、文化出版局、1983年、p.137。

私版による刊行は、出版者の良心を色濃く書物に反映することができる出版形態であるといえます。寿岳の出版美学は、思想と工芸との二つの世界が密に結び合されていることにありました。この「工芸」という語は、生活の用をとまなう陶器や家具、織物などにおける美を対象としますが、特に書物を対象とした「書物工芸」の分野においては、その「用の美」として、活字と印刷の美しさが最も重要であるといえます。寿岳が「書物工芸」の世界に目覚めたのは近代イギリスの私家版との出会いにありました。そこには、日本の書物の世界には存在しない豊かな活字と印刷の世界がありました。近代イギリスの私家版との出会いについて寿岳は次のように述べています。

…再び私が装幀の問題を熱心に考えるようになったのは、私の疾風怒涛時代がすぎ、確乎たる生活の土台の上に足を踏みしめて、『ブレイク書誌』の編纂に着手した昭和二年からである。その年の春、私は新村出博士の紹介で、初めて伊藤長蔵氏を知った。…当時氏は、外遊の旅から帰って、「ぐろりあ そさえて」を創立したばかりで、新興の意気凄じく、まさに日本のジャン・クロリエをもって任ずる概があった。アシェンデン・プレスや、ゴールデン・コカレルプレスや、ナンサッチ・プレスの存在を、浮彫りのように鮮かに私の心へ印象づけさせたのは、じつに伊藤氏である。私がついに書物道の一筋につながるにいたった因縁の一半は、伊藤氏の出現によるといってもよい。<sup>6</sup>

寿岳と伊藤長蔵との出会いを実証するものとして、寿岳文章と新村出とのあいだで交わされた昭和2年の往復書簡<sup>7</sup>があります。そのなかに、『ブレイク書誌』<sup>8</sup>の編纂の件で新村が寿岳と伊藤との面会を取り持ち、編纂の相談が成立するまでの経緯を示す内容のものが残っています。また寿岳はのちに、「近代のイギリスに開花し

<sup>6</sup> 寿岳「自装本回顧」、1935年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、pp.489-490。

<sup>7</sup> 新村出記念財団重山文庫所蔵の往復書簡「神戸の人にて出版界の新人なる伊藤長蔵氏、W. Blake の事に付助力者を得たしとの事、貴所 Blake の事御研究の由に付、推薦いたし置しが、一度御面談被下度、明後（金）午後三時頃大学へ来る筈に付、若し一中でもお出の都合□□御立寄被下まじきや。」（昭和2年7月6日、新村出寿岳文章宛葉書、新村恭「寿岳文章の生きた軌跡と新村出」『向日庵2』、特定非営利活動法人向日庵、2019年、p.66、以下同様）、との新村出からの書簡に対して、寿岳は1週間も経ずに「拝啓 過日はブレイク書史[ママ]の件につき御配慮に預り、厚く御礼申上候。さて毎々御手数に相掛け恐縮に存じ候えど、ブレイク書史編纂につき近日中に一度笹岡民次郎様にお目にかかりて御伺いしたきことども有之……」（昭和2年7月11日、寿岳文章新村出宛葉書）と返事を認め、書誌作製の意気込みを示している。笹岡民次郎(生没年不明)は、当時新村出が図書館長を務めていた京都帝国大学図書館の初代司書。

<sup>8</sup> 1929年に伊藤長蔵の出版社「ぐろりあ そさえて」から刊行された、寿岳の編集によるウィリアム・ブレイクについての研究文献書誌を網羅しようとしたもの。装幀は柳宗悦による。磯部直希「研究論文」『『ウィリアム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期—その装丁における形式と意匠』（『多摩美術大学研究紀要』第22号、2007年）に詳しい。特定非営利活動法人向日庵講演会（2019年2月23日 京都キャンパスプラザにおいて開催）における講演、佐藤光「寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究」を参考にされたい（『向日庵3』所収予定）。

た私家版に関する知見と実感とを西村貫一<sup>9</sup>と伊藤長蔵から得た。」とし、両者と相識の間柄にならなかったら、私家版の試みは十年おくれて発足していたかもしれないと回想しています<sup>10</sup>。

これらの言葉からも明らかなように、向日庵本はイギリスの私家版の影響を強く受けているといえますが、寿岳は「私家版」という語の定義について、単なる「民間版」という意味ではなく、英語の private press という語の内容をそのままうつしたものであって、それが内実を伴って文化的な役割を果たすことをも包括する言葉として用いたいとし、「私版」の発生について次のように述べています。

私版の発生はもちろん非商業主義 (uncommercialism) に求められるのではあろうけれど、その著しい特長は何よりもまず「目立たぬこと」(privacy) の一点にあるのだと私は思う。片田舎のつましい牧師が、信者たちに贈ろうとして、みずから印刷した質素な説教集。有名無名の出版者の知遇を得る機会もなく、作者自身がなけなしの金をはたいて刊行した処女作品。こうしたものにこそ、私版の最も濃厚な香気は漂っているのである<sup>11</sup>。

この記述と「向日庵私版発願記」の言葉とを照らし読めば、寿岳は「私版」の定義として、不特定多数の読者のためのものではなく、限られた読者のための個人的、私的なものであるという性格を重要視していることがわかります。一般的に書誌学の用語としての「プライベート・プレス」は、「出版者がお金を払って印刷を依頼するのではなく、プレスの所有者や経営者が自分の好きなものを好きなように印刷するもの。」であり、「作品が手組みおよび手刷りされていた印刷所のみ当てはまる」(ジョン・カーター『西洋書誌学入門』)と定義されるように、良質な書物の出版として「印刷」が重要な要件となりますが、向日庵私版の大きな弱点がこの「印刷」にあったということは寿岳自身が理解していたとおります。向日庵本の活字と印刷においては、寿岳の意図を反映する術がなかったことによる、向日庵本のひとつの限界でもあったといえるでしょう。

近代のイギリスに私家版が開花した背景にはどのような社会的要因があったのでしょうか。産業の機械化により手仕事の美しさが失われつつあった 19 世紀のイギリスにおいて、活字や印刷の世界にもその影響による変化が例外なく見られました。街は大量生産のデザインによる商業広告の印刷物が満ち溢れ、それまでにはない

<sup>9</sup> 西村貫一 (1892-1960) は、ウィリアム・モリス生誕百年を記念した関西学院大学文学会主催の展覧会のために版画典籍を提供した人物で、同会場で行われた講演会では寿岳が司会を務めている。(「序」、『モリス記念論集』、モリス生誕百年記念協会、川瀬日進堂、1934年、沖積舎復刻、1996年、pp.5-6を参照)

<sup>10</sup> 寿岳「英国の私家版と私」、コリン・フランクリン著・大竹正次訳『英国の私家版』、アトリエ・ミウラ、1983年、p.5.

<sup>11</sup> 寿岳「近英の私版」、1933年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.259.

様々な種類の奇抜な書体があらわれました。次々と創り出される装飾過剰な個性の強い新書体で息苦しいほどに埋め尽くされていたのが、この時代の印刷物でした<sup>12</sup>。この反動から登場したのがウィリアム・モリスの私家版、ケルムスコット・プレスによる書物でした。

モリスは、詩人として、19世紀のイギリスにおいてあらゆる種類の伝統的手工業を復活させたデザイナーとして、建築保存運動の先駆者として、社会主義運動家として、影響力を持ちました。モリスがケルムスコット・プレスを創設する直接のきっかけとなったのは、1888年に行われたアーツ・アンド・クラフツ協会が主催した連続講演会のなかで、エマリー・ウォーカーが行った「活版印刷と挿絵」についての講演でした<sup>13</sup>。それまでも、芸術としての書物の印刷に強い関心を持っていたモリスに、印刷の実際面で影響を与えていたウォーカーの講演に触発されたモリスは、彼に活字の新しい書体を創って、ともに印刷工房を創設することを求めましたが、ウォーカーはやむを得ずこれを断りました。しかしウォーカーはその技術的な専門知識において、実質的にはモリスのパートナーであり続けたといわれています。モリスは理想の書体を15世紀イタリアのインクナブラ<sup>14</sup>に見出し、それを手本とした新しい活字を創り出しました。評伝によると、モリスがケルムスコット・プレスで試みたのは、新しいデザインでありながら古い本の質の良さを示唆する本をつくることであり、そのことを通して守り伝える価値のあるものと、将来への道程を指し示すものに対する感受性を社会に与えようとした点においてケルムスコット・プレスはダブズ・プレス、エラニ・プレス、アシェデン・プレスをはじめとする優れた私家版の産みの親であった、と位置づけていますが<sup>15</sup>、寿岳は加えて、カスロンの古体活字を復活させたチチック・プレスと、17世紀後半のオランダ活字を用いたダニエル・プレスは、書物工芸の美しさに貢献したという点においてモリスの先駆であると指摘し、ケルムスコット・プレスの刊本の大きな社会的意義は、その美しさに価値があるだけでなく、出版界を感化し刺激を与えた結果、大量生産される書物の質が向上したことにあり、と語っています<sup>16</sup>。

イギリスの私家版のなかでも、寿岳がとりわけ好んだルシアン・ピサロ (1863-1944) <sup>17</sup>によるエラニ・プレ

<sup>12</sup> 田中正明著『ヴィクトリア時代のタイポグラフィ』、読書工房、2006年を参照

<sup>13</sup> この1888年のエマリー・ウォーカーによる講演内容は、ウィリアム・S.ピーターソン著・湊典子訳『ケルムスコット・プレス』、平凡社、1994年、pp.411-417.に掲載されている。

<sup>14</sup> 西欧で15世紀活版印刷によって出版された「グーテンベルグ聖書」から1500年までの間に刊行された初期活字印刷本。

<sup>15</sup> ピーター・スタンスキー著・草光俊雄訳『ウィリアム・モリス』、雄松堂出版、1989年、p.111.

<sup>16</sup> 寿岳「愛書雑話」、1931年、『書物の共和国 定版』、春秋社、1986年、p.116.

<sup>17</sup> Lucien Pissarro、妻のエスター (Esther) とともにエラニ・プレス (Eragny Press 1894-1914) を設立した。プレスの名称「エラニ」は、ピサロの故郷であるノルマンディーの村の名にちなむ。エラニ・プレスのプリンターズ・マークは、刊本の版面と同様にピサロがデザインをし、妻エスターが木版彫を施したものである。「エスターとルシアン」を意味するイニシャルがフランス語表記で彫り込まれている。ルシアンは画家のカミーユ・ピサロであり、父子は互いに芸術面で影響を与え合った。

スの刊本について、「近英の私版中私は〔ピサロ自身の意匠による〕このブルック・タイプで印刷された書物がずいぶん好きだ。難を言えば、色刷の木版が余りに華麗すぎて、本文がその伴奏となっているような感じを抱かせることである。」と述べています。同時に、「デザインも、木版の彫刻も、印刷も、すべてピサロとその夫人の手になった点において、この私版は特に強く私の心をひきつける。なぜならば、それは遠くウィリアム・ブレイクの彩飾本を想起させると同時に、また現に私自身が試みた向日庵私版の工程とも相近いからである。」と語る言葉は見逃せません。エラニ・プレスの刊本の装飾文字や扉絵の装飾枠は、ピサロがデザインしたものを夫人が木版彫して仕上げられましたが、ピサロと夫人の手による刊本と同様に、向日庵本として世に送り出されようとしていたブレイクの彩飾本は、文章と静子の手によるものでした。そして、ブレイクの彩飾本の工程にもまた、若きブレイクの愛と熱情から生れた詩を、妻カサリンも夫と同じ愛と熱情をもってその仕事を助けるという、ピサロ夫妻と同様の姿がありました。寿岳は向日庵本に、ブレイクやピサロの書物を重ねあわせたのでした。

このような寿岳の視点に注目すると、寿岳の書物観は人間観であることがわかります。寿岳は向日庵本『書物』にコブデン＝サンダソン（1840-1922）<sup>18</sup> とエリック・ギル（1882-1940）<sup>19</sup> の書物論を収めました。寿岳はコブデン＝サンダソンと彼の書物論について、「コブデン＝サンダソンは、世界の一流の装幀家となっただけでなく、この工芸の道によって、失われていた生活のリズムをとりもどし、夢と現実との矛盾を超克して、調和のある世界観へ歩み入るとともに、ついに印刷のほうにも熱情をかたむけ、おそらくはモリス以上に完璧な書物人となることができた。」<sup>20</sup> と述べています。この言葉は、向日庵本が文章と静子の生活の上に成りたっていることと相通じており、寿岳が理想とする生活態度、「思うことと行うこと一如の生活」<sup>21</sup>（「向日庵消息第三信」）、「生活からどんな一断片を切りとって、生活する者の姿が矛盾なくそこに見られ、それが他の部分と完全につながりあうような態度」<sup>22</sup>（「向日庵消息第五信」）にはコブデン＝サンダソンの生活態度が投影されているようにみえます。それは、喜びをもって仕事に励む人間の生活であり、寿岳が理想とした中世の生活の姿でした。寿岳が、向日庵本『書物』の読者からコブデン＝サンダソンの書物論に対する理解が得られなかったことへの失望について、「人があのコブデン＝サンダソンの所説をどう受けとるかで、私はその人の書物愛の

<sup>18</sup> Thomas James Cobden-Sanderson、モリスの死後1900年に、印刷の実際面でモリスのよき指導者であったエマリー・ウォーカー（Emery Walker）とともにダブズ・プレス（Doves Press）を設立した。

<sup>19</sup> Eric Gill、石彫職人、版画家。ゴールデン・コックレル・プレスのために活字デザインをおこなった。

<sup>20</sup> 寿岳「代表的書物人」、『書物の世界・定版』、出版ニュース社、1973年、p.263。

<sup>21</sup> 「向日庵消息 第三信」、1933年12月26日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.878。

<sup>22</sup> 「向日庵消息 第五信」、1935年1月10日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.888。



深淺が量れるとさえ思う。なぜならあの書物論はただに書物道だけでなくあらゆる道を貫く不磨の格律だからです。」<sup>23</sup>（「向日庵消息第八信」）と記している言葉は、そのことを示す証といえるでしょう。気高い書物は生活の調和のうえに成り立つとのコブデン＝サンダソンの理念は、寿岳による訳文では次のように示されました。

…美しい書物の健全さ、均整、調和、張りや無理のない美しさは、そのとき、われわれ自身と全世界とから成立つあの生活の全體、互に競合ふもろもろの力の間にあつて、毅然たる自己の面目を保ち、生活の言葉を以てその日その日の彩飾された頁の上に幾世紀もの書冊を書きしるし、限りのない時間と空間とを貫いて、美しいまたは気高いあらゆる書物の眞の原型である生活と云ふ驚くべき物語の十分な展開へ、韻律正しく前進するあの複雑にして美妙的な健全さ、均整、調和、及び張りや無理のない美しさと吻合するであらう<sup>24</sup>。

コブデン＝サンダソンが「書物の原型」と言い表した彼の生活の一場面を伝える写真があります<sup>25</sup>。自宅の一室に設けた製本工房の左奥では、妻のアニーが「糸かがり」を行い、右の窓側で仕上げを行っているコブデン＝サンダソンの作業を、彼らの子供たち、ステラとリチャードが傍らから眺めています。この家庭の一場面はコブデン＝サンダソンの書物論を象徴しており、文章と静子が向日庵本を手ずから作成する姿に重なります<sup>26</sup>。寿岳が自らの向日庵本づくりに重ね合わせた人物たち、ウィリアム・ブレイク、ルシアン・ピサロ、コブデン＝サンダソンにとって、そして寿岳にとって、書物は「生活の言葉」そのものでした。

向日庵本『書物』に掲載された、コブデン＝サンダソンとエリック・ギルの書物論が、書物工芸における理念と実践の両面から理想の書物を論じていることは重要です。精神論なき書物に「美」は存在しない、と同時に、精神論だけでは書物の「用」をはたし得ない、という書物の本義をかえりみれば、書物工芸において最も重視すべき分野は活字と印刷であることに気がつきます。書物工芸においては、「読む」という書物の「用」が最も重視されなければならないからです。そこで、活字と印刷において寿岳に特に影響を与えたエリック・ギルの思想と実践について触れ、寿岳の書物観と人間観を明らかにしたいと思います。

<sup>23</sup> 「向日庵消息 第八信」、1936年12月15日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.900。

<sup>24</sup> コブデン＝サンダソン「完全な書物」、寿岳訳著『書物』、向日庵、1936年、pp.19-20。

<sup>25</sup> コリン・フランクリン著『英国の私家版』、前掲書、p.91。に写真が掲載されている。『イングリッシュ・イラストレイテッド・マガジン』1891年にはこの写真と同じ構図の図版が掲載されているが、こちらには子供たちの姿はない。（ライオネル・ラバーン著・小野悦子訳『ユートピアン・クラフツマン』、晶文社、1985年、p.52参照）。

<sup>26</sup> 向日庵本が「寿岳文章しづ夫妻が手ずから作製したもの」であることを象徴する写真として好例であろう。当論考の巻末に掲載した。（『壽岳文章しづ著作集 第6巻』春秋社 1970年、挿写真）

## エリック・ギル

寿岳が向日庵本『書物』(1936)に収めたエリック・ギル「書物」の訳文は、先に『工藝』第44号(1934)に寄稿した訳文とほぼ同文であり、同号の「訳者附記」には、その原典について、『印刷に関する一論 印刷と敬虔 1931年の英国に於ける生活と作品とに付ての、そして特に印刷に付ての一つの論文』(*Printing & Piety: An Essay on Life and Works in the England of 1931 & Particularly Typography*, Sheed & Ward, 1936)の最後の一章の全訳である、と記されています<sup>27</sup>。続けて寿岳は本誌に訳文を掲載することについて、「ギルの書物論を窺うには最上の手びき」であり「これだけの豊かな哲学と、これだけの深い生活原理とを背後にひそませて」書物工芸について書かれたものを、「出版の理想が低劣な」当時の日本に提示したい、との意図を記しています。さらに先立つ『工藝』第31号(1933)には、エリック・ギル『芸術と分別』(*Art & Prudence, an Essay by Eric Gill*, The Golden Cockerel Press, 1928)の訳稿を掲載していますが、同号には陶芸家の濱田庄司による「ギル訪問」という一文がともに掲載されています<sup>28</sup>。濱田がイギリスのギルを訪ねたのは1921年秋と1929年夏のことで、濱田とバーナード・リーチが、1920年にコーンウォールのセント・アイヴスに登り窯を築いたこの時期にあたります<sup>29</sup>。柳宗悦をはじめとして、日本の工芸の分野においてもエリック・ギルの思想はこうして受容されていきました<sup>30</sup>。工芸家、エリック・ギルの活動の分野は、建築家、碑文彫刻家、木版画家、社会主義運動家、活字設計家、印刷者と多岐にわたりますが、彼の彫刻家、石彫り職人としての才能はのちに新書体設計の仕事に結びつくこととなります。ギルは妻と三人の子供たちとともに、人里離れた田園的な環境のなかで、工房には電話やラジオなどの産業主義による産物は一切置かず、ローマ・カトリック教の信仰に基づく自給自足に近い共同生活を送っていました。ギルのパトロンであったドイツ人ハリー・ケスラー伯爵(1868-1937)<sup>31</sup>は、「ギルは宗教とエロティシズムの損なわれざる混合である。彼はみずからの宗教をくキリストを愛すること」と規定している(彼は修道士風の頭巾マントをまとい、その暮しは、彼が結婚しているこ

<sup>27</sup> 1936年 Sheed and Ward 社から発刊された *An Essay on Typography* 第2版には、第8章 'The Book' のあとに第9章 'But Why Lettering?' が追加された。

<sup>28</sup> 「エリック・ギルには私は非常に感心してゐる。彫刻家として、木版家として、また評論家としての夫々の仕事にも勿論感心してゐるが、更に一人の生活者として一層感心してゐる」、「ギルやメーレ夫人には、仕事にも生活にも信念がはつきり出てゐて、そして落ち着きがある。信念がはつきりしてゐるだけならば頭の問題だけでも済むが、落ち着きがあるのは、後立に據りどころあるよき生活がなければ得られないと思ふ。」(濱田庄司「ギル訪問」、『工藝』第31号、聚楽社、1933年、pp.37-43.)と記し、「生活者」としてのエリック・ギルの人間像に強い共感を示した。

<sup>29</sup> バーナード・リーチと濱田庄司の出会いについては、ライオネル・ラバーン著『ユートピアン・クラフツマン』、前掲書、pp.13-15.に詳しい。

<sup>30</sup> 雑誌『工藝』に掲載されたエリック・ギルの訳文(比木喬・長谷川進共訳)として、「道具と機械」(第79号、1936年、pp.40-54.)、「芸術と産業主義」(第81号、1937年、pp.33-53.)がある。

<sup>31</sup> パリで生まれ、イギリスに学び、母国ドイツを中心に政界や社交界でも顔が知られた人物。彫刻、建築、室内装飾、バレエ、絵画、文芸、にいたるまで芸術に対する造詣が深く、ワイマールに個人印刷所クラナッハ・プレッセを持っていた。

とをのぞけば、修道院の隠者のそれに近い。彼の姿はほとんど托鉢する修道僧である。櫛を入れない髭、長い、梳かしたことの無い髪、充血し、穢れを知らぬ、だが活力のある、ときに狂信的に輝く目。」とギルの印象について書き留めています<sup>32</sup>。

寿岳は晩年に、エリック・ギルについて、「現代の書物工芸家のうち、私が最も深く傾倒しているのはイギリスのエリック・ギルであり、昭和十年代から、折あるごとにギル紹介の筆を執ってきた。同時代人であること、またわが国における民芸運動の創始者故・柳宗悦さんが直接彼を知っており、その特異な風貌や生活についてしばしば聞かされたことも、私にギルへの親近感をもたせる原因となったようだ。」<sup>33</sup>と回想し、また妻静子も、「…神よ、この小さな手の一握の種を蒔かしめ給へ！以前から考へてゐたのですが、神聖といふことの重大さを益々痛感してをります。春休みに文章が読み続けてゐたエリック・ギルの神聖論に、嬉しく心のときめきを覚えました。ああ、一本の蠟燭の燈影で、愛と畏敬とを以て人の眼に見入りたい。」<sup>34</sup>と記しているように、文章と静子がともに、生活のなかに人間的な世界観を映すギルの思想に共感し、傾倒していたことがわかります<sup>35</sup>。

寿岳が向日庵本『書物』に収めた、ギルの書物論である *An Essay on Typography* には、ギルの宗教観や労働観が示されており、このなかでギルは1931年当時のイギリスにふたつの世界があるといっています。ひとつは「人間に幸せと生活の喜びを与えるのだと主張する、機械化された産業世界」であり、その幸せは「わたしたちが余暇をすごす幸せや喜びに満足しているばあい」や「生活の糧を得ることと引換えに、仕事のなかに喜びを要求しないばあい」に得ることができる世界です。「工場のサイレンや、時刻管理によって規則化された世界であり、そこではだれも全体を変えようとはしない世界」です。もう一つの世界は、「衰えゆくが滅びることのない小売店、ちいさな工房、仕事場、診療室」のような、欲深くはないがゆえに余暇という考えの存在しない世界であり、「仕事がすなわち生活であり、愛が寄り添う世界」です。この二つの世界は一見すると、前者が現実世界であり後者が理想世界であるようにみえるのですが、ギルは、一方が他方を覆すのではなく、両者の妥協と併存によってこそ、人間が働く世界が、よりありのままに人間的なものになると主張しています。ギルは理想と現実の拮抗を調和する賢明な術を説いているといえるでしょう<sup>36</sup>。

<sup>32</sup> 大輪盛登著『グーテンベルクの鬚 活字とユートピア』、筑摩書房、1988年、p.170。

<sup>33</sup> 寿岳「エリック・ギルの軌跡」『図説 本の歴史』、日本エディタースクール出版部、1982年、p.171。

<sup>34</sup> 「向日庵消息 第六信」、1935年6月12日、『寿岳文章しづ著作集 第1巻』、春秋社、1970年、pp.363-364。

<sup>35</sup> 向日庵本『書物』（1936年）の刊行年に照らせば、静子が記している日付から、ここで語られている「ギルの神聖論」は、「書物」の原典であった「印刷と敬虔」、すなわち *An Essay on Typography* である可能性が高いと推察される。

<sup>36</sup> 寿岳の「…理性と権威——言いかえれば自由を求める心と伝統に根ざす心、自然の世界と時間の世界。この二つが調和されまたは止揚されるときに、より高次の生活が現われることは知りながら、それがいかに調和されまたは止揚されるか、そこに人間の生

現代に甦った古きよき時代の手仕事から生みだされた高級な工芸は、すべての民衆と労働者の手に届くものではありませんでした。ギルは、手仕事によるものと同様に、民衆が日常的に手にする大量生産によるものにも、美を備えることが可能であると考えました。書物においてもこの原理をあてはめることができます。ギルは、「良質の書籍製作と良質の生活」は「あなたとかわたしがぼんやりと夢見るものではなくて、書籍の本質と生活のあるべき姿を考えるとところから明確になるものである」と述べています。ギルの *An Essay on Typography* は、書物の心象世界のみならず、書籍の判型と活字書体の様式が読者にとって読みやすいかどうかという大原則のもとに決定されるという書物の原理を具体的に示しています。「すべての行長が等しくて、版面が整った体裁であるだけでは、本質的におおきい価値があるとはいえない。整った体裁に価値がありとするのは、書籍を読むものよりは、むしろ眺める対象とみなすひとの考え方である。」「印刷する書籍がまともな内容であればあるほど、その相手たる大衆へひろく訴えることになる。それだけに書籍印刷者のタイポグラフィのあるべき姿は生真面目であり非個人的であり、特殊ではない」といったギルの言葉は、読者の立場にたったタイポグラフィのありかたを提示するものです<sup>37</sup>。「整った体裁に価値がありとするのは、書籍を読むものよりは、むしろ眺めるとみなすひとの考え方である。」<sup>38</sup> というギルの言葉は、後に述べる向日庵本の活字と印刷の問題と関わる重要な言葉です。

ギルは、書物における活字の世界に重要な功績を残しています。ギルを活字とタイポグラフィ<sup>39</sup>の道に導いたのは、エドワード・ジョンストン (1872-1944)<sup>40</sup> という人物でした。1916年にはジョンストンがロンドン地下鉄道のサイン文字をサンセリフ体<sup>41</sup>で描くのを手伝ったのがギルのタイポグラフィに関わる最初の仕事でした。さらにギルの碑文彫刻の才能を新しい活字開発の仕事に結びつけたのは、スタンリー・モリスン (1889-1967)<sup>42</sup> でした。モリスンがタイポグラフィック・アドバイザーを務めていた、イギリス植字機メーカーの大手モノタイプ社が 1922 年に決定した活字開発販売計画の目的は書籍用のオリジナル書体の開発にありました。当時のイギリスにすでにあつた私家版印刷に使用された書体では個性が強すぎて自意識過剰であるとして、20 世紀を

---

活が求める最も根本的な態度があると信じ、この問題についての大きな鍵を蔵する西洋の中世紀にはいろいろと志しました。私はまだほんのわずかに近づいたにすぎません。…」(「向日庵消息 第四信」1934年、『壽岳文章書物論集成』p.883.) という言葉からは、壽岳のエリック・ギルへの傾倒を読み取ることができる。

<sup>37</sup> 河野三男訳・著『評伝 活字とエリック・ギル』、朗文堂、1999年、p.129., p.155., p.168.

<sup>38</sup> 『ゲーテンベルクの鬚 活字とユートピア』、前掲書、pp.178-179.

<sup>39</sup> *Typography* 活版印刷術。割り付けの同義語としても使われるが、正確には、活字の組版・印刷・製本など、印刷物の製作全技術をさす。

<sup>40</sup> Edward Johnston、イギリスの書体デザイナー、カリグラファーで、1916年にロンドン地下鉄のためにサンセリフ書体の「ジョンストン」をデザインした。コブデン＝サンダソンも彼の教えを受けた生徒のひとりである。

<sup>41</sup> セリフ(文字の端にあるひげのような飾り)のない書体。

<sup>42</sup> Stanley Morison、タイポグラフィ。フランシス・メネルが設立したペリカン・プレスを引き継ぐ。モノタイプ社で顧問を務めた。

代表する独自の書籍用活字を世にだそうとしたのでした。モリスンの依頼によってギルが原図を描いた書体である「ギル・サン」や「パーペチュア」はその結実でした。この書体について、モリスンを通じてギルと知り合ったアメリカ人女性のタイポグラフィ研究家ビアトリス・ウォードは、著書『エリック・ギルの生涯』のなかで、「かの人物（エリック・ギル）は、もっともひろくつかわれるサン・セリフ活字をデザインしたばかりでなく、クラシック・レター——私たちが待ち望んでいた “すぐれて二十世紀的な本文活字、——パーペチュア・ローマンのような文字をつくりだした。ここには、なんら矛盾はない。ギル氏のサンは、機械鑄造用の文字として “もっとも抵抗が少ない線、でデザインされており、パーペチュアは現代のもっとも公明な石彫文字から発展してきたものであって、機械的製造ができたから、たまたま活字になったのであり、そうした活字にたいする要求があったのである。」<sup>43</sup>と記しているように、ギルの意匠化による新書体が、書物の本文活字として浸透しようとしていたことは極めて重要です。

向日庵本『セルの書』（1933）の題字に用いた書体は、ギルが刻んだ活字にもとづいて寿岳が書いたものでした。その書体は「ギル・サン」書体であるように見えますが、それは寿岳のギルへの敬愛を捧げたものであるのか、ウィリアム・ブレイクとギルの思想の親和性を表現したものであるのか、詳しい説明はありません。ただ、書籍の新しい本文活字として開発された「ギル・サン」という書体が、私家版として活字と印刷の点において自己矛盾を抱えていた向日庵本に使用されたことは、寿岳が意図しないひとつの示唆を残しています。「題字に用いた書体は、私の尊敬する工芸家エリック・ギルが刻んだ活字にもとづいて私が書いたもの。能うかぎり無用の粉飾を除き、美をその本源に還そうとするギルの精神は、彼の考案した活字にもよく現われていると存じます。」<sup>44</sup>と述べているように、寿岳が受容したギルの精神は、無用の粉飾を剥ぎ取った本源にある美しさへの理解であり、寿岳の向日庵本刊行の意図は、眺めて美しい書物をつくることにはなかったといえるでしょう。つまり、寿岳が向日庵本の読者に求めたのは「眺める」ことではなく、「読む」ことでした。寿岳は、工芸としての書物の美しさについて次のように述べています。

…書物の各部門の工程が正しい美と用から外れがちなわが国の出版物は、特にこの点を反省しなくてはならない。あまりにも秩序が無さすぎる。あまりに奇をねらいすぎる。変ったものが美しいかのごとくに思い違えられすぎる。用を離れすぎる。一口で言えば、あまりにも個人主義的でありすぎる。書物では、装幀のみな

<sup>43</sup> 『評伝 活字とエリック・ギル』、前掲書、p.155.

<sup>44</sup> 「向日庵消息 第二信」1933年8月27日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.875.

らず、活字でも、挿絵でも、個人的な好尚が余り強く現われることを邪道とする。しかし製作者の個性は全然殺されてしまうかと言うにそうではない。つましく隠された「自己」は書物を手に取ってじっと眺めているうちに、一種の風韻、一種の気品となって、美に敏感な者の心を打つ。それは押しかくしても押しかくしても、どこかに自己を主張せずにはおられない必然の美しさだ。製作者の人格がおのずと作り出す雰囲気だ<sup>45</sup>。  
…

そして、ウィリアム・モリスや、エリック・ギル、ルシアン・ピサロをはじめとする優れた私版家たちの出発が、いずれも初代印刷者の字体に復帰することからはじめていることについて、彼等が模倣した彩飾筆写書体の美しさは、写字生の個性ではなく、一定一様の決められた「型」にはまっていることに拠るものであり、このような美を意識しない自然な美しさこそが、書物における工芸美である、と述べています<sup>46</sup>。このように、書物を構成する各要素それぞれが、個性を主張したり美しく飾り立てたりすることなく、正直に各本分の役割を誤魔化すことなく果たしていることから生れる書物工芸の美しさについて、寿岳は啓蒙を繰り返し、実践しました。

## II 向日庵私版の理念と実践

本章では、寿岳が向日庵本をひとつの実践として刊行した意図を「私版」と「市販」の両側面から明らかにし、寿岳の書物観における理想と向日庵本の限界について検討します。

### 商業出版と私家版

ここで、向日庵本が刊行された当時の日本の出版界の状況に目を移したいと思います。向日庵本が刊行された昭和初期の出版界は、いわゆる「円本」が流行した時代でした。一冊一円の予約制廉価全集本、「円本」が誕生する要因の端緒となったのは 1923 年の関東大震災でした。震災により東京の印刷業界はほとんど壊滅状態になり、震災前東京にあった 700 種の雑誌のうち、震災の翌月号から出版できたのは 200 種、翌年に復刊見込みのものは約 300 種、震災前に比べて倍増した印刷料金は、業界の復興につれて以前の一割高に落ち着いたといえます。またこの頃から社会主義運動が激化し、1925 年の治安維持法、大正から昭和への改元、など騒然と

<sup>45</sup> 寿岳「美しい本とは何か」、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p698、初出：『書物』1巻2号、三笠書房、1933年

<sup>46</sup> 寿岳「書物の印刷」、『書物の世界・定版』、1973年、出版ニュース社、pp.168-170。

する時代のなかで誕生した「円本」は、震災で蔵書を焼いた人々の要望に応えることとなり、大多数の単行本の初版発行部数が5千部止まりというなかで、60万部もの予約を獲得しています<sup>47</sup>。「円本」のさきがけとして1925年に『現代日本文学全集』の刊行を公表した改造社は、一冊の定価を下げることにより、それまでは特権階級だけが入手できた文学全集を、民衆のために解放することを刊行の目的としながらも、一方で商業出版として成立させるために、民衆に対する大量販売の実現を重要視しました。このような販売戦略としての「円本」とは一線を画する崇高な読書理念を掲げて1927年に発刊されたのが「岩波文庫」でした。岩波茂雄は岩波文庫の発刊に寄せた言葉のなかで、次のように「円本」を痛烈に批判しています。

真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。かつては民を愚昧ならしめるために学芸が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあった。今や知識と美とを特権階級の独占より奪い返すことはつねに進取的なる民衆の切実なる要求である。岩波文庫はこの要求に応じそれに励まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少数者の書齋と研究室より解放して街頭にうまなく立たしめ民衆に伍せしめるであろう。近時大量生産予約出版の流行をみる。その広告宣伝の狂態はしばらくおくも、後代にのこすと誇示する全集がその編集に万全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻訳企図に敬虔の態度を欠かざりしか。さらに分売を許さず読者を緊縛して数十冊を強うるがごとき、はたしてその揚言する学芸解放のゆえんなりや。……外観を顧みさるも内容に至っては厳選最も力を尽くし、従来の岩波出版物の特色をますます発揮せしめようとする。この計画たるや世間の一時の投機的なるものと異なり、永遠の事業として吾人は微力を傾倒し、あらゆる犠牲を忍んで今後永久に継続発展せしめ、もって文庫の使命を遺憾なく果たさしめることを期する。…

(岩波茂雄「読書子に寄す 一岩波文庫発刊に際して一」、昭和二年七月)

このように出版者としての使命感の性質には違いこそあったものの、「円本」や「岩波文庫」は、特権階級ではない民衆のために知識や文学という芸術を解放するという同じ目的を持って登場しました。ある調査によると、昭和4年当時のサラリーマンの読書状況について、女中を雇う余裕のある月収百五十円以上のサラリーマン家庭の出版物購入費は七円から八円程度、月収百円以下の家庭では三円から五円となっており、購入出版物のなかには「円本」や「岩波文庫」もみうけられます。「僅かな金で完全な文学図書館が出来る」「上野の図書館

<sup>47</sup> 中原雄太郎「近代日本と印刷文化」、『印刷雑誌』とその時代』、印刷学会出版部、2007年、pp.29-30.

を四畳半におさめた」とうたった円本の真価は、むしろブームが急速に終息に向かう昭和5年以降、円本のストックが版元から一〇銭、二〇銭という反古同然の価格で大量に投げ売りされることにより、経済的に余裕のない階層の人々にも容易に入手できるようになってから発揮されました<sup>48</sup>。賛否両論があるにせよ、円本ブームが新たな読書層を開拓したことにはちががありません。

一方でこの時期に円本ブームに反して流行したのが、装幀に凝った豪華な私版でした。限られた者だけが手にすることができる私版による限定本は、民衆に解放された読書のありかたからは最も遠い出版物であり、それは「市販」と「私版」との決定的な違いです。寿岳は、元来書物は普及を旨とするものであるが、「内容が特殊なために、一定の、ごく少数の読者しか予想されない場合」、「内容がかなりの普及性を持った書物でありながら、書物一般の水準を高めるために最善の注意が払われる結果、少数しか刊行が不可能な場合」<sup>49</sup>、この二つの場合には限定出版が許される、と述べていますが、ここで寿岳が、「書物一般の水準を高める」ことを限定本出版の意義であるとしていることは、向日庵本の矛盾を解消する鍵となる重要な視点です。

この時期には、長谷川巳之吉の第一書房版、江川正之の江川書房版、野田誠三の野田書房版、などの定評のある私版<sup>50</sup>のほか、谷崎潤一郎のように自装本を刊行する作家も登場しました<sup>51</sup>。このような独自の出版美学を持つ出版者が商業出版と袂を分けて刊行された限定本が、「用と美」を兼ね備えた書物を愛する愛書家によるこびを与えていたことは、出版界におけるこの時代のもうひとつの方向でした。向日庵本の頒価を例に挙げると、『唯理神之書』は二円五〇銭、『無染の歌』は五円、『無明の歌』（全葉彩色本）は十八円と、高価な書物であったことがわかります。

『本道楽』（茂林脩竹山房、1926年創刊）、『書物の趣味』（ぐろりあ そさえて、1927年創刊）、『訪書』（訪書書局、1930年創刊）、『書物と装釘』（装釘同好會、1930年創刊）、『書物展望』（書物展望社、1931年創刊）、『書物趣味』（ブックドム社、1934年創刊）、『書物』（三笠書房、1933年創刊）、『書物評論』（建設社、1934年創刊）、『書物倶楽部』（裳鳥舎、1934年創刊）、などの書物雑誌が相次いで創刊されたのもこの時期でした。新しく刊行された私版の装幀や造本についての愛書家による批評が賑わいをみせ、「円本ブーム」の反動として誕生した私家版のひとつとして、寿岳の向日庵本も評価の対象となっています。向日庵本は、例えば「円本」や「岩波文庫」のように不特定多数の一般国民のための商業出版とは目的を異にする書物であり、ここにこそ向

<sup>48</sup> 永嶺重敏著『モダン都市の読書空間』、日本エディターズスクール出版部、2001年、pp.224-225。

<sup>49</sup> 寿岳「装幀問答」、1934年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p612。

<sup>50</sup> 中嶋宗是著『本の醍醐味』、関西市民書房、1981年、などに詳しい。

<sup>51</sup> 寿岳は谷崎潤一郎『春琴抄』の装幀について批判している。（「作家と装幀」、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、pp.597-600.）



日庵私版を刊行した寿岳の意図はありました。

## 向日庵本の評価

このような当時の出版界において向日庵本はどのような評価をされていたのでしょうか。当時の書物雑誌に掲載された向日庵本の評価と、他の私版に対する評価を比較検討し、昭和初期に刊行された私家版のなかでの向日庵本の位置を把握しておきたいと思います。

「美書を創造することに實に神技に近いかの壽岳文章氏<sup>52</sup>」、「優雅は美しいと同時に上品を意味する點に於て」、「品位ある美しさ、濫味を持つ美しさ、私はこの種の書物に何時も敬意を表するもので、壽岳氏の近刊『セルの書』などその良心的藝術的製作に感服せざるを得ない<sup>53</sup>」、「向日庵プレスはブレイキアン壽岳文章氏の私家版の名で、吾國に於けるナンサッチ、ケルムスコット・プレスである。最も良心的な出版で、現代に於ける吾國唯一の私家版であらう<sup>54</sup>」、といった言葉が並びますが、おおよそ『唯理神の書』『無染の歌』『セルの書』といった向日庵本がひとつひとつ寿岳夫妻の手によって製本されていることに触れ、寿岳の書物制作に対する熱情と姿勢に対する評価となっており、寿岳が当時の日本において最も良心的な書物を創る私版家の一人として一目置かれた存在であったことがわかります。なかでも次の一文には、他の評者にはみられない向日庵本に対する洞察の観点が示されています。

…この國に於ける學識と良心とを兼ねたるよき書物の刊行處はかくて京都の向日庵を残すのみ。この刊本その失敗のものにさへ刊行者の誠意を現はして、無下に批難し得ざらしむるは、正にその刊行の意圖の眞率によれり。一々の細評紙員なければ他日を期し、「無染の歌」など最もよき出来ならめど、なお敢へて云はばこの刊本試作期を脱せずといはむ、爾後の刊本にこそ期待さるゝもの多し。…犢皮使用の「書物」の装幀につ

<sup>52</sup> 猪場毅「出版鄙言」、『書物』第1年第1冊、三笠書房、1933年10月、p.36。

「…美書を創造することに實に神技に近いかの壽岳文章氏は、聞くところによれば毎月發行の雑誌の仕上を製本所に委すことを惧れて、一つ一つ家人の手で騰つて製本するさうである。いやしくも良心的な書物制作に従事する者にすべてこの位の熱情が欲しい。敬して倣ふべきである。…」

<sup>53</sup> 禿徹「美しい書物」、『書物』第2年第1冊、三笠書房、1934年1月、p.34。

「…優雅は美しいと同時に上品を意味する點に於て、江川書房刊の鈴木信太郎氏譯「半獸神の午後」壽岳文章氏刊「唯理神の書」蕪木氏刊「ドニズ」の如きそれに属するもので、英國のナンサッチ版も優雅な書物を多く出版してゐるので有名である。かのRaymond and Ricketts:—Oscar Wilde の如きはその一例と稱すべきであらう。品位ある美しさ、濫味を持つ美しさ、私はこの種の書物に何時も敬意を表するもので、壽岳氏の近刊「セルの書」などその良心的藝術的製作に感服せざるを得ない。…」

<sup>54</sup> 禿徹「限定版展望」、『書物展望』第4巻第10号、書物展望社、1935年10月、p.52。

「…向日庵プレスはブレイキアン壽岳文章氏の私家版の名で、吾國に於けるナンサッチ、ケルムスコット・プレスである。最も良心的な出版で、現代に於ける吾國唯一の私家版であらう。同氏の手になる『唯理神の書』『無染の歌』『セルの書』『ブレイク書誌』等、何れも素晴らしい良心的出版だ。而もそれ等が奥さんと共に手彩色をやり、製本さるるに至つては自づと頭が下つて来る。同氏にこそ専有の印刷所を持つて貰ひ度いと念じてゐる。…」

き一言すれば、犢皮の鞣の技術に未熟の結果、所期の成果を得ざるを刊行者自ら遺憾とせりと傳聞すれば、外装の不結果は殊に論ぜずして過ぎむとも、経験少からざる印刷の結果また甚だ粗悪なるは、外装への異常な關心と釣衡せず、フライ・リーフ<sup>55</sup>なき本文と奥附の關係は、所爲とすれば同感するを得ず、「書物」中に説かれしことに甚だ皮肉なる例證をなすかの如し<sup>56</sup>。

ここで評者が「この刊本その失敗のものにさへ刊行者の誠意を現はして、無下に批難し得ざらしむるは、正にその刊行の意圖の眞率によれり。」と指摘しているように、向日庵本の造本としての出来は必ずしも高水準ではなかったことは、寿岳自身も自評として語っている事実です。しかしそれにもかかわらず、向日庵本が他の私版と一線を画して高く評価されているのは、寿岳の書物の道に対する情熱から生れる「書物についての学識と良心」によるものであったといえるでしょう。寿岳は、友人である矢野峰人（1893-1988）<sup>57</sup>の『幻塵集』を刊行した、外地台湾の私版「日孝山房」<sup>58</sup>の主人に宛てた一文のなかで、書物づくりに必要な情熱について次のように語っています。

西川様 美しい書物への熱情愈、旺に、恰も昨今の貧瘦な本邦書界の低調を單身もりかへさうとするかのやうなあなたの努力に、まづ敬意をささげます。事變以来、益々「美」の道から遠ざけられそうに見える書物のために、遠く臺北の地から「意を安んぜよ」と言はぬばかりに次から次へと會心の作を内地へ送られるあなたの存在は、時代が経つてきつと感謝と共にふりかへられるに相違ありません。…

人はよく粗雑な作品を、時代の所爲にしたり、材料の不足に歸したり致します。『今はいい材料がないから、作らうにも立派なものは作れぬ。』これが世間に通用する口實であるらしい。そんな口實に對して、あなたのこのたびの造書は、無言の教訓になりませう。悠々たるあなたの装本は、恰も微笑をたたへて語るものの如くです。よい本をつくる熱意と忍耐とさへあれば、どんな所ででもどんな時代にでも、必ずその願ひは成就する、と<sup>59</sup>。

<sup>55</sup> 遊び紙。表紙の遊びの次に加えられる製本師による白紙葉。

<sup>56</sup> 國美安彦「書物恋語」、『訪書』第2輯、訪書書局、1936年8月、p.17。

<sup>57</sup> 詩人、英文学者。京都帝国大学卒業。上田敏、厨川白村の教を受けた。寿岳が編集し、伊藤長蔵が「ぐろりあ そさえて」から1929年に刊行した文芸誌『みをつくし』に矢野も寄稿している。

<sup>58</sup> 日本の詩人、西川満（1908-1922）による台湾の私版。西川は台湾日日新報に就職していた。

<sup>59</sup> 寿岳文章「幻塵集に寄す」、『愛書』13輯、台湾愛書会、1940年、pp.33-36。

当時の私版の実態や自らの造本美学を語る寿岳の装幀に対する眼は、向日庵本に托された書物の理想像に繋がっています。「特色ある出版物も相当に出ますが、まだまだ上すべりが多く、沈著な批判の心と、燃えるような熱情とが一致したような書物になかなかめぐり会えないのは遺憾です。篤信な昔の信者が神を恐れたように、もっと書物を恐れねば、本当によいものは生れてこないと思います。内容はもちろんのこと、書物の外形に触れただけでも、おのずと頭のさがるような書物、また言いしれぬ親しさを感じる書物——これが本当の書物だろうと思います。私は自分の歩みをたえずその一点に向かわせているのです。」<sup>60</sup>（「向日庵消息 第一信」1933年）という言葉は、向日庵本において実践しようとした寿岳の書物観を示しています。しかし、向日庵本の実践には、「読者」と「活字」のふたつの問題において限界がありました。「読者の問題」については、「果たして日本の読書界は氏の力を十分に發揮せしめる理解と雅量があるうか。」<sup>61</sup>、との向日庵本についての評価や、先にみた「なぜ向日庵私版を復興しないか」のなかで寿岳が語っているとおりですが、本論では特に向日庵本の問題のひとつである「活字の問題」について検討したいと思います。

## 向日庵本と活字

かつて寿岳は、書物をひとつの総合芸術と見る立場から、『キルヤム・ブレイク書誌』について、「字母の形体において、活字の配列において、印刷インキの濃度において、また製本において」多くが満たされていないため、「この書が印刷や装幀のうえから立派にひとつの芸術品として存在しうる」ことは「断じて許さぬ」とし、「私の書誌が日本における最も芸術的な書物のひとつであるかのごとくに評せられることは、すなわちわが国の書物芸術がいかに低劣なものであるかを証明することにほかならない。」と述べています<sup>62</sup>。そして、先に検討した向日庵本『書物』についても、「私の書物が、わが国の出版業者や図書館員の関心を多くひき得なかった哀しい現状を顧みるにつけ、私はなおも一心不乱に正しい書物道を顕揚してゆきたい」<sup>63</sup>と語り、ついに無理解な愛書家に愛想を尽かして向日庵私版を閉じたとしています。向日庵本の限界としてここに語られている「読者の問題」と「活字の問題」は、書物において切り離しては考えられない根本問題であるといえるでしょう。寿

<sup>60</sup> 「向日庵消息 第一信」1933年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.872.

<sup>61</sup> 「…ああ美書、美書。モリスは地下で泣いてゐるだらう。賣れるからと云つて調子にのらず、もつと地道に御勉強を祈る。…愛書家はほんとうに美しい本の愛蔵家になるやうに自分の教養を高めて欲しいし、出版者はなんでも自分の趣味でのみ片づけようとせず、識者の意見を容れ、正しい本を作つて貰ひたい。…高雅とか豪華とか自稱する本は多いが本當に頭の下る美しい本が何冊あらう。モリスのやうな生命を打込んだ造書家が出ないものか。壽岳文章氏など最も期待されてゐる一人であるが、果して日本の讀書界は氏の力を十分に發揮せしめる理解と雅量があるうか。…」(利根忍「装幀か内容か」、『書物評論』第1年第2号、建設社、1934年8月、pp.75-76.)

<sup>62</sup> 寿岳「総合芸術としての書物」、1939年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.867.

<sup>63</sup> 「向日庵消息 第八信」1936年12月15日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.901.

岳は私版を閉じた後もなお「正しい書物道を顕揚」してゆきますが、「自分の今までにした仕事はどれもまだ未完成だが、昔イタリアですぐれた仕事を残したアルドゥスのような学匠印刷者あるいは近英のモリスやコブデン＝サンダスンのごとき書物工芸の道は、以前として私の前にある。ただ克服すべき困難な問題——たとえば印刷字体の制定や国字問題<sup>64</sup>——が多いので、前途ははなはだ遼遠であるが、よしや私の一代に実現されなくても私の念願を受けついでくれる人のあることを、日本文化の将来のために強く希望する。」<sup>65</sup>、と述べているように、印刷字体の問題は、向日庵本にとっても克服しがたい難題として常に寿岳を悩ませました。

美書を貪る愛書家を軽蔑し、質実な書物工芸としての「用」を重視する寿岳にとって日本の活字環境の乏しさは致命的でした。寿岳は向日庵本の出来について、活字だけはどうしても気持ちが悪く、この問題は活字を自分で考案し、自分で印刷する日までは何ともいたしかたない、といい、日本における活字について、「どんな活字が美しく、どんな活字が醜いかを、はっきり感じられる日本人がいったいどれがけあるのでしょうか。自分たちの作っているものがいかにまずいかを、もっと徹底的に痛感しないうちは、けっしてよいものは生まれてきません。」<sup>66</sup>と指摘しています。

1930年代の日本の活字環境はそれほど乏しいものだったのでしょうか。タイポグラフィの片塩二郎氏は著書『活字に憑かれた男たち』（朗文堂、1999年）において、昭和初期の印刷・出版・活字界にあった人物を活写しています。ここに描かれた人物の足跡をふりかえると、当時の日本の活字環境がみえてきます。寿岳と同時代を生きた井上嘉瑞（1902-1956）は、日本郵船の社員として1934年から1939年までロンドンに駐在し、趣味として滞在中のホテルの一室ではじめたプライベート・プレスにより、欧文印刷に関して当時の日本人としては最高水準の人であったといわれる人物です。井上は、在英中に欧州各国の活字鑄造所を訪ねるなどして収集した百五十種もの金属活字を日本に持ち帰り、原宿の自宅に印刷工房を設けて組版・印刷を開始しました。英国のプライベート・プレスの行き詰まりと、スタンリー・モリスらの活字改良の成果を目の当りにしてきた井上は、その知見を日本の印刷界に紹介しています。井上が、「一九三六年のクリスマスをまちかにひかえた暮夜」のロンドンから『印刷雑誌』の編集長に宛てた、祖国日本の「あまりに貧弱で、組版上のあやまりがお

<sup>64</sup> 安田敏朗著『漢字廃止の思想史』（平凡社、2016年）に詳しい。寿岳は「二列がきは一流國日本の名譽にかゝはるとか、小さいふりがなは眼のためにわるいとか、體面や衛生の方からばかり問題にして、印刷される紙面の美しさをいふ人がいないのはなぜだらう。この印刷面の美しさといふことは、ローマ字やカナモジをすゝめる場合にも第一に考へられねばならぬはずなのに、その運動に従つてゐる人たちは、國民の、ことに學童の負擔が軽くなること、時間の浪費が避けられることを金看板にする。…「書物」の側からいへば、問題はむしろ印刷面の美醜にある。そしてそれが大切な問題とされる日が来ないかぎり、いつまでたつても日本に書物らしい書物のできぬことだけはたしかである。」との見解を示している。（寿岳文章「ルビの問題」『ふりがな廃止論とその批判』、白水社、1938年）

<sup>65</sup> 寿岳「書物と私」、1950年、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.918.

<sup>66</sup> 「向日庵消息 第三信」1933年12月26日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、p.880.

おい、欧文印刷を告発する書状」に、「私商売上、日本にみた時から、各種の欧文のパンフレット、案内書凡ての欧文印刷物を扱いますが、そのどれもこれもから受ける印象は『田舎臭い』の一語に蓋します。」とし、東京オリンピックをひかえる日本の品位を下げないためにも、日本の活字製造業者と印刷業者の指導の任に当たってほしい、と書き送っています。帰国後に発表した欧文活字についての研究論文のなかで、明治以降の日本が、ヨーロッパ文化の既成の結果だけの移植に追われて、物質的文明の基礎であり前提である伝統や精神文化を研究理解することを忘れており、例えば輸入された自由主義や民本主義のような、主義主張を生んだ歴史や伝統を持つ民族とその社会生活から遊離した形骸だけの主義は、根を失った樹木のようなものである、と述べ、さらに印刷文化について次のように指摘しました。

この弊は吾が印刷界に於ても同様である。…卓絶せる印刷機械とインキと紙と印刷工が揃ってゐれば立派な印刷物が出来るのなら誠に始末がよいのであるが、Graphic art とさへ呼ばれる印刷術は技術的分野の他に必然的に芸術的分野を包含してゐる。真の印刷は技術と芸術とが唇齒輔車の関係に立つてはじめて完成するのである。

吾が印刷界の芸術的半面は、本邦に活版が紹介された十九世紀後半期の欧米の形式をその儘鵜呑みにしたものに過ぎない。欧文印刷に至つては一層甚しく、当時の最悪のスタイルを今日迄臆面もなく天下に横行させて怪しむ人もない実情である。

印刷を技術者と商人のみに委した罪である<sup>67</sup>。

このように、当時の日本の活字が抱える問題に目をむけていたのは、寿岳だけではありませんでした。印刷の現場に生きる人こそ敏感に向き合っていた問題でした。もし、書物の世界と印刷界を同時代に生きた寿岳と井上の両者が出会っていたならば、向日庵本の刊行の意図が生んだ結果がちがったものに発展していたかもしれません。言語にアルファベットを使用する欧米の書物において、活字の選択には書体を持つ血脈を理解する必要があり、内容と合致した書体の使用が書物の品格を決定します。活字書体を美醜のみで語ることの無意味さを理解し、「印刷を技術者と商人のみにまかしてはならない」と警告を發し続けた井上のような人物が当時の日本の印刷界に存在したことは、その後の日本の活字文化にとって大きな救いとなったといえるのではないで

<sup>67</sup> 井上嘉瑞「欧文活字 始源・変遷・印刷校正の研究」、井上嘉瑞・志茂太郎『ローマ字印刷研究』(HONCO レアブックス 1)、紀田順一郎監修、大日本印刷株式会社 ICC 本部、2000年、pp.10-11、初出：『書窓』第10巻第6号、アオイ書房、1941年

しょうか。この「嘉瑞工房」は、井上の内弟子である高岡重蔵が後を継ぎ、現在も次の世代によって引き継がれています。また、国の「変態活字廃棄運動」に正面から啖呵をきった志茂太郎（1900-1980）<sup>68</sup>は、日本の活字書体について、「ローマ字国の数十文字に対し、吾は少くとも数千字を用意せざれば実用に供し得ぬ今日、ローマ字国に於けるが如き豊富なる書体の変化は、もとより望むべくもないが、吾が活版印刷七十年の歴史に顧みる時、現状はあまりにも貧困すぎはしないか。」<sup>69</sup>と指摘し、当事者の努力の必要性を訴えました。志茂がここで指摘した問題こそ、寿岳が次の世代に念願を托した書物工芸における克服すべき困難な問題のひとつでした。

寿岳が向日庵本による実践に限界をみたような未熟さが当時の印刷界にあったにせよ、井上嘉瑞や志茂太郎といった印刷の現場に生きた人々の眼は、書物における日本の活字と印刷の将来に、確かな理想と希望として受け継がれたのではないのでしょうか。

### III 「書物の共和国」というユートピア

本章では寿岳が「書物の共和国」という言葉で表している理念について検討し、書物の将来性と向日庵本が今日にあたえる意義について明らかにしたいと思います。

#### 「書物の共和国」の理念と向日庵本

寿岳は、書物の世界を「共和国」の概念でとらえ、『書物の共和国』としてその世界像を一冊の本にまとめています。その背後にはプラトンやトマス・モアへの意識があると寿岳は記していますが、ここでは、「共和国」という語は厳密に定義された国家体制を示すものではなく、一般的な比喩として描かれた理想的なユートピアと理解しておきたいと思います。それは、時代と国の境界を越えて、出版者、印刷工、植字工、紙漉く人、製本者、著者、読者、書店員、図書館員、はすべて書物という同じひとつ屋根の下の住人であり、「印刷者と読者と書物の美しい共鳴」が成り立つ世界といえますが、寿岳が「書物の共和国」という主題にとりくんだ昭和初頭、

---

<sup>68</sup> 岡山県の酒造家に生まれ、酒販店「伊勢元」を開くかわら「アオイ書房」を創設した。日本においていち早く写真植字機を導入し、自ら文字組版を行い印刷のすべての工程にかかわることで、少数数の美装本づくりを行った。恩地孝四郎とともに愛書誌『書窓』を刊行した。国の「変態活字廃棄運動」に対して発表した一文、「印刷界の暴挙を戒む」において、「変態——なんてコトバからしてへんなものであるが、誰が言ひ出したか、すでに通用語となつてゐるから、そのまゝ使つておくとして、明朝体以外のあらゆる書体の活字を変態活字と称してゐるのである。活字書体が色々あつては仕事がメンドウでウルセエ、一種にしちまつたらさぞ楽でモウカルぢやろ——なんて考へ方は、一体これこそ印刷商売そのものの否定である。どころか一切の文化現象の根こそぎの没却である。いつその事、活字なんてメンドクセエものを皆んなタタキつぶしたら、さぞサバサバしていき氣持ではないか。活字なんでものは読んで其の意を解し得れば足れり、同一の文字に変わった書体を作るなどムダなこつた。この論法を押しつめると、ドダイそんな事を言つとる人間からして、生きてメシを食つてるなんざあムダ中の大ムダである。…」と著した。（『ローマ字印刷研究』、前掲書、p.104.）

<sup>69</sup> 志茂「印刷界の暴挙を戒む」、『ローマ字印刷研究』、前掲書、p.110.

すなわち柳宗悦と親交を結び、民藝運動の書物工芸部門の功労者として『工藝』に書物論を発表していた当時、耳を傾けてくれる人は稀であり、寿岳は「孤独であった」といっています。「共和国」に友はなく、寿岳は書物について友と語り合うかわりに自問自答<sup>70</sup>するしかなかったのです。寿岳は晩年の回想のなかで、書物の戦後について、「職業軍人の『黙れ』の代りに知識人の『語れ』が市民権を得」、昨今に見られる装幀の分野での次世代の担い手による活躍は、「戦前では夢にも見られなかった多彩で闊達な光景」であるとしながらも、「だが戦前の旧体制は根絶したのではなく、いまわしいその亡霊のよみがえりさえ懸念されるのを、書物の共和国人は銘記せよ、誰よりもきびしく、強烈に！」と述べ、書物の世界ははまだ「戦前の旧体制」という「書物の敵」に晒されているということを、書物に関わる者は肝に銘じておく必要があるといっています<sup>71</sup>。すなわち、書物は、言論の自由と検閲の問題に絶えず敏感に向き合い続けなくてはならないということであり、この危険性は今日においてもいまだ根絶していない問題であるといえるでしょう。

向日庵本が刊行された時代性を鑑みれば、「共和国」という語に托された平和への強い祈念を無視することはできません。言論の自由と検閲、戦争と平和、労働と芸術、人間と生活、歴史と自然、といった時代精神の根本問題は、いつも書物の世界に直接影響を及ぼしてきました。昭和初期の書物が戦争によって被った弊害は大きなものでした。それだけに、戦中戦後の時局のなかでの向日庵本刊行の意義は、書物における戦争と平和の問題において特に色濃くあらわれています。晩年の寿岳は、向日庵本と戦争について次のように回想しています。

…終戦の年の十二月もおしつまった一日、戦後事情視察の公務を帯び、英国外務省の一要員が属官一人をつれ、突然わが家にやってきて私たち夫婦を驚かせた。開戦の直前ぎりぎりまで、わが家だけを心許せる唯一の安らぎ処として、しげしげやってきていた大阪駐在英国副領事（のちの駐日大使）ジョン・ピルチャーだ。彼は勝手知ったるわが家のこの本の仕事場にはいりこみ、目に涙して「君たちは、あの過酷な戦時中も、こういう貴重な平和の仕事をやり続けていたのか」と感激し、私たちの手を堅く握り、しばらく無言であった。

「英国は戦争で貧乏になったが、アメリカには求められない立派な文化使節をさしむける。君も知っているブランデン<sup>72</sup>だ。よろしく頼む。」それを知らせるために、ピルチャーはわざわざ西下したのだ。出来たての

<sup>70</sup> 寿岳が『工藝』第44号（1934年）に寄稿した書物論「装幀問答」は、書物工芸をめぐる問題について「主」と「客」が対話する形式で著されている。

<sup>71</sup> 寿岳文章「序」、『本の正坐』、芸艸堂、1986年、pp.10-11.

<sup>72</sup> Edmund Charles Blunden（1896-1974）イギリスの詩人。1924年に来日し、東京帝国大学で3年間英文学を講じた。1947年にイギリス政府の使節として再来日し1950年まで滞在。日本文化再興のため、国内各地で講演を行った。1948年に広島を訪れ、翌年「HIROSHIMA A Song for August 6th, 1949」と題する詩を発表した。広島市中央図書館の敷地内に建立された詩碑には寿岳文章の訳詩が添えられている。

本書一冊<sup>73</sup>を、彼は抱きかかえてその夜東京へ引き返した<sup>74</sup>。

ピルチャーが感激を隠さなかったように、戦時下において書物の刊行を継続するには、時局に屈しない強固な使命感と愛情と意志が必要であることは、日本でも英国でも他国でも書物の世界が同様に直面する困難な壁でした。静子が家事のあいまに翻訳を続けていたオルコットの『四人の少女』が、岩波書店からの刊行を目前に突如として出版不許可となったのも時局が実現を阻んだ一例です<sup>75</sup>。終戦後、寿岳が国策に沿った沈黙から甦るように刊行した、『日本エマソン書誌』(A Bibliography of Ralf Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935, 1947年)は、『向日庵消息第一信』(1933年)で刊行を予告していたものでした。これは、1929年の秋、柳宗悦がハーバード大学での講演のための滞英中に、エマソンの孫に当たるエドワード・W・フォーブズが、明治以降の日本思想界にエマソンが及ぼした影響の大きいことを柳から聞き、「日本におけるエマソン書誌」の作成を柳に提案したもので、柳からその一切の作成を任された寿岳には、編さん費としてフォーブズから200ドルほどが送金されました。ところが第二次世界大戦の開戦により、約束から十数年を経て1947年ようやく刊行された『日本エマソン書誌』は、500部のうち100部がエマソン家に贈られています。そして、向日庵私版を閉じた後に非売の書物として作製した『ウヅワース博士追憶集』(In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D, 1952年)は、急逝した寿岳の英文学の恩師であった関西学院大学のウヅワース博士を追悼するために1939年に出版にとりかかろうとしていたところ、同様の事情で十数年を経て刊行されたものでした。のちに寿岳は、この刊行由来について「乱世では当たり前のことも異常に見えるためか、私のこの行為を『人道いまだ地に堕ちず』というような題をつけて報道した新聞もあり、これにはどうも閉口した。」「政治家が嘘八百を述べている間に、ただ一つの真実を行っただけのことなのである。」<sup>76</sup>と記しています。寿岳は、ウヅワース博士に対する特別な思いについて次のように語っています。

現在の私が、仏教へと同程度のキリスト教への理解をもっているのは、心が若くてやわらかな時代を、関西学院ですごしたからである。ただ私にがにがしく思うのは、文学科に関する限り、一人の先生を除いて、日本人も外国人も、私にプロテスタント・キリスト教への改宗をすすめたことである。…私に改宗をすすめ

<sup>73</sup> 向日庵本『紙漉村旅日記』をさす。

<sup>74</sup> 寿岳「向日庵本の思い出」、『別冊太陽 日本のこころ』53本の美、平凡社、1986年、p.17.

<sup>75</sup> 「向日庵消息 第十信」1943年8月13日、『壽岳文章書物論集成』、前掲書、pp.908-909.

<sup>76</sup> 寿岳『ウヅワース博士追憶集』刊行記、『日本古書通信』、1953年10月15日



なかったただ一人の宣教師、それは故ウズワース博士であった。戦後、私は博士夫人の依頼で、博士の伝記を英文で編み、一冊の本とした。その伝記を編みながら、私の心の自叙伝が、博士のそれとも内面的にはつながることの多いのに驚いた<sup>77</sup>。…

書物の世界においては、このような「約束の本」をめぐる逸話が美談として伝えられた事例が他にも見受けられます。

印刷機や金属活字もまた戦争の標的となりました。戦時下の政府による資源回収が進められるなかで、活字に使用される鉛は、東京築地活版製造所の跡地に設けられた「日本古銅統制会社」により公定価格が設定され、業界内では鉛地金を循環利用する動きも生まれましたが、一方では、あたかも「非常時のお国のため」の旗印を掲げるような得体のしれない「変体活字廃棄運動」が強行されました。実態は「売却」であったとの証言もあるこの廃棄運動により、「東京印刷協同組合活字規格統制委員会」は、「奢侈品等製造販売規則」の禁令に触れるとして「変体活字」とされる行書体、隷書体、草書体、楷書体、宋朝体、丸ゴシック体、花文字の活字は廃止が決定され、正楷書体、角ゴシック体、明朝体だけが存続することになりました。回収された「変体活字」は東京築地活版印刷所跡のビルに集められた結果、1945年の空襲により「おびただしい量の活字が、滝のように溶けて流れだして、歌舞伎座の裏の築地川を埋めた」<sup>78</sup>という日本の活字の運命と、かつてテムズ川に投げられたコブデン＝サンダソン愛用の活字の運命とを比べみると、その背景にある活字環境の格差に愕然とします。

「共和国」という表現は、向日庵本『書物』（1936年）に収められた、コブデン＝サンダソン『完全な書物』のなかにも見られます。寿岳による訳文では次のように著されています。

…ある一つの物をつくるために多くの藝術が結合し、或は結合しようと企てるとき、その過程が進み、幾つかの藝術が発達するにつれて、めいめいの藝術はおのおの我見を立て、そてを創造するために最初かれらが心を合せて仕へた唯ひとつの必要なものを亡ぼさうとするに到る。…この事実からわれわれが学ぶべき教訓は、美しい書物を作らうとこころざすほどの藝術家は、十分に自己を抑制して、かれの藝術をも、かれの野心をも、二つながら、こころざす目的に従はせねばならぬと云ふ一事である。…藝術家なればこそかれらは、藝術の世界が一つの共和国であること、最も美しい藝術は、個々の藝術よりも高い綜合物であること、及び個

<sup>77</sup> 寿岳文章・しづ共著『樞と菩提樹』、白風社、1966年、pp.250-251.

<sup>78</sup> 片塩二郎『活字に憑かれた男たち』、朗文堂、1999年、p.47.

個の藝術は寄興的であって、すべてのものが合寄って創りだすべき理想の正しい服従に於いてのみ発揮せられるべきこと、を悟らねばならぬ<sup>79</sup>。

寿岳が訳出した『完全な書物』は、コブデン＝サンダスン『この世界を見よ』（生田耕作訳、奢瀨都館、1991年）に『工芸の理想』とともに『美しい書物』の題名で収録されているものと同文であり、訳者はこの書物について、1900年に刊行された、ダヴズ・プレス設立趣意書ともいべき『理想の書物』を後に *The Book Beautiful* の題名で収録したものである、と説明しています。コブデン＝サンダソン『この世界を見よ』（*Ecce Mundus Industrial Ideals and the Book Beautiful*, T. J. Cobden-Sanderson, Hammersmith Publishing Society, 1902）に収録されている『工芸の思想』からは、「共和国」という概念がラスキンの工芸思想から啓示を受けてかたちづくられたことがわかります。コブデン＝サンダソンはこのなかで、イギリスの「産業社会」にとっての労働者個々の産業生活の「理想」の支えとなる一つの世界観を示していますが、とりわけコブデン＝サンダソンの生業である「製本」の仕事における「理想」について述べています。コブデン＝サンダソンの理想に則した「製本家組合」の目標を、個人的利益のためのみならずその「職種」の名声と信用を目指して、各自が立派になされたすぐれた仕事を目指し、各人および全員の生活状態さらに技術の諸条件をすべて筋道にかなった理想的形態に近づけること、とし<sup>80</sup>、さらに「人間はまた仕事という面で、宇宙と一つになる方向へむかうものであり、従って究極的に人間は、世界が、大いなる規模で、壮麗な作業を続けているのと同じようなかたちで作業を続けることを学び、己れのうちに、世界の大いなる歌声と韻律とが響きわたるのを感じ取る、そういう日がいつかは訪れるはずである。」と、最高の芸術家＝造形家としての精神のあるべき理想の姿を高らかに謳いあげています。

寿岳が訳出した『完全な書物』のなかの「共和国」の概念は、この大理想の一部をなすユートピアであるといえるでしょう。すなわち、ひとつの書物をつくるために多くの技術が結びつくとき、技術が発達するにつれて、一致協力すべきはずのそれぞれの技術が自己主張に走り出す芸術家の悪癖を克服し、書物をつくろうとする芸術家は書物世界全体に貢献するために己れの野心を抑制し、ひとつの巨大な共同作業場において美しい共同制作品を創り出すという理想が、コブデン＝サンダソンが描いた書物のユートピアでした。寿岳が、ある製本組合の業界紙<sup>81</sup>において、「諸君の天職は、書物工芸の各部門の中で、実は最も大切なものであることを忘れては

<sup>79</sup> 寿岳文章訳、コブデン＝サンダスン『完全な書物』、『書物』、向日庵、1936年、pp.11-12.

<sup>80</sup> 生田耕作訳、コブデン＝サンダスン『この世界を見よ』、奢瀨都館、1991年 pp.23-24.

<sup>81</sup> 寿岳「製本者よ、大志を持って」、『京都の製本』No3 新春号、京都製本組合、1954年、pp.14-16.

ならない。」「書物工芸の最肝要のところは、かがりにある事実を深く心に銘じていただき度い。これさえしつかりしておれば何百年でも何千年でも書物は書物であることが可能なのである。表紙など、何度とりかえられても構わないが、内容がばらばらになると、もはや書物は書物としての機能をもたなくなるのだ。この事実は、製本にたずさわる諸君に、自覚と矜持をもたらすと思う。」「製本者よ、大志を持って Binders, be ambitious!」と奮起を促す言葉は、コブデン＝サンダソンが描いた「製本組合」が目標とする理想世界につながるものであるといえるでしょう。

### 向日庵本の今日的意義

寿岳がとらえた「書物の共和国」という概念は、印刷工、植字工、製本者、といった書物の作り手のみならず、著者、読者、出版社、書店員、図書館員といった書物の渡し手、受け手をも内包しています。今日における「書物の共和国」が乗り越えるべき問題を考えるとき、それは書物工芸の問題と切り離しては考えられない「書物と読者」の問題でもあることに気がつきます。「向日庵私版発願記」にみられるように、向日庵本は私家版としての自己矛盾を抱えており、寿岳が意図した書物の正道の実践としての向日庵本には限界がありました。それでもなお、向日庵本が今日に与えている意義があるとすればそれはどこにあるのでしょうか。愛書家によって美書と礼賛され、我が国の最も良心的な私版であると神話化された向日庵本に対する評価を検証し、「書物の共和国」という視座から向日庵本の意義を考える必要があるのかもしれない。

書物の歴史はその発生から未来まで脈々と繋がってゆきますが、どの時代にも永い歴史の通過点としての蹉跎が生まれることは、書物の世界に限ったことではありません。ここで思い起こしたいのは、向日庵本『書物』に収められた、エリック・ギル『書物』が示す「二つの原理と二つの世界の併存」です。美しい書物が特定の読者のための逸品にとどまるのではなく、その美しさが万人のための標準的な書物に生かされるならば、寿岳が向き合った私版が抱える矛盾は解消できるでしょう。書物の将来は読者の選択によって決まりますが、読者のすべてが寿岳のような崇高な理念を持って書物に接しているわけではないにせよ、「二つの原理と二つの世界」のどちらを選択するかは読者の意思に委ねられています。生活のなかで日常的に接する書物や文字の本格を、読者自身が意識し理解するしかないといえるでしょう。そして、書物のつくり手には、読者の賢明な眼を信じて、時代に応じた書物の本格と正統を実践することが求められます。寿岳は、新しい情報技術が出現するたびに書物の現在と将来をあげつらう論議に直面するとき、それに背を向けこそしないが、「言語と文字をもつ人類が、かけがえのないこの地球上の随所で、永い年月をかけて造りあげてきた文化遺産である現在の書物を、ポ

イ棄ての消費財のように扱うようなことは、核兵器同様絶対にゆるさされてはならない自殺・自滅の愚のきわみ」<sup>82</sup>であると述べ、書物の共和国人が歩むべき方向を示しました。

寿岳の向日庵本の刊行の意図は、書物にあらわれた時代の蹉跎を問いただし、理想とする書物の将来を描くための実践にありました。そして、寿岳が描く「書物の共和国」は、書物と戦争の間におこる問題を越えて、国や時代の境なく存在するユートピアであり、人間の大理想とする世界の一部をなすものであるといえるでしょう。書物をめぐる問題のなかには、人間をめぐる問題が潜んでいます。今日において書物に何らかの問題が顕れるとき、わたしたちに求められるのは、その背景にある人間の根本問題を注視し、歩むべき方向、歩みたい方向を選択することではないでしょうか。



向日庵本を製作する寿岳文章・静子夫妻

出典：『寿岳文章しづ著作集 第6巻』春秋社 1970年

<sup>82</sup> 寿岳「序」、『本の正坐』、前掲書、p.11.

編集後記 寿岳文章を中心とした寿岳一家の文化的形成を追究するNPO「向日庵」の活動も三年目をむかえ、新たな展開を見せようとしています。

昨年の晩秋、寿岳文章先生の旧宅「向日庵」の現所有者のご好意により、初めてのリサーチが敢行されました。参加したのは向日市文化資料館の王城玲子氏と里見徳太郎氏、高木博志氏(京都大学人文科学研究所教授)、伊部京子氏(和紙造形家)、中島俊郎(甲南大学名誉教授)の5名でした。

往時をしのばせる端然とした向日庵のなかでも先生の書齋は姿をかえず私たちのまえにありました。弟子のおひとりは「森のような」と書籍が満ちあふれるこの書齋を称しましたが、その形容は正しいでしょう。先生のご関心の在り方が手にとるように分ります。先生ご自身の著書、柳宗悦をはじめとする著名人からの寄贈本の数々、先生が資料とされた文献類が整然と並んでいます。リサーチの目的は貴重な原資料を散逸させずに向日市資料博物館へ移し、保存することにあります。

第一資料として、時代の証言となる膨大な量に及ぶ寿岳先生への書簡類、若き日から綴られた日記、メモ類、知的源泉となった書籍の購入台帳原簿、先生ご夫妻が執筆された新聞、雑誌の記事などのスクラップ・ブック、草稿の未定稿、民藝運動の全貌をしめす『工藝』全巻揃えなど、いずれも初めて見るものばかりで瞠目の想いがありました。これらの原資料をもとに新しい寿岳文章像が提示される日も近いと信じます。貴重な資料を死蔵させることなく、その一部を『向日庵』次号から開示・紹介していきたいと予定しています。

今後の講演会のテーマとして、「ダンテ『神曲』翻訳」、「仏教と寿岳文章」、「柳宗悦の思想」、「聴竹居と向日庵」、「翻訳者としての寿岳しづ」、「ウィリアム・モリスと寿岳文章」、「河上肇と寿岳文章」、「『紙漉村旅日記』を読む」、「寿岳章子、寿岳潤の業績」などが候補としてあがっています。どうかご期待下さい。ご希望のテーマがございましたら事務局までお寄せ下さい。なお、寿岳文章の英文学者としての苗床となった関西学院文学部英文科の教育環境を論じた関西学院大学前学長の井上琢智氏の講演記録は次号に掲載されます。

もうひとつよろこばしいご報告があります。和紙研究でたえずご指導いただいている、同人の伊部京子氏が2019年度、京都市文化功労者の表彰に浴されました。寿岳先生がご存命ならばどんなに喜ばれたことでしょうか。心からお慶びを申しあげます。

私たちの活動にたえずご支援を賜っています皆様方に謝意を表したく存じます。また講演会のためご尽力を惜しまなかった皆様、会場を貸与して下さいました関係者の方々に感謝申し上げます。また本誌の発行については「京都府文化力チャレンジ補助事業」の助成を受けていることを感謝とともに明記しておきたく存じます。

特定非営利活動法人向日庵理事長 中島 俊郎